

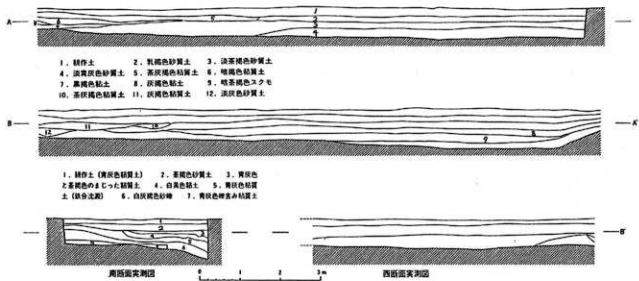
ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-4

1988

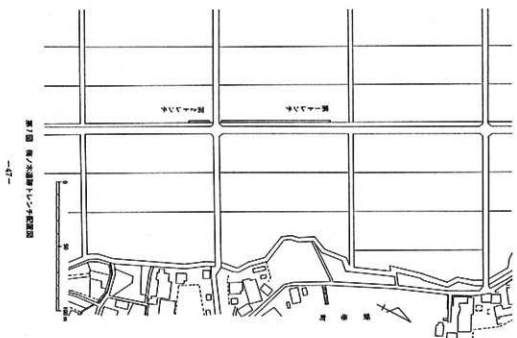
滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 訂 正



聖澤田E 11-10図



## 序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、は場整備事業の拡大とともに、その件数も年々増加しているところであります。こうした状況のもと、調査が工事と並行して円滑に実施できるように鋭意努力しているところです。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和62年度に実施しました県営は場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

## 例 言

1. 本書は昭和62年度県営は場整備事業に伴う近江八幡市半田遺跡、西ノ前・梅ノ木遺跡、草津市山田港遺跡の発掘調査報告書で、昭和62年度に発掘調査し、整理したものである。
2. 本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会、草津市教育委員会の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次のとおりである。

### 滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課長補佐	田口字一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
〃 技師	木戸 雅寿
管理係主任主事	山出 隆

### 財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	古崎 貞一
事務局長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
〃 調査三係長	兼康 保明
〃 技師	三宅 弘
〃 技師	田路 正幸
〃 技師	小竹森直子
総務課長	山下 弘
〃 主任主事	立入 裕子
〃 事務嘱託	柴田 弘子

6. 本書の執筆・編集は、調査担当者田路正幸(第1・2章)、三宅弘(第3章)が行い、第3章については、山本見子・北川亜紀が補助した。
7. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会が保管している。



# 目 次

## 第1章 近江八幡市半田遺跡

1. はじめに	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査経過	2
4. 検出遺構	4
5. 出土遺物	24
6. まとめ	29

## 第2章 近江八幡市西ノ前・梅ノ木遺跡

1. はじめに	37
2. 遺跡の位置と環境	37
3. 調査経過	38
4. 西ノ前遺跡の調査結果	40
(1) 検出遺構	40
(2) 出土遺物	43
5. 梅ノ木遺跡の調査結果	46
(1) 検出遺構	46
(2) 出土遺物	49
6. まとめ	51

## 第3章 草津市山田港遺跡

1. 位置と環境	57
2. 調査	59
(1) 調査に至る経過	59
(2) 調査経過	59
3. 遺構	59
4. 遺物	59
5. まとめ	63

## 挿 図 目 次

### 第1章 近江八幡市平田遺跡

- 第1図 平田遺跡の位置と周辺の遺跡
- 第2図 平田遺跡トレンチ配置図
- 第3図 第1トレンチ遺構配置図
- 第4図 第1トレンチ掘立柱建物SB0101実測図
- 第5図 第1トレンチ井戸SE0101・02実測図
- 第6図 第1トレンチ井戸SE0103・土坑SK0103実測図
- 第7図 第1トレンチ土坑SK0103出土五輪塔
- 第8図 第2トレンチ遺構配置図
- 第9図 第3・4トレンチ遺構配置図
- 第10図 第4トレンチ掘立柱建物SB0401実測図
- 第11図 第4トレンチ土坑SK0401実測図
- 第12図 第5トレンチ遺構配置図
- 第13図 第6トレンチ遺構配置図
- 第14図 第6トレンチ竪穴式住居SH0601実測図
- 第15図 第6トレンチ掘立柱建物SB0601実測図
- 第16図 第6トレンチ掘立柱建物SB0602実測図
- 第17図 第7トレンチ遺構配置図
- 第18図 第7トレンチ土坑SK0703実測図
- 第19図 第8トレンチ遺構配置図
- 第20図 第9・10トレンチ遺構配置図
- 第21図 第9トレンチ掘立柱建物SB0901実測図
- 第22図 第9トレンチ溝SD0901・02土坑SK0901～05実測図
- 第23図 第11トレンチ遺構配置図
- 第24図 出土遺物（1）
- 第25図 出土遺物（2）
- 第26図 出土遺物（3）

### 第2章 近江八幡市西ノ前・梅ノ木遺跡

- 第1図 西ノ前・梅ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡
- 第2図 西ノ前遺跡トレンチ配置図
- 第3図 西ノ前遺跡第1トレンチ遺構配置図
- 第4図 西ノ前遺跡第2・3トレンチ遺構配置図
- 第5図 西ノ前遺跡出土遺物（1）

- 第6図 西ノ前遺跡出土遺物(2)
- 第7図 梅ノ木遺跡トレンチ配置図
- 第8図 梅ノ木遺跡第1トレンチ遺構配置図
- 第9図 梅ノ木遺跡第1トレンチSD0102、SR0101・02西壁断面土層図
- 第10図 梅ノ木遺跡第2トレンチ遺構配置図
- 第11図 梅ノ木遺跡出土遺物

### 第3章 草津市山田港遺跡

- 第1図 山田港遺跡と周辺の遺跡
- 第2図 遺跡位置図(明治25年の地形図)
- 第3図 ビット検出状況
- 第4図 南山田町周辺の小字図
- 第5図 近江栗太郎条里図(『近江栗太郎志』より転載)

## 図 版 目 次

### 第 1 章 近江八幡市半田遺跡

#### 図版一 半田遺跡

1. 遺跡遠景
2. 遺跡近景（西から）

#### 図版二 半田遺跡

1. 第 1 トレンチ全景（東から）
2. 第 1 トレンチ掘立柱建物SB0101

#### 図版三 半田遺跡

1. 第 1 トレンチ溝SD0105
2. 第 1 トレンチ井戸SE0101

#### 図版四 半田遺跡

1. 第 1 トレンチ井戸SE0102・03、土坑SK0103
2. 第 1 トレンチ井戸SE0104

#### 図版五 半田遺跡

1. 第 1 トレンチ井戸SE0103、土坑SK0103
2. 第 1 トレンチ土坑SK0103石組検出状況

#### 図版六 半田遺跡

1. 第 2 トレンチ全景（南から）
2. 第 3 トレンチ全景（南から）

#### 図版七 半田遺跡

1. 第 4 トレンチ全景（北から）
2. 第 4 トレンチ土坑SK0401遺物出土状況

#### 図版八 半田遺跡

1. 第 5 トレンチ東半部全景（東から）
2. 第 5 トレンチ溝群

#### 図版九 半田遺跡

1. 第 6 トレンチ全景（西から）
2. 第 6 トレンチ竪穴式住居SH0601

#### 図版十 半田遺跡

1. 第 6 トレンチ掘立柱建物SB0601
2. 第 6 トレンチ掘立柱建物SB0602

#### 図版十一 半田遺跡

1. 第 6 トレンチ溝SD0601
2. 第 6 トレンチ柱穴群

図版十二 半田遺跡

1. 第7トレンチ全景（東から）
2. 第7トレンチ土抗SK0703

図版十三 半田遺跡

1. 第8トレンチ全景（東から）
2. 第8トレンチ溝SD0801

図版十四 半田遺跡

1. 第9トレンチ全景（東から）
2. 第9トレンチ掘立柱建物SB0901

図版十五 半田遺跡

1. 第9トレンチ溝SD0901・02
2. 第9トレンチ土抗SK0901～03

図版十六 半田遺跡

1. 第9トレンチ土抗SK0903遺物出土状況
2. 第9トレンチ土抗SK0904

図版十七 半田遺跡

1. 第10トレンチ全景（西から）
2. 第11トレンチ全景（東から）

図版十八 半田遺跡

出土遺物（1）

図版十九 半田遺跡

出土遺物（2）

図版二十 半田遺跡

出土遺物（3）

図版二十一 半田遺跡

出土遺物（4）

図版二十二 半田遺跡

出土遺物（5）

図版二十三 半田遺跡

出土遺物（6）

第2章 近江八幡市西ノ前・梅ノ木遺跡

図版一 西ノ前遺跡

1. 遺跡近景（東から）
2. 第1トレンチ東半部全景（東から）

図版二 西ノ前遺跡

1. 第1トレンチ東半部全景（西から）

2. 第1トレンチ西半部全景（西から）

図版二 西ノ前遺跡

1. 第1トレンチ溝SD0101
2. 第1トレンチ土坑SK0101・02

図版四 西ノ前遺跡

1. 第1トレンチ土坑SK0103
2. 第1トレンチ土坑SK0107

図版五 西ノ前遺跡

1. 第1トレンチ土坑SK0109
2. 第2トレンチ全景（東から）

図版六 西ノ前遺跡

1. 第2トレンチ溝SD0201
2. 第2トレンチ溝SD0201遺物出土状況

図版七 西ノ前遺跡

出土遺物（1）

図版八 西ノ前遺跡

出土遺跡（2）

図版九 西ノ前遺跡

出土遺物（3）

図版十 西ノ前遺跡

出土遺物（4）

図版十一 梅ノ木遺跡

1. 遺跡近景（南から）
2. 第1トレンチ全景（南から）

図版十二 梅ノ木遺跡

1. 第1トレンチ溝SD0102
2. 第1トレンチ自然流路SR0101（北から）

図版十三 梅ノ木遺跡

1. 第1トレンチ自然流路SR0101（南から）
2. 第2トレンチ全景（南から）

図版十四 梅ノ木遺跡

出土遺物

### 第3章 早津市山田港遺跡

図版一 山田港遺跡

1. 調査前風景
2. 表土除去作業

図版二 山田港遺跡

1. トレンチ全景（北から）
2. S D 1 検出状況

図版三 山田港遺跡

トレンチ全景（南から）

図版四 山田港遺跡

1. トレンチ西断面（S D 1 北側付近）
2. トレンチ西断面

図版五 山田港遺跡

1. トレンチ南断面（探掘り）
2. 埋め戻し後風景

図版六 山田港遺跡

遺物写真（S D 1 出土遺物）

図版七 山田港遺跡

遺物写真（S D 1 出土遺物）

図版八 山田港遺跡

遺物写真（S D 1 出土遺物）

図版九 山田港遺跡

遺物写真（S D 1 出土遺物）

図版十 山田港遺跡

遺物写真（S D 1 出土遺物）

図版十一 山田港遺跡

トレンチ位置図

図版十二 山田港遺跡

トレンチ平面実測図、断面実測図

図版十三 山田港遺跡

試掘トレンチ位置図

図版十四 山田港遺跡

出土遺物実測図

図版十五 山田港遺跡

出土遺物実測図

図版十六 山田港遺跡

出土遺物実測図

第 1 章 近江八幡市<sup>はんた</sup>半田遺跡



## 1. はじめに

本章は、昭和62年度県営は場整備事業（近江八幡市武佐地区西宿第1工区）に伴う近江八幡市半田遺跡における発掘調査成果の報告である。半田遺跡は、同市西宿町地先に所在し、『昭和60年度滋賀県遺跡地図』<sup>①</sup>によって飛鳥時代を中心とした遺物の散布地として周知されている。また昭和60・61年度の県営は場整備事業に伴う柿木原・蔵ノ町の隣接する遺跡の発掘調査では、弥生時代から中世にいたる各時期の遺構が確認されており、半田遺跡においても、それらに関連する遺構の包蔵が予想されたところである。ここに県営は場整備事業が実施されるにあたって事前に発掘調査を行ない、遺構の保護策を講じることとなった。

調査の実施にあたっては、地元西宿町および同土地改良区をはじめ、関係者の方々には多くの協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

## 2. 遺跡の位置と環境（第1図）

半田遺跡は、近江八幡市西宿町の現集落から北西部の水田地帯にかけて所在する。西宿町は、市の東南部、国道8号線と近江鉄道近江八幡八日市線が交差する南側あたりに位置している。集落の西南方には、瓶割山（標高234.5m）および岩倉山が並び立っており、半田遺跡周辺は、この山塊の北裾末端部の北方にあたる。標高は97m前後である。

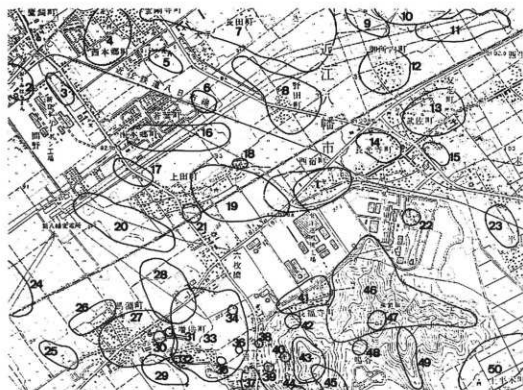
今回の調査地点は、西宿町の西方、国道8号線と新幹線の間の水田地帯に位置し、昭和60年度調査の柿木原遺跡<sup>②</sup>の東側、昭和61年度調査の蔵ノ町遺跡<sup>③</sup>の南側一帯を占めている。

周辺における縄文時代以前の遺跡については、近年の発掘調査によって断片的ながらも徐々にその様相が明らかにされつつある。まず北隣の蔵ノ町遺跡では、旧石器時代のもと考えられる有舌尖頭器が出土し、東方の常衛遺跡では縄文時代の集石土坑などが検出されている<sup>④</sup>。その他、勸学院遺跡<sup>⑤</sup>・金剛寺遺跡<sup>⑥</sup>などで縄文時代の遺物の出土が報告されている。

近江八幡市域において、弥生時代前期の遺物を出土する遺跡には、長命寺御底遺跡<sup>⑦</sup>・堀上遺跡<sup>⑧</sup>などがある。中期では、上田町川ノロ（蛇塚）遺跡<sup>⑨</sup>で後葉に属する竪穴式住居・土坑などが、千僧供町勸学院遺跡では、中葉を中心とした方形周溝墓群が確認されている<sup>⑩</sup>。後期にいたると先の川ノロ（蛇塚）遺跡で引き続き竪穴式住居・方形周溝墓が営まれる。勸学院遺跡を含む千僧供町一帯の遺跡群においても、竪穴式住居、方形周溝墓などが確認されており、それぞれ相当規模の集落を構成したものとと思われる。なお蔵ノ町遺跡でも終末期に属する方形周溝墓が検出されている。

古墳時代で注目されるのは、多種類の形象塚輪を擁する供養塚古墳<sup>⑪</sup>（帆立貝式古墳・全長50m）を中心として、住蓮坊古墳（円墳・径53m）・岩塚古墳（横穴式石室墳）・トギス塚古墳（同）などで構成される千僧供古墳群であり<sup>⑫</sup>、中期から後期における在地の首長墳であろうと評価されている。さらに瓶割山から岩倉山の山麓には、大小多くの後期群集墳が営まれている。千僧供町一帯の遺跡では、古墳時代前期から後期にいたる竪穴式住居群が確認されており、これら古墳群との関連が想定されるところである。

引き続き周辺地域には、白鳳時代の寺院跡と考えられる千僧供廃寺<sup>⑬</sup>や奈良時代から平安時代の掘立柱建物群などが検出されている御館前遺跡<sup>⑭</sup>・金剛寺遺跡<sup>⑮</sup>などが所在している。



第1図 半田遺跡の位置と周辺の遺跡(縮尺25,000分の1)

1. 半田遺跡 2. 三明遺跡 3. 金瀬遺跡 4. 九里氏館遺跡 5. 宮ノ後遺跡 6. 西海道遺跡 7. 金剛寺遺跡 8. 大手前遺跡 9. 宮前遺跡 10. 上出A遺跡 11. 常衛遺跡 12. 御所内遺跡 13. 宮氏館遺跡 14. 上下遺跡 15. 西中遺跡 16. 蔵ノ町遺跡 17. 寒敷遺跡 18. 久野屋敷跡 19. 柿木原遺跡 20. 川ノ口遺跡 21. 上田遺跡 22. 長光寺遺跡 23. 吉ヶ嶽遺跡 24. 赤塚遺跡 25. 小田中遺跡 26. 馬河城址 27. 観音堂遺跡 28. 柿ノ町遺跡 29. 勤学院遺跡 30. 堂ノ内遺跡 31. 供養塚古墳 32. ラカン塚古墳 33. 御館前遺跡 34. 住蓮坊古墳 35. 岩塚古墳 36. トギヌ塚古墳 37. 東出遺跡 38. 妙慈寺庭園(県指定文化財) 39. 妙慈寺古墳 40. 揮海寺庭園(県指定文化財) 41. 町田遺跡 42. 岩倉山北古墳群 43. 長福寺城址 44. 岩倉山南古墳群 45. 上平木古墳群 46・47. 長光寺城跡 48. 瓶割山西古墳群 49. 瓶割山西古墳群 50. 上沢遺跡

中世の城館遺跡では、瓶割山山頂に長光寺城<sup>46</sup>が営まれ、平地では金剛寺城<sup>47</sup>・馬河城<sup>26</sup>などの存在が想定されている。また柿木原遺跡および蔵ノ町遺跡においては鎌倉時代を中心とする掘立柱建物が検出されており、とくに蔵ノ町遺跡の建物群はこの地の土豪である上田氏との強い関連性が指摘されている<sup>49</sup>。

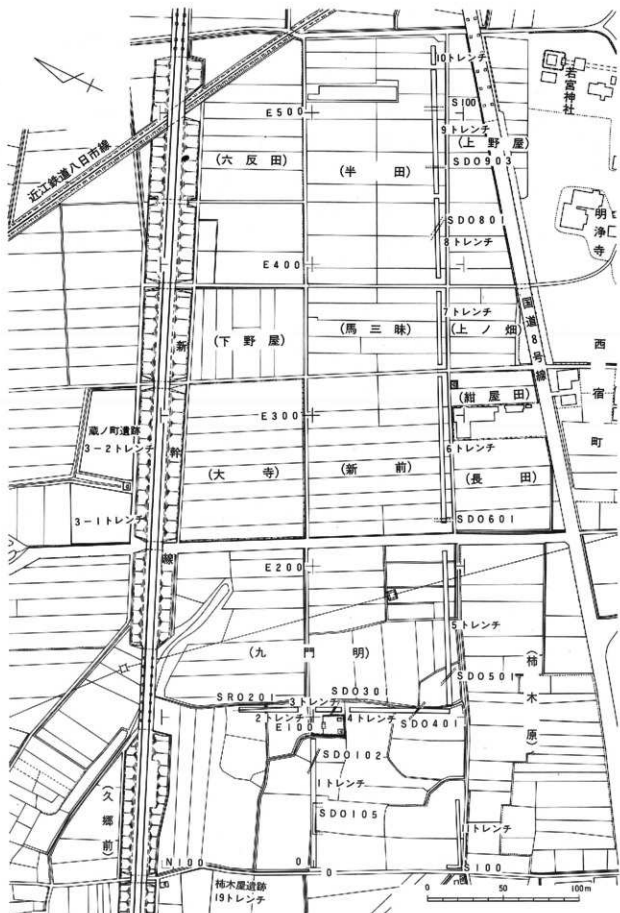
このように半田遺跡の周辺には、各時期の多くの遺跡が密集しており、この地域が古くから重要な位置を占めて来たことが容易に察せられる。このことは、現武佐町付近で旧中山道と「八風街道」が交差し、武佐宿が設置されるなど交通の要衝として重視されて来たことも無関係ではないと考えられる。

### 3. 調査経過(第2図)

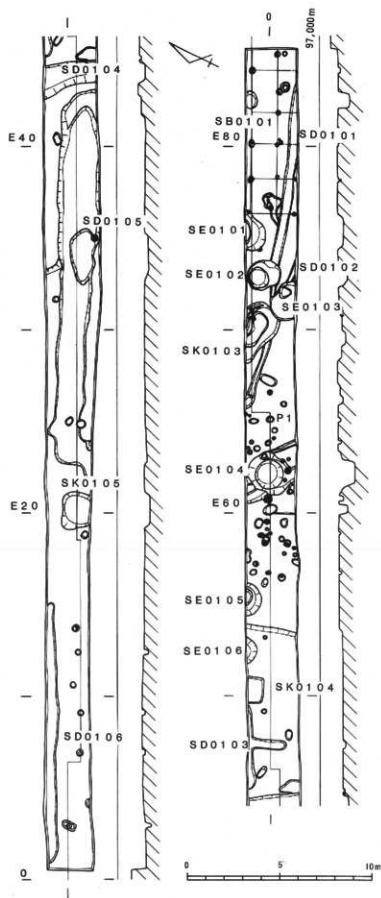
今回は場整備対象地域は、半田遺跡の西側部分から一部柿木原遺跡におよぶ、国道8号線および新幹線にはさまれた南北約250m東西約500mにわたる範囲である。

発掘調査に先立ち、は場整備による切土面と新設の排水路敷に沿って、幅2m長さ2~3mの試掘坑を104箇所を設定し、各々遺構・遺物包含層の有無とその堆積状況などの観察を行なった。この試掘結果に基づいて、今年度は新設排水路敷についての発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、第1トレンチより順次機械力によって表土を除去したのち、人手による遺構検出と掘り込み、写



第2図 半田道跡トレンチ配置図



第3図 第1トレンチ遺構配置図

真撮影、実測作業などを行なった。各トレンチにおいては、数時期の遺構が重複するが、第6トレンチの一部を除いては、いずれも最終地山面での検出を行なっている。

試掘調査は昭和62年5月と7月（一部12月）に、発掘調査は昭和62年8月から12月に実施し、そのうち遺物整理と報告書作成作業を行なった。

なお基準点の設置にあたっては、第1トレンチの西端に仮原点を置き、排水路の中心線を東西軸とし、それと直交する線を南北軸とした。

#### 4. 検出遺構

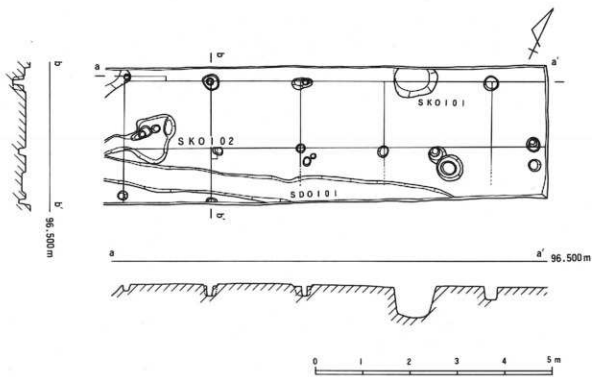
##### 1) 第1トレンチ

(第3～7図・図版二～五)

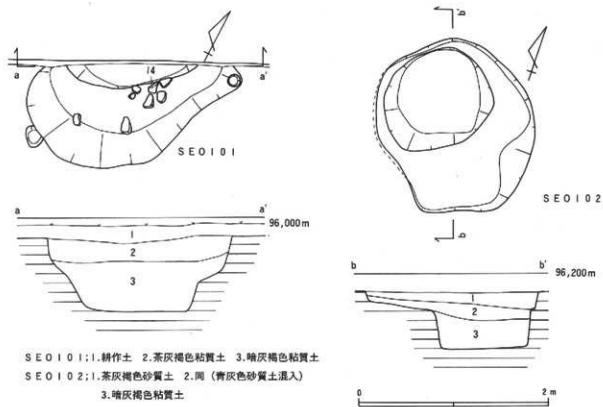
今回の調査範囲のうち、最も西側に設けたトレンチである。幅2.5～3m、長さ85mを測る。トレンチ周辺は、平行する仮設道路設置の際、既に耕作土の一部が除去されていた。したがって耕作土の本来の厚さは明らかではないが、遺構の検出状況は耕土面下と云って良く、トレンチの東側ほどその傾向が強い。遺構は黄褐色砂質土の地山面を掘り込んで営まれている。遺構面は全体にわたって後世の削平を受けており、遺物包含層は存在しない。遺構面の標高は東端で96.0m、西端で95.5mを測る。検出した遺構には、掘立柱建物・溝・井戸・土坑・柱穴などがある。

##### イ) 掘立柱建物

SB0101（第4図・図版二） トレンチ東端部で検出した。部分的に柱穴を欠いているが、東西4間以上、南北2間以上の掘立柱建物と思われる。方位は、南北柱

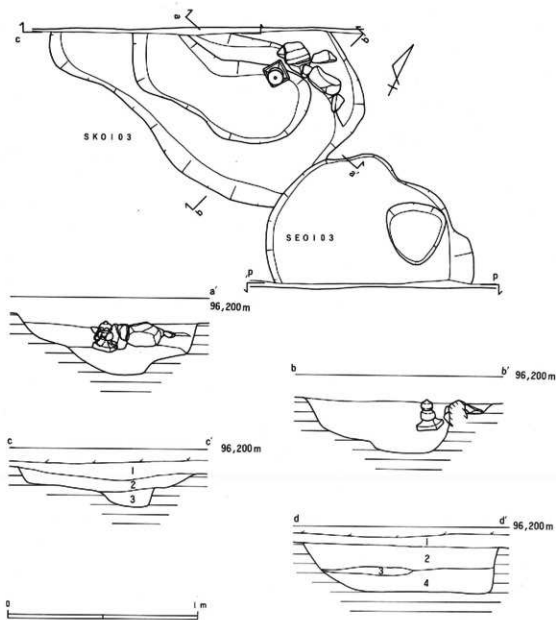


第4図 第1トレンチ掘立柱建物SB0101実測図



SE0101; 1.耕作土 2.茶灰褐色粘質土 3.暗灰褐色粘質土  
 SE0102; 1.茶灰褐色砂質土 2.間(青灰色砂質土混入)  
 3.暗灰褐色粘質土

第5図 第1トレンチ井戸SE0101・02実測図



SK0103; 1. 暗茶灰色粘質土 2. 茶灰褐色粘質土 3. 暗灰褐色粘質土  
 SE0103; 1. 耕作土 2. 茶灰褐色粘質土 3. 青灰色砂質土 4. 暗灰褐色粘質土

第6図 第1トレンチ井戸SE0103・土坑SK0103実測図

列でN-25°-Wを示す。柱穴は径20~35cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは15~25cmである。柱痕を残すものは、径約15cmを測っている。柱間距離は、東西柱列で西から1.84m・1.88m・1.80m・(2.28m)、南北柱列で北から1.46m・1.35mを測る。東西第二列に比して、第一列の柱穴規模が大きいことより、第一列は北の側柱と考えられる。三列目以下が総柱構造を成すかどうかは明らかでない。

東西第一列東端の柱穴より、須恵器・土師器片が出上しているが、直接の時期を窺うには足りない。

ロ) 溝

SD0101 トレンチ東部で検出した幅50~60cm、深さ10cm前後の素掘りの溝であり、長さはトレンチ内で約12

mを測る。方位はN-108° -Wを示す。西端は、井戸SE0103に切られてい  
る。埋土は、暗茶褐色砂質土で陶器の鉢口縁部片・青磁の碗口縁部片など  
が出上している。

SD0102 SD0101の南西側で検出した幅35~50cm、深さ10cm前後の素掘  
りの溝である。長さは、トレンチ内で8.5mを測る。方位は、N-96° -W  
を示す。井戸SE0103・土坑SK0103に切られるが、溝SD0102との先後関係  
は明らかでない。埋土は黒褐色粘質土で、灰釉陶器の瓶子底部(1)が出  
土している。

SD0103 トレンチ中央付近で検出したT字形に交差する、本来は二本  
の溝である。土師器の皿口縁部片が出土している。

SD0104 SD0103の西側で検出した幅1.2~1.8m、深さ20cm前後の素掘  
りの溝である。長さは27m以上を測る。方位はN-35° -Wを示すが、直線  
的な溝かどうかは不明である。埋土は暗茶褐色砂質土で、信楽焼の壺口縁  
部(2)や瀬戸・美濃産陶器と思われる卸皿(3)などが出土している。

SD0105 (図版三-1) トレンチ中央から西部にかけて検出した幅1.5  
~2.5m、検出面からの深さ30~40cmの溝である。長さは、東西で約21m  
を測り、東西端でそれぞれ南側へほぼ直角に屈曲するものと思われる。方  
位は、N-64° -Wを示す。東端では、二段の肩部を有し、中央付近ではやや深い溜り状となっている。埋土は黒  
褐色粘質土の単層であり、本来帯水していたものと思われる。土師器の皿(4)、焙烙、陶器の壺(5・7)・  
甕(6)・鉢(8・9)・碗(10)・香炉(11)などが出土している。

#### ハ) 井戸

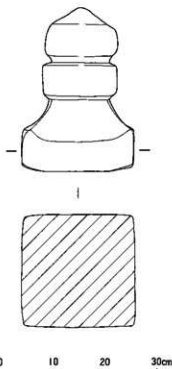
SE0101 (第5図・図版三-2) 掘立柱建物SB0101の北西側で検出した、二段掘りの円形を呈する井戸跡と  
思われる。北半部は、調査区外のため未検出である。東西幅2.1m、南北幅1.5m以上、深さ80cm以上を測る。埋  
土は上下二層に分れ、上層は茶灰褐色粘質土、下層は暗灰褐色粘質土である。土師器の焙烙(12)、陶器の楕鉢  
(13)・甕(14)などが出土している。井戸枠などの施設は見られなかった。

SE0102 (第5図・図版四-1) SE0101の西側に位置する、東西径1.6m、南北径1.8mの楕円形を呈する井  
戸跡と思われる。底部は二段に掘り込まれ、深さは検出面より60cmを測る。埋土は、上層より茶灰褐色砂質土  
(10cm)、青灰色砂質土を混入する同質土(20cm)、暗灰褐色粘質土(30cm)である。土師器の皿(15・16)、  
陶器の鉢(17)などが出土している。井戸枠などは認められなかった。

SE0103 (第6図・図版五-1) SE0102の南側に位置する。南半部は調査区外で未検出である。径2.2m前後  
の円形を呈するものと思われる。深さは検出面より50cmを測る。埋土は、上層が茶灰褐色粘質土、下層が暗灰褐  
色粘質土に大別できる。土師器の皿などが出土している。井戸枠などは認められなかった。

SE0104 (図版四-2) トレンチ東半部中央付近に位置する。径2.3~2.4mの円形を呈する井戸跡と考えら  
れる。深さは、検出面より95cmを測る。埋土は、三層に大別でき、上層より茶灰褐色砂質土・同粘質土・灰褐色  
粘質土である。須恵器の甕(18)・杯(19)、土師器の皿(20~22)・焙烙・陶器の鉢(23)・砥石(92)など  
が出上している。井戸枠などの施設は認められなかった。

SE0105 SE0104の約7m西方に位置する。北半部は調査区外のため未検出であるが、径1.7m前後の円形を呈



第7図 第1トレンチ土坑SK0103出土五輪塔

するものと考えられる。底部は二段に掘り込まれ、深さは検出面より65cmを測る。埋土は、上層が茶灰褐色砂質土、下層が暗灰色粘質土である。黒色土器・土師器片が出土している。

SE0106 SE0105の西側に位置する。北半部は調査区外である。径1.5m前後、深さは検出面より50cmを測る。出土遺物は認められなかった。

## ニ) 土坑

SK0101 トレンチ東端部に位置する。径90cm前後の円形を呈すると思われ、深さは検出面より70cm前後を測る。土師器の焙烙(24)、瓦質土器の羽釜(25)、陶器の壺(26)、甕(27)などが出土している。

SK0102 掘立柱建物SB0101の西部に位置する、東西1.6m・南北1mの不定形の土坑である。深さは、5~10cmを測る。土師器片が出土している。

SK0103 (第6図・図版四-1・五) 井戸SE0102および03の西側に位置する。南北幅2.2m・東西幅3.0m以上の長方形を呈する。中央部は一段落ち込んでおり、深さは検出面より50cmを測る。北辺部には、東西90cmにわたって15~40cmの花崗岩質の自然石が一段積まれている。西端の石に接して五輪塔の残欠(第7図)が出土しているが、本遺構の廃絶後に投棄されたものと考えられる。埋土は、上層より暗茶灰色粘質土・茶灰褐色粘質土・暗茶褐色粘質土である。陶器の摺鉢(28~29)・甕(30)などが出土している。検出位置から推して、井戸SE0103に伴う「洗場」的な施設とも考えられ、石積みは「足場」の機能を果たしていたものと考えられる。

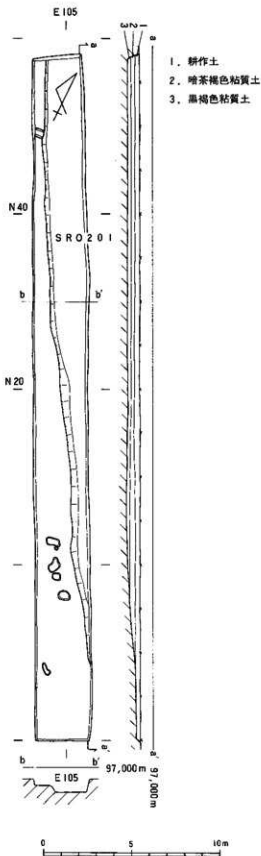
SK0104 井戸SE0106と溝SD0103の間に位置する。東西幅1.4m、南北幅90cm以上の方形もしくは長方形を呈すると思われる。深さは検出面より15cmを測る。陶器片が出土している。

SK0105 溝SD0105の西側に位置する。東西幅2.0m、南北幅1.5m以上の隅丸方形を呈するものと考えられる。深さは検出面より25cmを測る。土師器の焙烙、陶器の甕(31)などが出土している。

## ホ) 柱穴

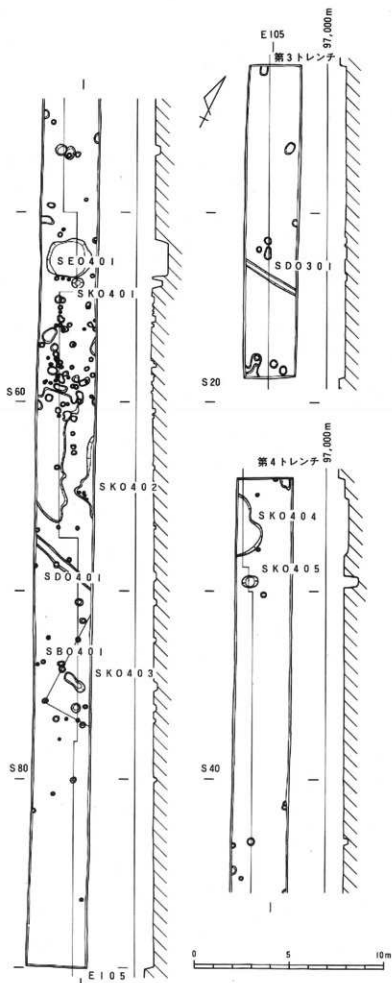
トレンチのはば全域にわたって、大小数多くの柱穴が検出された。とくに、土坑SK0104の周辺に密集しており、本来は掘立柱建物を構成したものであるが、調査区の狭小なこともあり、その配置を明らかにできなかった。

各柱穴の埋土より、須恵器・土師器・黒色土器片などが出土し



第8図 第2トレンチ遺構配置図





第9図 第3・4トレンチ遺構配置図

ているが、図示し得たのはP1の土師器の皿(32)のみである。

## 2) 第2トレンチ(第8図・図版六-1)

今回の調査範囲のうち、最も北側に設けた幅3m・長さ39mの南北方向のトレンチである。遺構は、耕作土直下の黄青灰色砂質土上面で検出した。遺構面の標高は、95.8~96.0mを測る。検出した遺構には、自然流路と小規模な土坑・溝がある。

### イ) 自然流路

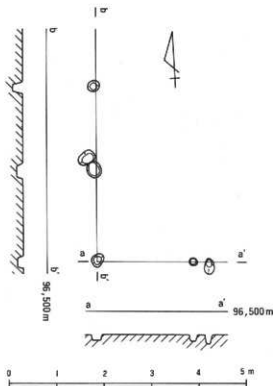
SR0201 西肩部のみを検出した。長さは34m以上・幅2m以上である。深さは、検出面より40cm以上を測る。主軸はやや北西方向を示す。埋土は、上層が暗茶褐色砂質土、下層が黒褐色粘質土である。南部上層より、黒色土器の碗(33・34)が出土している。おおむね室町時代までは、流路として機能していたものと考えられる。

## 3) 第3トレンチ(第9図・図版六-2)

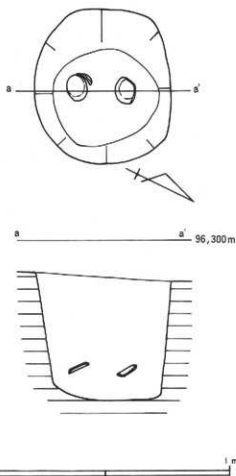
第2トレンチの南側に設定した、幅2.5m・長さ16.5mの南北方向のトレンチである。遺構面は、耕作土直下の黄青灰色砂質土の上面である。同面の標高は、96.0m前後を測る。検出した遺構には、溝・小土坑などがある。

### イ) 溝

SD0301 幅40cm前後、長さ3.2m以上、深さ10cm前後の素掘りの溝である。方位は、N-86°-Wを示す。埋土は、黒褐色粘質土で遺物の出土は見られない。溝の検出位置・規模・方位・埋土の状況より推して、第1トレン



第10図 第4トレンチ掘立柱建物SB0401実測図



第11図 第4トレンチ土坑SK0401実測図

チの溝SD0102に連続する可能性が強く、同一の溝とすればその延長は43.5m以上となる。

#### 4) 第4トレンチ (第9~11図・図版七)

第3トレンチの南側に設定した幅3m・長さ60mの南北方向のトレンチである。遺構は、耕作土直下の黄褐色砂質土上面で検出したが、全体に後世の削平を受けているものと思われる。遺構面の標高は、96.0~96.2mを測る。検出した遺構には、掘立柱建物・溝・井戸・大小の土坑・柱穴群などがある。

##### イ) 掘立柱建物

SB0401 (第10図) トレンチ南部で検出した東西1間以上・南北2間以上の掘立柱建物である。方位はほぼ磁北方向を示す。柱穴は径10~30cmのはば円形を呈し、深さは10~25cmを測る。柱間距離は、東西が2.04m・南北列が南から2.0m・1.8mである。柱穴からの出土遺物は認められず、築造時期については明らかでない。

##### ロ) 溝

SD0401 掘立柱建物SB0401の北側で検出した幅40~50cm・深さ15cm前後の裏掘りの溝である。方位は、N-70°-Eを示す。長さは、トレンチ内で4mである。埋上は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土は見られない。

##### ハ) 井戸

SE0401 トレンチ中央部に位置する。南北径2.0m、東西径2.4mの井戸跡と思われる。深さは、検出面より62cm以上を測る。埋土は、上層より暗茶褐色粘質土・径2~3cmの砂礫・暗灰色粘質土である。最下層まで掘削したところで湧水したために底部は未検出である。井戸神などの施設は認められなかった。暗灰色粘質土中より須恵器の蓋つまみ部(35)・土師器の皿片などが出土している。

##### ニ) 土坑

SK0401 (第11図・図版七-2) 井戸SE0401の南側に位置する。短径56cm・長径62cm・底径40cmの楕円形を呈する。深さは、検出面より50cmを測る。埋土は、暗茶褐色粘質土で土師器の皿(36~40)が出土している。

SK0402 トレンチ南部の溝SD0401の北側に位置する。東部は、調査区外にあり未検出である。南北幅4.4m・東西幅1.0m以上を測る。中央部西側の張り出し部に、径15cm程度の自然石が認められた。土師器の皿(41)などが出土している。

SK0403 掘立柱建物SB0401の内側に位置する。短径56cm・長径1.26mの長円形を呈し、深さは検出面より20cm前後を測る。黒色土器片などが出土している。

SK0404 トレンチ北端部に位置する。南北幅3.3m以上・東西幅1.3m以上、深さは検出面より20cm以上を測る。遺物の出土は認められない。

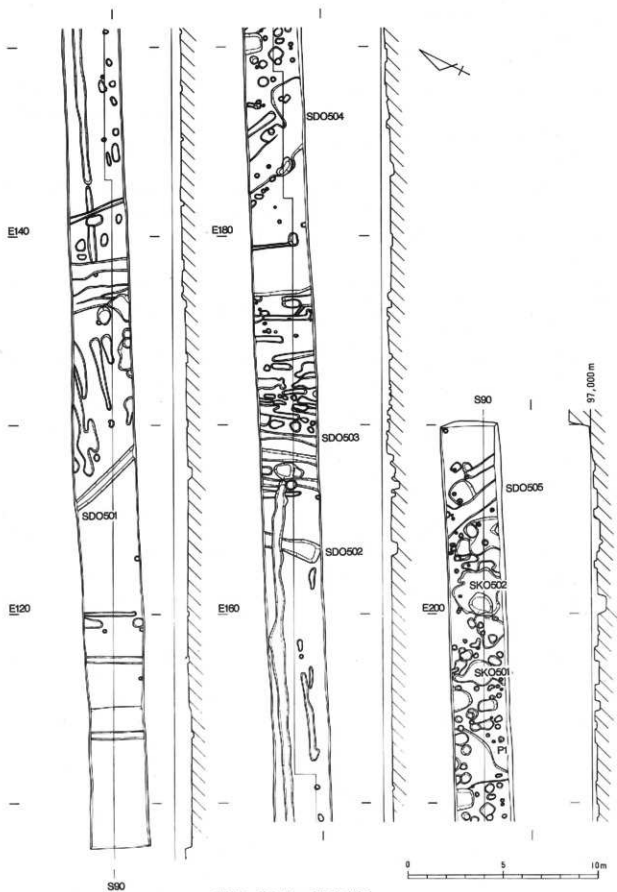
SK0405 SK0404の南側に位置する短径62cm・長径86cmの楕円形を呈する。深さは、検出面より74cmを測る。遺物の出土は認められない。

##### ホ) 柱穴群

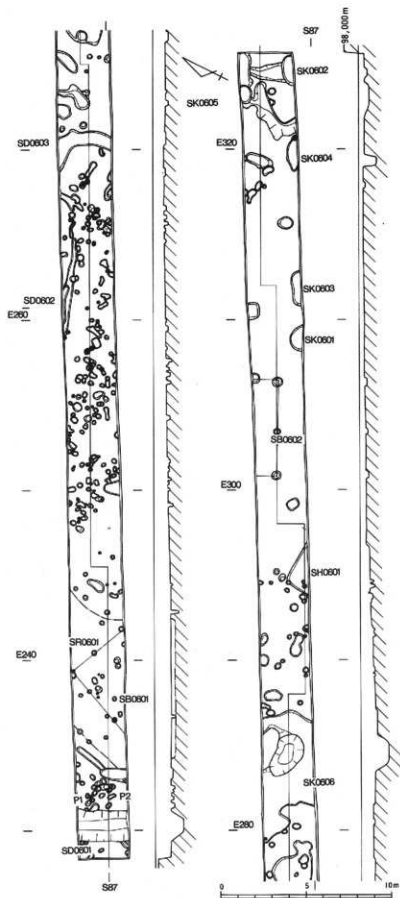
トレンチ中央部SE0401の南側を中心に、径20~50cmの多くの柱穴が認められた。本来、何期かにわたる掘立柱建物を構成したものであるが、その配置は明らかにできなかった。各柱穴からの顕著な出土遺物も見られない。

#### 5) 第5トレンチ (第12図・図版八)

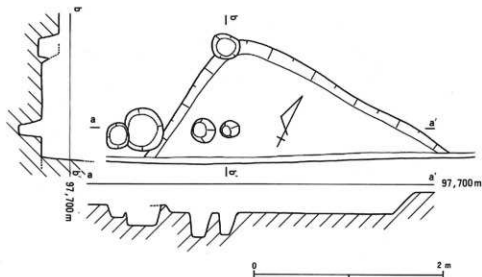
第4トレンチ南端東側に直交する幅3m・長さ102.5mを測る東西方向のトレンチである。基本層序は、上層



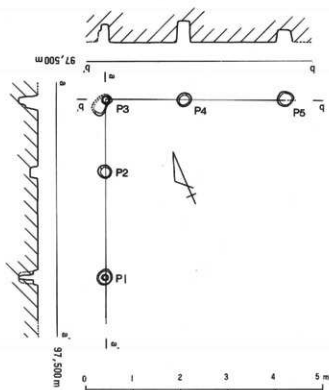
第12図 第5トレンチ連続配置図



第13図 第6トレンチ遺構配置図



第14図 第6トレンチ壁穴式住居SH0601実測図



第15図 第6トレンチ柱立建物SB0601実測図

の出土は見られない。

SD0503 トレンチ中央付近で検出した幅40cm前後・深さ5～6cmの浅い溝である。方位は、N-20°-Wを示す。長さは、トレンチ内で3mである。埋土は旧耕作土と思われる灰褐色土で、陶器片(42)が出土している。本溝の周辺には、同様の規模・方位を有する溝が何条か認められ、旧田面における耕作に伴うものと考えられる。

より耕作土・灰褐色砂質土(客土と思われる。)・暗茶褐～黒褐色砂質土である。遺構面は、黄～茶褐色砂質土の上面で、標高は西端で96.0m、東端で97.0m前後を測る。本調査区周辺は、後世の削平が顕著であり、検出した遺構も耕作に伴う溝・土坑が多く見られ、遺物の出土も僅少であった。

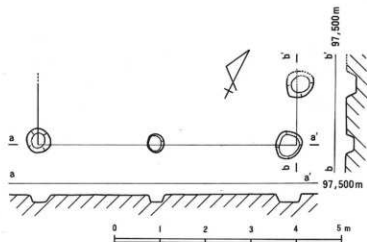
イ) 溝

SD0501 トレンチ西部に位置する幅50～60cm・深さ20cm前後の素掘りの溝である。長さは、トレンチ内で6.3mを測る。方位はN-70°-Wを示す。埋土は暗茶褐色粘質土であり、遺物の出土は見られない。検出位置・規模・方位・埋土の状況から推して、第4トレンチの溝SD0401に連続するものと思われ、その延長は36m以上となる。

SD0502 トレンチ中央西寄りで検出した幅70cm～1m・深さ30cmの南北方向の溝である。トレンチ南壁付近で途切れている。長さは、トレンチ内で3.1mである。遺物

また、本溝の西側の溝から東へ約8.5mにわたって遺構面が15～20cm周辺より高くなっており、旧田面の区画を示すものと考えられる。

SD0504～05 トレンチ東部に位置するN-60°～65°-Wを示す溝である。04は幅1.5～3.4m・深さ10cm前後、05は幅90cm・深さ15cm前後を測る。両溝とも出土遺物は認められない。いずれも北西方向へ流れる小規模な流路跡と考えられる。



第16図 第6トレンチ掘立柱建物SB0602実測図

#### ロ) 土坑

SK0501～02 トレンチ東部に位置する。円もしくは不整形の土坑である。01は径1.4m・深さ22cm、02は径2.6m・深さ60cmを測る。埋土はいずれも暗茶褐色砂質土で、遺物の出土は認められなかった。

両土坑の周辺には、大小多くの不定形の土坑や落ち込みが認められるが、その性格・時期ともに不明な点が多い。

### 6) 第6トレンチ (第13～16図・図版九～十一)

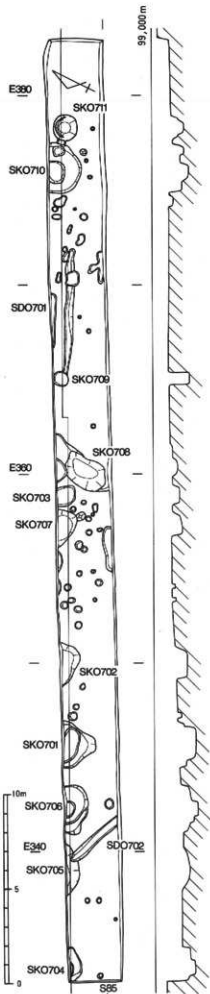
農道を挟んで第5トレンチの東側に設けた、幅3m・長さ97mの東西方向のトレンチである。基本層序は、上層より耕作土(15～20cm)・暗灰色砂質土(20cm前後)・黒褐色砂質土(15～20cm)である。黒褐色砂質土の上層からの遺構も部分的に認められるが、主として西半部では茶褐色砂質土、東半部では砂礫層上面で遺構の検出を行なった。遺構面の標高は、トレンチ西端で97.0m、東端で97.6m前後を測る。なお、トレンチ西部で東西幅約7.2mにわたって黒褐色砂質土の落ち込みが認められたため、上面遺構の調査終了後同層を除去したところ、深さ25cm前後の自然流路跡(SR0601)と考えられた。検出した遺構には、竪穴式住居・掘立柱建物・溝・土坑・柱穴群などがある。

#### イ) 竪穴式住居

SH0601 (第14図・図版九-2) トレンチ東部で、北西隅部を検出した。南側の大部分は、調査区外のため未検出であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。北辺2.6m以上、西辺1.6m以上を測る。方位は、西辺でN-8°-Eを示す。床面までの深さは、検出面より15cm前後を測る。床面の西辺寄りに径20cmの柱穴が二基認められたが、住居に伴うものかどうかは明らかでない。壁溝・屋内土坑・焼土面などは、検出部分においては認められなかった。埋土も、黒褐色砂質土が確認できるのみである。土師器の甕が出土しているが、小片のため図示できなかった。

#### ロ) 掘立柱建物

SB0601 (第15図・図版十一-1) トレンチ西部で検出した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物である。方位は、南北柱列でN-23°-Eを示す。柱穴は径30cm前後の円形を呈し、深さは検出面より40cm前後を測る。径15cm程の柱痕を残すものがある。柱間距離は、P1～P2間が2.2m、P2～P3間1.5m、P3～P4間1.64m、P4～P5間2.1mを測る。P5より土師器片が出土しているが細片のため、図示できなかった。



第17図 第7トレンチ遺構配置図

SB0602 (第16図・図版十一-2) トレンチ東半部、堅穴式住居S H0601の東側で検出した東西2間、南北1間以上の南北棟と思われる掘立柱建物である。方位は、南北柱列で $N-26^{\circ}-W$ を示す。柱穴は径40~50cmの円形を呈し、深さは検出面より15cm前後を測る。柱間距離は、P1~P2間2.54m、P2~P3間2.98m、P3~P4間1.34mである。いずれの柱穴よりも出土遺物は認められなかった。

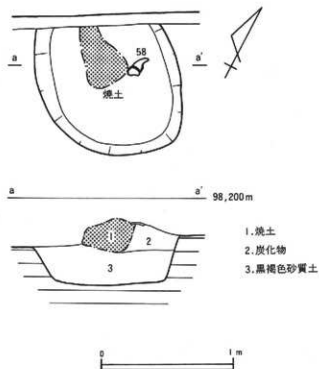
ハ) 溝

SD0601 (図版十一-1) トレンチ西端で検出した、断面台形状の素掘りの溝である。幅1.8m前後、長さ3m以上、深さは検出面より70cm前後を測る。方位は $N-26^{\circ}-W$ を示すが、そのまま直線的に延びるものがどうかは明らかでない。埋土は、比較的良好に締った暗茶褐色砂質土である。須恵器の坏(44)、黒色土器の椀(45)などが出土している。

SD0602 トレンチ西部で検出した、幅30~60cm、長さ5.2m以上、深さ6~10cmの溝である。東端は塗切れている。顕著な出土遺物は認められない。

SD0603 SD0602の東側に位置する幅80cm~1m、長さ3m以上、深さ15cm前後のやや湾曲する溝である。遺物の出土は認められなかった。

ニ) 土坑



第18図 第7トレンチ土坑SK0703実測図



SK0601 トレンチ東部、掘立柱建物SB0602の東南方に位置する。径1.5m前後の円形を呈すると思われるが南半部は未検出である。深さは、検出面より30cm前後を測る。埋土は灰色砂礫で、施釉陶器(46)、染付磁器(47)などが出土している。

SK0602 トレンチ東端で検出した。径1.8m前後の円形を呈すると思われるが、南半部は未検出である。深さは、1.1m以上を測る。埋土は、上層が灰色砂礫、下層は砂礫の混入する灰色粘質土である。陶器(48)などが出土している。

#### ホ) 柱穴群(図版十一・二)

トレンチ西半部一帯で多くの柱穴を検出した。各柱穴は、径20~50cmの円もしくは楕円形を呈している。柱穴相互に重複するものも多く認められ、本来数時期の掘立柱建物を構成していたものと思われるが、調査区が狭小なこともあって、その配置を明らかにできなかった。P1・P3より、須恵器の坏(49・50)などが出土しているが、大半の柱穴では顕著な出土遺物は見られなかった。

#### ヘ) 自然流路

SR0601 トレンチ西部で検出した、幅7.2m長さ4.8m以上の南北方向の自然流路跡と考えられる。埋土は黒褐色砂質土で、深さは検出面より25cm前後を測る。土師器片が出土しているが、詳細は不明である。掘立柱建物SB0603の柱穴が埋土上面より掘り込まれており、同建物築造時には埋没していたことになる。

### 7) 第7トレンチ(第17~18図・図版十二)

第6トレンチの東側に設定した幅3m・長さ50mの東西方向のトレンチである。基本層序は、上層から耕作土(一部床土を含む。10~20cm)・暗茶褐~暗灰色砂質土(20cm前後)・黒褐色砂質土(25~35cm)である。遺構検出は、黄~茶褐色砂質土の上面で行なったが、一部砂礫層となるところがある。遺構面の標高は、トレンチ西端で97.6m、東端で98.0m前後を測る。検出した遺構には溝・土坑などがある。

#### イ) 溝

SD0701 トレンチ東部の北壁際で検出した。幅30cm以上、長さ2.9m以上を測る。あるいは土坑の一隅部にあたるものかも知れない。深さは、検出面より17cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、土師器の壺片が出土している。

SD0702 トレンチ西部で検出した幅40~55cm、長さ3.2m以上、深さ5~20cmの素掘りの溝である。方位は、N-67°-Wを示す。西側は、土坑SK0705によって削平されている。黒褐色砂質土を埋土とする。遺物の出土は認められなかった。

#### ロ) 土坑

SK0701 トレンチ中央部西寄りで検出した径2.5m前後の不整形円形を呈すると思われる土坑である。底部は二段に掘り込まれ、深さは中央部で検出面より1.0mを測る。埋土は、上層が暗茶褐色砂質土、下層が暗灰色砂礫層で中間に礫層がブロック状に堆積している。上層を中心に、陶器の摺鉢(55)・軒平瓦(57)の他、多量の瓦片などが出土している。

SK0702 土坑SK0701の東側に位置する。東西幅2.4m・南北幅90cm以上の不整形円形もしくは隅丸方形を呈するものと考えられる。北半部は未検出である。深さは、検出面より70cmを測る。埋土は、無秩序に堆積する砂礫である。土師器および須恵器の細片が出土している。

SK0703(第18図・図版十二・二) トレンチ中央部で検出した南北径1.1m、東西径1m以上の楕円形を呈すると思われる土坑である。深さは、検出面より30~40cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、上面には平面径30cm厚

さ25cmにわたって焼土塊が認められたが、土坑の底部や壁面が火熱を受けた痕跡は認められなかった。この焼土塊に接して、土師器の甎(58)が出土している。

SK0704~11 トレンチ全域にわたって、数基の土坑が認められた。形態は、円形を呈するものが大半である。規模は、径80cm(SK0709)から2.6m(SK0710)を測るものである。いずれも黒褐色砂質土上面から掘り込まれており、深さは同面より50cm~1.2mを測る。底部を二段に掘り込むものがある。埋土は、暗灰色砂質土と砂礫層などで、両層が無秩序な堆積を示すものが多い。いずれの土坑からも、顕著な出土遺物は認められなかった。

#### 8) 第8トレンチ (第19図・図版十三)

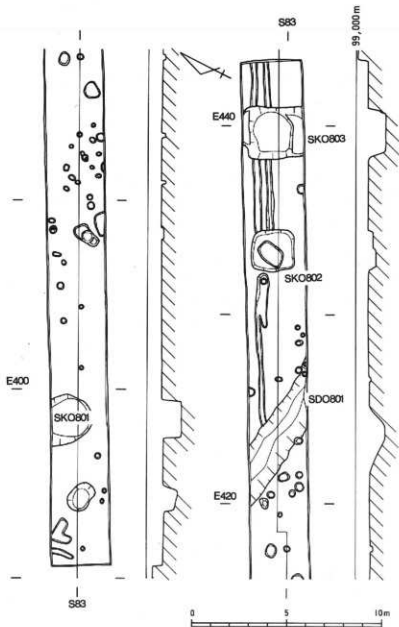
第7トレンチの東側に設定した、幅3m・長さ53mの東西方向のトレンチである。基本層序は、上層より耕作土(15cm前後)・床土(10~15cm)・黒褐色砂質土(15~25cm)である。遺構の検出は、茶褐色砂質土の上面で行なった。遺構面の標高は、トレンチ西端で98.1m、東端で98.3m前後を測る。検出した遺構には、溝・土坑などがある。

##### イ) 溝

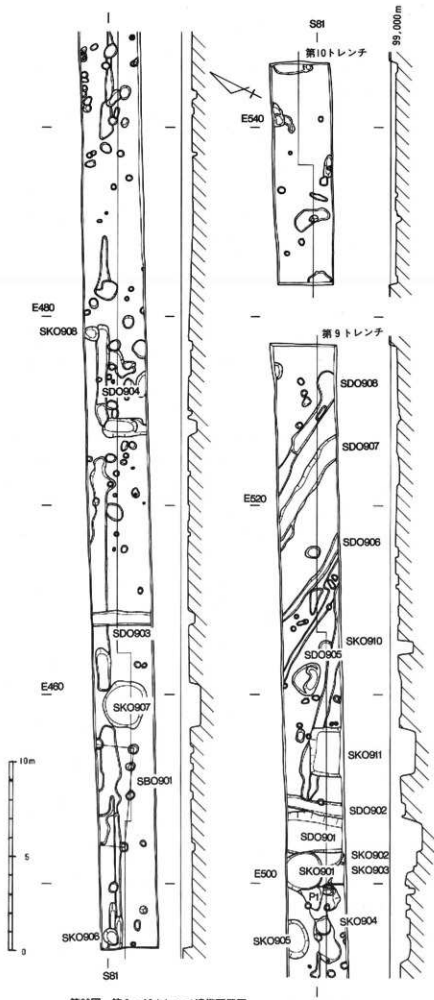
SD0801(図版十三-2) トレンチ中央部で検出した幅2.0m・長さ4.8m以上の素掘りの溝である。方位は、N-83°-Wを示す。黒褐色砂質土上面より掘り込まれており、深さは1.0mを測る。断面は、おおむねV字形を呈している。埋土は暗茶褐色砂質土であり、土師器の甎、須恵器片などが出土している。

##### ロ) 土坑

SK0801 トレンチ西部で検出した、東西径2.6m・南北径2.1m以上の円形を呈すると思われる土坑である。黒褐色砂質土上面より掘り込まれており、土坑内に灰色砂礫が不規則に堆積している。深さは上面より1.2m以



第19図 第8トレンチ遺構配置図



第20図 第9・10トレンチ遺構配置図

上を測り、底面は未検出である。施軸陶器(59)・染付磁器(60)・瓦片などが出土している。

SK0802 トレンチ東部で検出した、一辺2.2mの隅丸方形を呈する土坑である。底部は長径1.5m、短径1mにわたって二段に掘り込まれており、深さは検出面より30cmを測る。埋土は暗灰色砂礫で、土師器・黒色土器片などが出土している。

SK0803 トレンチ東端付近の土坑SK0802の東側に位置する東西幅2.7m、南北幅3.0m以上の隅丸方形を呈すると思われる土坑である。北辺と南辺は二段に掘り込まれている。黒褐色砂質土の上面より掘り込まれており、深さは同面より1.4mを測る。埋土は、上層より暗茶褐色砂質土・茶褐色砂質土・明茶褐色砂質土である。染付磁器(61~64)などが出土している。

## 9) 第9トレンチ(第20~22図・図版十四~十六)

第8トレンチの東側に設定した幅3m・長さ82mの東西方向のトレンチである。基本層序は、上層より耕作土(15cm前後)・床土(10cm前後)・暗茶褐色砂質土(15~20cm)である。遺構の検出は、茶褐色砂質土の上面で行なった。遺構面の標高は、98.4~98.5mを測る。検出した遺構には、掘立柱建物・溝・土坑などがある。

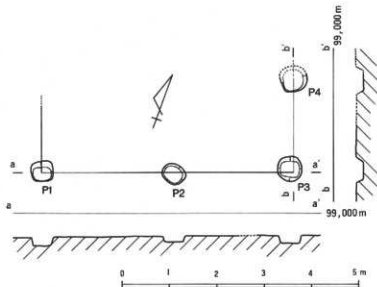
### イ) 掘立柱建物

SB0901(第21図・図版十四-2) トレンチ西部で検出した、東西2間・南北1間以上の南北棟と思われる掘立柱建物である。方位は南北の柱列で、N-21°-Wを示す。柱穴には、径50cm前後の円形と隅丸方形を呈するものがある。深さは、検出面より15~20cmを測る。柱間距離は、P1~P2間2.80m、P2~P3間2.56m、P3~P4間1.96mである。柱穴からの遺物の出土は認められなかった。

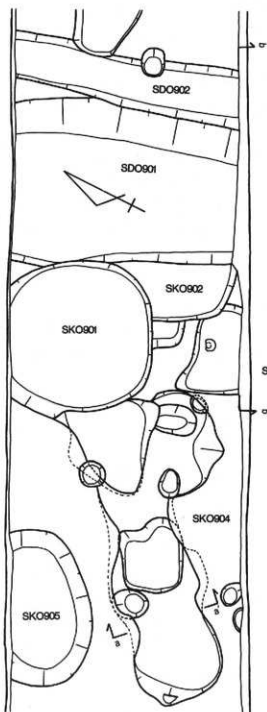
### ロ) 溝

SD0901(第22図・図版十五-1) トレンチ中央東寄り検出した、幅約2.2m、長さ3m以上の溝である。方位はN-26°-Wを示す。トレンチ南壁の断面の観察によれば、床土直下より掘り込まれており、溝SD0902・土坑SK0902を切っている。また、溝の西肩北半部は土坑SK0901に切られている。埋土は、おおむね三層に分かれ、上層より茶褐色砂性粘質土(60~80cm)・混礫茶褐色粘質土(40~60cm)・砂礫(15cm以上)となっている。断面はU字形を呈し、深さは上面より1.3m以上を測る。須恵器の坏(65)・土師器の皿・山茶碗(66)・砥石(93)などが出土している。

SD0902(第22図・図版十五-1) 溝SD0901の東に接する幅70~80cm、長さ3m、深さ20cm前後の素掘りの



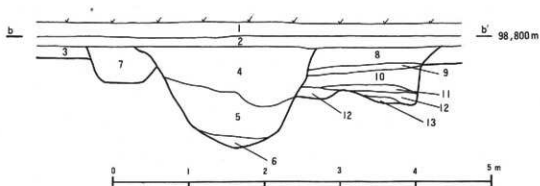
第21図 第9トレンチ掘立柱建物SB0901実測図



- SKO904 : 1. 暗茶褐色砂質土  
 2. 茶灰色砂質土  
 3. 明茶褐色砂質土  
 4. 茶褐色砂質土  
 5. 黒褐色砂質土

- 南壁断面 : 1. 耕作土  
 2. 床土  
 3. 黒褐色砂質土  
 4. 茶褐色砂性粘質土  
 5. 4層に雜を含む } (SDO901)  
 6. 砂礫  
 7. 茶黒褐色砂質土 (SDO902)  
 8. 茶黒褐色砂質土  
 9. 8層に黄褐色土混入  
 10. 黒灰褐色砂質土  
 11. 9層に同じ  
 12. 10層に同じ  
 13. 9・11層に同じ } (SKO903)

a a' 98,800m



第22図 第9トレンチ溝SD0901・02土坑SK0901~05実測図

溝である。溝SD0901に先行する。方位は、N-15°-Wを示す。埋土は黒褐色砂質土であり、出土遺物は認められない。

SD0903 独立柱建物SB0901の東約9mの地点で検出した、幅70～80cm、長さ3m以上、深さ30cm前後の素掘りの溝である。方位は、N-26°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、黒褐色砂質土を埋土とする。土師器の坏(67)・蓋(68)などが出土している。

SD0904 トレンチ中央部で検出した、幅60cm、長さ5.4m、深さ20～30cmの東西方向の溝である。西端は直交する別の溝に切られ、東端は途切れている。須恵器の坏(69)が出土している。

SD0905～08 トレンチ東端部ではほぼ同一方位(N-80°～83°-W)を示す4条の溝を検出した。幅は30cm～1mを測り、長さは5.2m以上である。深さは、いずれも15cm前後である。SD0905およびSD0907より、須恵器・黒色土器の細片が出土している。

#### ハ) 土坑

SK0901(第22図・図版十五-2) 溝SD0901の西肩部に接する径2.2mの円形の土坑である。周辺の遺構の中では最も新しい時期のもので溝SD0901・土坑SK0902・04を切り込んでいる。深さは、検出面より1.1mを測る。埋土は、灰色砂礫である。須恵器の坏蓋(70)・陶器(71・72・76～78)・染付磁器(73～75)・瓦片などが出土している。

SK0902(第22図) 溝SD0901の西、土坑SK0901の南に接する東西幅80cm以上、南北幅1.2m以上の土坑と思われるが、両遺構によって大半が削平されているため詳細は明らかでない。深さは、西隣のSK0903の底面より55cmを測る。土師器片が出土している。

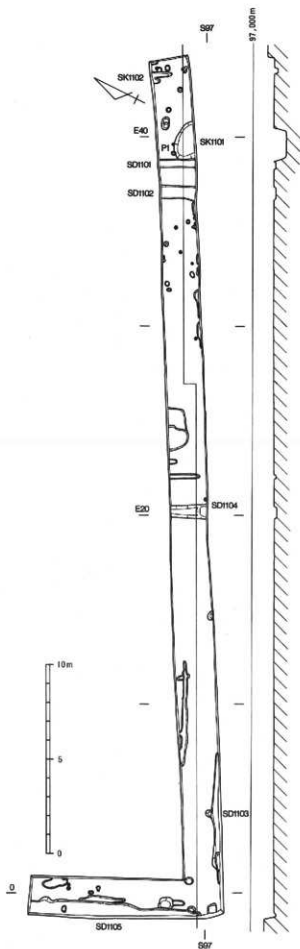
SK0903(第22図・図版十六-1) 土坑SK0901の南側に位置する東西幅1.1m南北幅80cm以上の土坑である。南半は未検出であり、全容は知り得ない。東隅部を土坑SK0902に切られている。床土直下より掘り込まれており、埋土は、黒褐色砂質土と黄褐色砂質土が5～10cmずつ交互に堆積している。深さは、掘り込み面より90cmを測る。底面に接して、黒色土器の椀(80)が出土している。

SK0904(第22図・図版十六-2) 土坑SK0901の西側で検出した、幅80cm～1.2m、長さ4m以上の細長い土坑である。長軸方位は、N-49°-Eを示す。平面形態は、西半部に二ヶ所のくびれ部があり、東部は幅80cm、長さ1.4mにわたって南方へ張り出している。東側3分の1程は、深さ45cm程度、床面が低くなっている。土坑中央部も、径90cm、深さ15cm程度、周囲より低くなる。横断面は袋状を早する。上面は削平を受けているが、本来地表下に横方向に掘り込まれ、天井部を有していた可能性も考えられる。深さは、西部底面で検出面より50cm前後を測る。埋土は大別して三層に分れ、上層より暗茶褐色、茶褐色、明茶褐色のいずれも砂質土である。埋土中には炭化物・焼土などは含まれておらず、床・壁面ともに火熱を受けた痕跡は認められなかった。土師器の皿(81)が出土しているが、土坑の性格については、現状では不明とせざるを得ない。

SK0905～11 トレンチの全域にわたって、大小の土坑が検出された。平面形態は、SK0911が一辺2.6m前後の方形を早すると思われる他は全て円形である。規模は、径80cm前後(SK0905・06・08・10)のものから、径2～2.4mに及ぶもの(SK0907)がある。SK0906から須恵器片、07から陶器・染付磁器、08から須恵器の坏(82)、10から須恵器の坏(83・84)・蓋(85・86)などが出土している。

#### 10) 第10トレンチ(第20図・図版十七-1)

第9トレンチの東側に設定した、幅3m・長さ11.5mの東西方向のトレンチである。今回の調査範囲のうち、



第23図 第11トレンチ遺構配置図

最も東部に位置している。基本層序は、上層より耕作土(10~15cm)・床土(5~10cm)である。遺構面は明茶褐色砂質土の上面で、標高は98.7m前後を測る。検出した遺構には、大小の土坑・ピットなどがあるが、遺物の出土は認められなかった。第9トレンチの東部から本トレンチにかけては、遺構面の削平がとくに著しい。

### 11) 第11トレンチ (第23図・図版十七-2)

第1トレンチの南方約100mの地点に設定した、幅2m・長さ45mの東西方向のトレンチである。西端で約10m北側へ拡張を行なった。遺構は、おおむね耕作土直下の黄~青灰色砂質土の上面で検出した。遺構面の標高は、95.8~95.9m前後を測る。全体的に遺構面の削平が著しい。検出した遺構には、溝・土坑・ピットなどがある。

#### イ) 溝

SD1101~03 同一方位(N-26°-W)を有する、幅45~75cm・深さ5~15cmの素掘りの溝である。いずれも暗灰色粘質土を埋土とし、SD1101から土師器の皿片、02から瓦質土器の羽釜片などが出土している。

#### ロ) 土坑

SK1101 溝SD1101の東側で検出した、径2m前後、深さ55cmの円形を呈すると思われる土坑である。土師器の皿片が出土している。井戸跡の可能性もある。

## 5. 出土遺物 (第24~26図・図版十八~二十三)

### 1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物には、須恵器・土師器・各種陶磁器・瓦・石製品・鉄製品などがある。遺物は、調査範囲のはば全域で出土しているが、とりわけ第1トレンチと第6~第9トレンチにおいて集中的に認められた。各トレンチとも明確な遺物包含層は認められず、遺物の大半は遺構の埋土から出土したものである。

ここでは、図示し得た遺物について出土した遺構ごとに概要を記すことにする。

#### イ) 第1トレンチ (1~39・92)

SD0102 1は、灰釉陶器の瓶子の体部下半である。断面逆三角形の低く小さな高台を貼付し、体部はあまり張りを持たずにたちあがる。内面はロクロナデ仕上げ、外面はヘラケズリののち、全面に灰釉を刷毛塗りしている。胎土はおおむね精良で、焼成は良好、色調は明灰色を呈している。復元高台径は、10cmを測る。

SD0104 2は、信楽焼と思われる壺の口縁部である。外上方に開き、端部を外側に折り返して肥厚させている。内外面ともに横ナデを施す。胎土には、1~2mmの長石粒を多量に含む。器面の色調は茶褐色を呈している。復元口径は、16.6cmを測る。3は、施釉陶器の鉢である。底部の形態は明らかでないが、内湾する口縁部を有する。端部は内外に肥厚させ、片口を備えている。底部内面には、格子状のおろし目が認められる。胎土には若干の砂粒を含み、素地の色調は灰褐色である。内面および外面上半部に淡緑色の灰釉を施している。復元口径は、15.4cmを測る。瀬戸・美濃産と考えられる。

SD0105 4は、土師器の皿である。口縁部は上半で器厚をやや増しながらはばまっすぐに外上方へ開き、端部はまるくおさめている。内面および外面上半部に横ナデを施す。胎土には微砂粒を含み、焼成は軟質、色調は暗褐色を呈している。復元口径は14.2cm、器高2.8cmを測る。5は、信楽焼と考えられる壺の口縁部である。諸特徴は2に類似する。復元口径16.4cmを測る。6は、同じく信楽焼と考えられる大壺の口縁部である。内面に段、外面は幅広い縁帯を成して外反し、端部は外側へ水平につまみ出している。胎土には3mm前後の長石粒を含み、焼成は良好、色調は赤茶褐色を呈している。復元口径35.6cmを測る。7は、信楽焼と考えられる壺もしくは甕の底部である。内外面とも横ナデを施す。復元底径は、12.2cmを測る。8・9は信楽焼の摺鉢の底部である。9ではおろし目が認められるが、8は小片のためおろし目の有無は明らかでない。いずれも胎土には長石粒を多く含む。焼成は8がやや軟質、9は極めて軟質である。色調は8が赤褐色、9は淡褐色を呈している。復元底径は、8が15.4cm、9が14.6cmを測る。10は、天目碗である。低い削り高台を有し、腰部には、段を持たずに口縁部まで大きく内湾してたちあがっている。口縁端部の外反の度合は僅少である。腰部外面は露胎し、ヘラケズリが認められる。胎土には微砂粒を含み、素地の色調は淡灰色を呈している。釉調は、茶味を帯びた黒色である。口径12.0cm、器高5.9cm、底径4.2cmを測る。11は、瀬戸・美濃産と考えられる施釉陶器の香炉である。底部外面には糸切り痕を残し、三足を付す。体部はあまり張りを持たずにたちあがり、口縁部は外反して端部をまるくおさめている。底部内面は回転ヘラケズリ、その他の部位はロクロナデ仕上げである。体部外面と口縁部内面に、淡緑~茶褐色の灰釉が施されている。胎土には少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質、素地の色調は明褐色を呈する。口径7.1cm、器高4.0cmを測る。

SE0101 12は、土師器の焙烙の口縁部片である。内傾し、外側に粘土を貼りたして肥厚させている。内外面



とも横ナデのち、内面には横方向の粗いハケ目が認められる。外面には厚く煤が付着している。13は、信楽焼の摺鉢の口縁部片である。端部は内傾する面を有する。内面にはおろし目が認められるが、条数・間隔ともに明らかでない。14は、信楽焼の大甕の底部である。体部下半は、大きく開いている。胎土には長石粒を多く含んでいる。復元底径17.6cmを測る。

SE0102 15・16は、土師器の皿である。15は、底部中央が上方に突出している。口縁部は、外反気味に開き、端部はまるくおさめる。胎土はともに精良、焼成は軟質、色調は暗褐色を呈している。15は口径7.8cm、器高1.5cm、16は口径7.7cmを測る。17は、信楽焼の摺鉢の底部である。小片のためおろし目の有無は明らかでないが、内面には使用による磨減痕が顕著である。体部外面にはナデを施す。胎土には長石粒を多く含み、焼成は良好、色調は橙褐色を呈している。復元底径は、11.7cmを測る。

SE0104 18は、須恵器の甕の口縁部である。端部を上下に肥厚させる。胎土には小砂粒を含み、色調は暗灰色を呈している。復元口径90cmを測る。19は、須恵器の坏である。高台は、断面方形を呈する。底部外面以外は、回転横ナデ調整である。胎土には小砂粒を多く含み、色調は青灰色を呈している。復元底径9.5cmを測る。20～22は、土師器の皿である。20の口縁部は肩出し、底部中央は上方へ突出するものであろう。端部はまるくおさめている。内面と口縁部外面を横ナデ調整する。21の口縁部はほぼまっすぐに開き、端部は断面三角形状である。内面と口縁部外面に横ナデを施す。20・21ともに胎土には小砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は20が淡褐色、21は暗褐色を呈する。口径は20が8.6cm、21が10cm、器高はそれぞれ1.7cmと1.9cmを測る。22は、口径16.7cmを測る大甕の皿である。口縁部はやや外反気味に開き、端部をわずかに上方へ突出させている。口縁部外面および体部内面を横ナデ調整する。外全面と底部内面の一部に煤が付着している。胎土には3mm程度の砂粒を含み、色調は暗褐色を呈している。23は、信楽焼の摺鉢と考えられる。おろし目の有無は明らかでないが、使用による磨減痕が顕著である。内外面とも横ナデ調整である。胎土には長石粒を含み、焼成は軟質、色調は淡橙褐色を呈している。復元底径14.2cmを測る。24は砂質の低石である。一面に条数の極めて細い磨痕が認められる。

SK0101 24は、土師器の焙烙である。口縁部は大きく内湾している。端部の肥厚は顕著ではない。外面は端部付近を横ナデ、それ以下はヘラケズリを施す。内面には、横方向の粗いハケ目が認められる。外面には煤が付着している。復元口径27.0cmを測る。25は、瓦質土器の羽釜である。口縁部はほぼ直立し、上端に面を有している。胴部は、ほぼ水平に取り付く。口縁部は内外面とも横ナデが施されるが、全体に器面の磨減が著しく詳細は不明である。復元口径17.8cmを測る。26は、信楽焼の甕の底部と考えられる。内面は横ナデ調整、体部外面にはヘラケズリ痕が認められる。胎土には長石粒を含み、焼成は良好、色調は赤褐色を呈している。復元底径11.6cmを測る。27は、信楽焼の大甕の口縁部である。内面に浅い段を有し、端部はやや外側へ突出している。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。

SK0103 28は、陶器の摺鉢である。小片のため、口径は明らかでない。口縁部は断面三角形を呈し、外面は縁帯を形成している。5条以上のおろし目が、5cm前後の間隔を持って施される。器面の調整は、内外面ともに横ナデである。胎土には1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗紫褐色を呈する。備前系のものか。29は信楽焼の摺鉢の底部と考えられるが、おろし目の有無は明らかでない。復元底径12.6cmを測る。30は、信楽焼の甕の底部と考えられる。復元底径8.7cmを測る。29の焼成はやや軟質、30は良好堅緻である。第7図は、花崗岩製の五輪塔の上半（空風火輪）部である。現存高31.6cm、空輪の径14cm、火輪は一辺21.4cmを測る。

SK0105 31は、信楽焼の大甕の底部である。体部下半は大きく開いている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は赤茶褐色を呈する。復元底径16cmを測る。

PI 32は、土師器の皿である。底部は低平で口縁部は屈曲してたちあがる。口縁部内部には横ナデを施す。復元口径8.4cm、器高0.8cmを測る。

ロ) 第2トレンチ (33・34)

SR0102 33・34は、黒色土器の碗の底部である。内面のみ黒色化する。ともにやや外方へ開く高台を付す。底部内面には乱雑なヘラミガキ痕が認められるが、器面の磨滅のため詳細は不明である。底径は33が4.5cm、34が5.2cmを測る。

ハ) 第4トレンチ (35～41)

SE0401 35は、須恵器の蓋のつまみ部である。径2.7cmを測る。

SK0401 36～40は、土師器の皿である。いずれもややまるみを帯びる底部から、II縁部は内湾気味にたちあがる。端部は断面が三角形を呈するものがある。II縁部外面上半と同内面に横ナデを施す。底部外面と口縁部外面下半以下は基本的に未調整である。37の底部外面には、数条の直および曲線が認められる。いずれも胎上には砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡～茶褐色を呈する。II径8.4～9.4cm、器高1.4～1.8cmを測る。

SK0402 41は、土師器の皿である。底部とII縁部の境がやや屈曲する。復元II径8.5cm、器高1.6cmを測る。

ニ) 第5トレンチ (42・43)

SD0503 42は、天目碗の底部と思われる。削り高台の脇には段を有する。腰部外面以下は露胎する。底部内面の釉調は、磨滅のため淡茶色を呈している。底径4.0cmを測る。

PI 43は、須恵器の坏である。底部外面には回転ヘラ切り痕を残し、その他の部位は回転横ナデで調整する。胎上には小砂粒を多く含み、焼成は不良、色調は内面が灰白色、外面は黒灰色を呈している。底径8.6cmを測る。

ホ) 第6トレンチ (44～54)

SD0601 44は、須恵器の坏底部である。広い底部の外周付近に、断面方形の高台を付す。底部外面以外は回転横ナデを施す。胎上には1mm以下の砂粒を含み、焼成は極めて不良、色調は灰褐色を呈している。復元底径10.9cmを測る。45は、黒色土器の碗である。II縁部内面に沈線有する。内面は横ナデののち、横ないし斜め方向の乱雑なヘラミガキを施す。II縁部外面にも横方向のヘラミガキが認められる。内面と口縁部外面が黒色、体部外面は暗褐色を呈している。胎上には小砂粒を含む。復元口径15.5cmを測る。

SK0601 46は、施釉陶器の大型の香炉もしくは壺と思われる。底部は平高台状を成し、三足が取り付く。体部は垂直にたちあがり、外面には縦方向の溝文が施される。体部外面のみに施釉する。釉調は青味を帯びている。胎上は緻密、焼成も堅緻、素地の色調は灰褐色を呈している。復元底径14.0cmを測る。47は、染付磁器の碗である。体部はほぼ垂直にたちあがっている。外面に菊花文と斜格子文、見込みに梅鉢文を描く。底径3.7cmを測る。胎上は精良で、色調は灰白色を呈している。瀬戸・美濃製品と考えられる。

SK0602 48は、信楽焼の壺もしくは甕の底部である。外面はナデ、内面には横ナデを施す。胎上には長石粒を含み、焼成は良好、色調は淡橙褐色を呈する。復元底径11.8cmを測る。

PI 49は、須恵器の坏の底部である。広い底部に断面方形の高台を付す。胎上には長石粒などを含み、焼成は軟質、色調は灰褐色を呈している。復元底径12.2cmを測る。

P3 50は、須恵器の坏である。高台は薄く、外側に開く。深い体部を有し、II縁部はやや外反して端部をまるくおさめている。胎上には小砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡灰色を呈している。II径10.2cm、器高4.8cm、底径7.2cmを測る。

遺構面 51は、施釉陶器の灯明皿である。内面と口縁部外面に灰釉が施される。内面突起部に「抉り」を有す

る。素地は灰褐色を早している。復元口径6.2cmを測る。52は須恵器の皿、53・54は坏である。いずれも胎土には小砂粒を含んでいる。52は底径12.7cm、53は口径9.1cm、54は口径14.4cmを測る。

へ) 第7トレンチ (55~58)

SK0701 55は、信楽焼の摺鉢である。おろし目は5条で密に施している。胎土には長石粒を含み、色調は赤褐色を呈する。復元底径14.0cmを測る。56は、施釉陶器の壺に類するものと思われる。底部外面を除いて施釉する。底部内面には砂敷き痕が認められる。胎土は緻密で、焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調はやや青味を帯びている。復元底径18.6cmを測る。57は、唐草文軒平瓦の断片である。瓦当面の上下幅は4.0cmを測る。焼成は軟質で、色調は黒灰色を呈している。

SK0703 58は、土師器の甗である。底部には中央に1、その周囲に4の計5孔を穿っていたものと思われる。体部は張りを持たずにたちあがり、口縁部は外反して上端に面を有する。体部中央には、相対する二個の把手を付した痕跡が認められる。体部外面には縦方向、内面には横方向のハケ調整を施す。底部内面は、ハケ目をナデ消している。胎土には1~2mmの石英粒などを含み、焼成は良好、色調は暗褐色を呈する。復元口径21.7cm、器高22.0cm前後を測る。

ト) 第8トレンチ (59~64)

SK0801 59は、施釉陶器の鉢に類するものと考えられる。素地の色調は淡褐色、釉調は茶色を呈する。復元底径13.3cmを測る。60~64は、染付磁器である。63は皿、その他は碗と思われる。61は高台から腰部にかけて三条の界線、61・62は外面に菊花文・斜格子文、口縁部内面に一条の界線を描く。63の高台部外面には界線、見込みには唐草文が描かれる。復元口径は、61が6.8cm、62が6.5cm、同底径は、63が9.4cm、64は4.5cmを測る。61・62は瀬戸・美濃産、63・64は伊万里産の可能性を有する。

チ) 第9トレンチ (65~90・93)

SD0901 65は、須恵器の坏である。断面逆台形の高台を付す。復元口径11.6cmを測る。胎土には微砂粒を含み、焼成は軟質、色調は暗青灰色を早する。66は、山茶碗の底部と思われる。底部外面には糸切り痕を残す。胎土には小砂粒を含み、色調は暗灰色を早している。復元底径8.9cmを測る。93は、砂質の砥石である。一面に数条の細い擦痕が認められる。

SD0903 67は、土師器の坏の底部である。底部外面はヘラケズリ、その他は横ナデを施す。胎土はおおむね精良、色調は明茶褐色を呈する。復元底径11.0cmを測る。68は、土師器の蓋のつまみ部である。径2.7cm、高さ1.7cmを測る。

SD0904 69は、須恵器の坏の底部である。断面方形の高台を付す。70は、須恵器の蓋である。口縁部は強く屈曲して端部を折り返す。ともに胎土には若干の砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は暗灰色を呈している。69は復元底径9.0cm、70は口径14cmを測る。

SK0901 71は、信楽焼の摺鉢である。内面のおろし目は間隔を置かず密に施している。体部外面には泥髻の塗布が認められる。胎土には2~5mmの長石粒を多く含み、色調は素地が淡褐色、体部外面は茶色を呈する。復元底径11.8cmを測る。72は、信楽焼の壺の底部と考えられる。復元底径13.9cmを測る。73~75は染付磁器である。73・75は碗、74は皿と思われる。73は見込みに二条、74は高台脇に二条の界線が認められる。75は、外面に割目文と三条の界線が描かれる。いずれも胎土は緻密、堅緻な焼成であり、色調は灰白色を早している。伊万里産のものと考えられる。底径は、73が4.1cm、74が10.2cm、75が4.0cmを測る。76は、施釉陶器の蓋である。内面のかえり部にはねぼ立している。天井部外面には、二条の界線の間に巴文と点文を描き、淡茶白色の釉を施す。

復元口径5.7cmを測る。77・78は、施釉陶器の把手の断片である。上面に宝珠文を描き、外側に刻目、中央に円孔を有する。79は、鉄製品である。「コ」字形を呈し、断面は楔状をなす。長さ7.4cm、中央部幅1.3cm、厚さ0.4～0.7cmを測る。用途は判然としない。

SK0903 80は、黒色上器の碗である。高台は、断面逆台形を呈する。体部は浅めで、大きく内湾して開く。口縁端部内面に沈線を有する。体部内向上半に横、下半に縦方向のヘラミガキを施す。外面は口縁部に横方向のヘラミガキ、体部には若干の指頭圧痕が認められる。全体に器面の磨減が著しいために、詳細は明らかではない。内面と口縁部外面を黒色化する。口径15.5cm、器高4.7cm、底径5.3cmを測る。

SK0904 81は、上師器の皿である。口縁部内外面に横ナデを施す。体部外面は未調整である。胎上には小砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈する。復元口径14.2cmを測る。

SK0908 82は、須恵器の坏である。復元底径7.6cmを測る。

SK0910 83・84は須恵器の坏、85・86は同蓋である。83の体部はあまり内湾せずに開き、端部はまるくおさめる。胎上には微砂粒を含み、色調は暗青灰色を呈する。復元口径11.9cm、器高4.0cm、底径8.6cmを測る。85の蓋は、低平な天井部に扁平なつまみを付す。口縁部の屈曲は強く、端部をほぼ垂直に折り曲げている。天井部は回転ヘラケズリ、その他の部位は回転横ナデを施す。胎上には3mm以上の砂粒を含んでいる。86もほぼ同様の形態を呈している。85の口径が16.2cm、器高2.3cm、86は復元口径12.0cmを測る。

P1 87・88は須恵器の皿、89は同蓋である。復元底径は87が14.6cm、88は13.0cmを測る。89の口縁部はあまり屈曲せず、端部をやや内側へ折り曲げている。復元口径16.2cmを測る。胎上にはいずれも小砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は87・88が灰褐色、89は暗青灰色を呈する。

遺構面 90は、土師器の皿である。復元口径13.3cmを測る。

#### リ) 第11トレンチ (91)

P1 91の石斧は刃部に最大幅を持ち、長さ10.5cm、基部幅1.0cm、刃部幅4.5cm、中央部の厚さ3.1cmを測る。断面は楕円形を呈する。刃部を除く全面に敲打痕が認められ、刃部を両面から磨ぎ出している。

## 2) 小結

上述した出土遺物のうち、形態的な特徴や、調整手法などの観察によって編年的な手がかりを得ることが可能なものについて、出土遺構ごとに若干の时期的位置付けを行なうことにする。

第1トレンチの溝SD0102出土の灰釉陶器(1)は、おおむね9～10世紀代のものと考えられる。溝SD0104および05から出土した銅皿(3)・天日碗(10)・香炉(11)などの瀬戸美濃産と考えられる施釉陶器類、信楽産の壺(2・5)・甕(6)・鉢(8・9)などはともに15世紀前半代を中心とする時期のものと考えられる<sup>④</sup>。井戸SE0101・02出土の遺物もおおむね同時期に属するものであろう。井戸SB0104の出土遺物については、古墳時代～奈良時代の須恵器類(18・19)が混入するが、土師器の皿は12～13世紀代(21)と15世紀代(20・22)のものと考えられる。土坑SK0101の焙烙(24)・羽釜(25)・信楽産の壺(27)などは15世紀代に位置付けられる<sup>④</sup>。

第2トレンチの自然流路SR0201出土の黒色土器(33・34)については全形を知り得ないが、12～13世紀代に属するものと考えられる<sup>④</sup>。

第4トレンチの上坑SK0401出土の土師器の皿類(36～40)はいずれも大きな時期差は認められず、12～13世紀代のものと見られる<sup>④</sup>。

第6トレンチの溝SD0601出土の須恵器の坏(44)は8世紀後半～9世紀初頭に、黒色上器碗(45)は、12世

紀～13世紀前半代に位置付けられる。十坑SK0601の染付磁器(47)は、18世紀後半代以降のものと考えられる。その他、須恵器の坏・皿類(49～54)は、8世紀後半～9世紀初頭に属するものであろう<sup>9)</sup>。

第7トレンチの土坑SK0701出土の信楽焼の罍鉢(55)は16世紀代のもものと見られる。土坑SK0703出土の土師器の甗(58)は、おおむね古墳時代後期に属するものと考えられる。

第8トレンチの土坑SK0801・03出土の染付磁器類(60～64)は、18世紀後半代以降のものであろう。

第9トレンチの溝SD0901出土の須恵器の坏(65)は、8世紀後半～9世紀初頭に、山茶碗(66)は、12世紀代以降に位置付けられる。溝SD0903・04、土坑SK0908・10などから出土した土師器(67・68)、須恵器の坏(69・70、82～84)・皿(87・88)・蓋(85・86・89)は、おおむね8世紀後半代～9世紀初頭に位置付けられるものである。十坑SK0901出土の須恵器の蓋(70)も同時期のものであるが、染付磁器類(73～75)などは18世紀後半以後のものと考えられる。十坑SK0903出土の黒色土器は、13世紀代に属するものと見られる。

## 6. まとめ

今回の調査においてはトレンチ幅が狭小なこともあって、各遺構の全体的な構造や個別的性格、あるいは遺構相互の関連性などを明らかにすることは困難であった。ここでは、出土遺物の年代観をもとに主要な遺構についての時期的な位置付けを行ない、半田遺跡の変遷過程を概述することとする。

まず古墳時代以前に属する遺構には、竪穴式住居SH0601・土坑SK0703などがある。竪穴式住居は1棟のみの検出であり、しかもその全容を知り得るものではない。加えて、遺物の出土も僅少であり、詳細についてはなお不明な点が多いが、遺物中に須恵器片を含むことより、おおむね古墳時代後期に属するものと考えられる。北方の蔵ノ町遺跡の調査においては、古墳時代前期の竪穴式住居数棟と同後期の掘立柱建物2棟が確認されている<sup>10)</sup>。

SH0601との関連性についてはにわかには明らかにできないが、古墳時代前期から継続する集落が半田遺跡周辺にも広がっていた可能性を指摘し得る。なお、第11トレンチより石斧が一点のみ出土しているが、弥生時代以前に属する遺構については明らかでない。

奈良時代から平安時代前期にかけての遺物を出土する遺構には、第1トレンチの溝SD0102、第9トレンチの溝SD0903・04、十坑SK0908・10などがある。SD0102については、灰釉陶器が1点出土しているのみであり、その開削時期や機能に関してはなお不明な点を残すが、同一溝と見られるSD0301とあわせてその主軸がN-96°-Wとより東西方向に近いことが注意を引く。他に顕著な遺物の出土は見られないが、溝SD0401・0501、SD0801、掘立柱建物SB0401などがこれに近似する方位を有する。もとより推定の域を出ないが、平安時代前期以前にあっては、溝の掘削や建物の築造にあたってより磁北に近い方位が指向選択された可能性が考えられる。なお、第9トレンチを中心に、奈良時代～平安時代の遺物が比較的集中することより、至近距離に同時期の集落の存在が予想される。

平安時代後期から鎌倉時代に属すると思われる遺構には、土坑SK0402、SK0903、溝SD0601などがある。SK0903については他の遺構との重複が著しく詳細は明らかでないが、上墳墓である可能性も否定できない。溝SD0601は、現在も残存する条里地割方向にその主軸が近似している。検出部分がわずかであり、遺物にも混入が見られるため、その位置付けにはなお慎重であらねばならないが、半田遺跡周辺においては12～13世紀に統一的な条里地割に依拠した土地開発の画期が存在したことが予想される。このことは、蔵ノ町遺跡で検出された掘立柱建物群の変遷においても検証されたところである<sup>11)</sup>。その他、出土遺物が無いために即断できないが、掘立柱建

物SB0601、SB0901が同様の主軸を有することよりおおむね当時期以降に属するものと考えられる。

第1トレンチにおいては、鎌倉時代から室町時代に属する遺構が集中して検出されている。掘立柱建物SB0101は柱穴からの顕著な出土遺物は見られないが、15世紀代の遺物を出土する井戸SE0101に柱穴の一部が削平されることより、おおむね鎌倉時代に属するものと考えられる。主軸方位も先述の想定と矛盾しない。西北方の柿木原遺跡の調査においても、鎌倉時代から室町時代前期を中心とした掘立柱建物群が検出されており<sup>②</sup>、SB0101が時期的に一致するばかりでなく、位置的にも近接することから一連の建物群として把握することが可能である。溝SD0105は、西端がそれぞれ南側へ曲折する様子が窺えることより、何らかの区画的な機能を有することも予想されるが、今回の調査では詳細を明らかにすることができなかった。なお、この溝より出土した土器類は室町時代前半期における比較的良好な一括性を有するものであり、周辺の遺構群を残した居住者の性格を推し量るうえで少なからぬ示唆を与えるものと思われる。さらに密集する井戸群の存在とあわせて、柿木原遺跡と関連性を有する遺構群がさらに東南域に広がることが明らかになったわけであるが、これより東南方で同時期の遺構は認められず、あるいは自然流路と考えたSR0201が遺構群の東限を画していた可能性も考えられる。

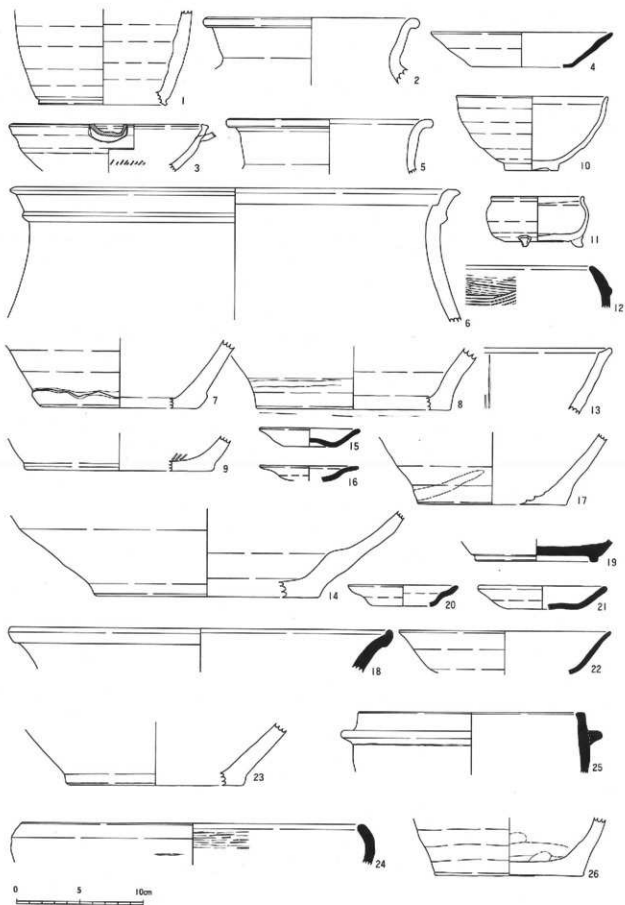
江戸時代以降に属する遺構としては、第6トレンチ東部から第9トレンチにかけて20基近い土坑が検出されている。平面形態には円形と方形のものがあり、規模は円形のもので直径1.5～2.5m前後を測るものが多く見られる。埋土は一概に乱雑な堆積状況を呈しており、掘削後短時日のうちに埋没あるいは人為的に埋め戻された可能性を有するものである。出土遺物の年代観は江戸時代後期以降の様相を示している。その性格についてはなお明らかではないが、周辺は西宿町に所在する明浄寺<sup>③</sup>あるいは、「伊庭氏の代官屋敷<sup>④</sup>」の北方にあたり、現状ではそこで消費された不要材の廃棄土坑である可能性を考えておきたい<sup>⑤</sup>。

以上、今回の調査によって平田遺跡の変遷の二期が、古墳時代後期・奈良時代～平安時代前期・平安時代後期～鎌倉室町時代・江戸時代後期以降に求められることが明らかになったと言える。

#### 注

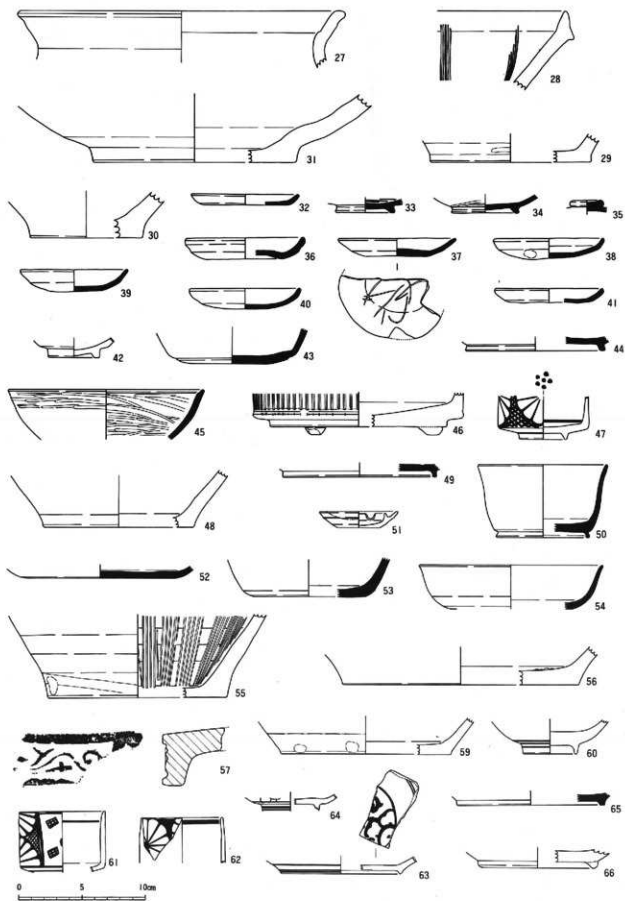
- ① 滋賀県教育委員会編『昭和60年度滋賀県遺跡地区』(滋賀県教育委員会 1986)
- ② 仲川 靖「I. 近江八幡市柿木原遺跡」(『現場整備関係遺跡発掘調査報告書』XIII-2 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1986)
- ③ 仲川 靖「I 近江八幡市蔵ノ町遺跡・久那屋敷跡」(『現場整備関係遺跡発掘調査報告書』XIV-4 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987)
- ④ 「常盤遺跡」(『滋賀県文化財調査年報昭和60年度 滋賀県教育委員会 1987)
- ⑤ 岩崎直也・角上寿行・菅宮 正「勸学館遺跡発掘調査報告書」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 近江八幡市教育委員会 1985)
- ⑥ 清水 尚『京道下巻蒲原郡線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書』II(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987)
- ⑦ 宮崎幹也『兵命寺町庭遺跡発掘調査概要』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1984)

- ⑧ 岩崎直也「1. 堀上遺跡」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 近江八幡市教育委員会 1984)
- ⑨ 宮崎幹也「はらね橋関係遺跡発掘調査報告書」Ⅱ 11-2(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985)
- ⑩ 注⑤に同じ。
- ⑪ 柏倉亮吉「供養塚古墳」(『滋賀県史蹟調査報告』第6冊 滋賀県 1934)  
岩崎直也「多種類の形象埴輪が出土 近江八幡市千僧供古墳群」(『滋賀文化財だより』No.74 (財)滋賀県文化財保護協会 1983)
- ⑫ 「四」 景指定史跡、千僧供古墳群」(『滋賀県文化財調査年報』昭和58年度 滋賀県教育委員会 1985)
- ⑬ 柏倉亮吉「曼陀羅堂趾」(『滋賀県史蹟調査報告』第6冊 滋賀県 1934)
- ⑭ 『御膳前遺跡(Ⅱ)現地説明会資料』(近江八幡市教育委員会 1987)
- ⑮ 近藤 滋「狂園官舎とみられる建物群 近江八幡市金剛寺町金剛寺城遺跡」(『滋賀文化財だより』No.86 (財)滋賀県文化財保護協会 1984)
- ⑯ 角上寿行「長光寺城の構造」(『滋賀考古学論叢』第2集 滋賀考古学論叢刊行会 1986)  
角上寿行・佐竹幸吉「瓶淵山城遺跡」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 近江八幡市教育委員会 1987)
- ⑰ 河内美代子・岩崎直也「金剛寺城遺跡発掘調査報告書」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 近江八幡市教育委員会 1983)
- ⑱ 藤宮 正「馬淵城遺跡」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅵ 近江八幡市教育委員会 1985)
- ⑲ 注③に同じ。  
中川 靖「近江八幡市久郎塚跡の獨立柱建物群について」(『滋賀考古学論叢』第4集 滋賀考古学論叢刊行会 1988)
- ⑳ 瀬戸美濃製品については、樽崎彰一他「瀬戸 美濃 飛騨」(『日本やきもの集成』3 平凡社 1980)による。  
信楽製品については、渡辺忠成他「近畿Ⅰ」(『日本やきもの集成』6 平凡社 1981)、井上壽久男「伊賀地方出土の中・近世陶磁について」(『阿山町埋蔵文化財調査報告書』1-菊永水城跡発掘調査報告- 阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1987)による。
- ㉑ 土師器の規格については、岩崎直也・角上寿行「余内遺跡」(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ 近江八幡市教育委員会 1984)による。
- ㉒ 黒色土器については、森 隆「滋賀県における古代木・中世土器」(『中世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会 1986)による。
- ㉓ 土師器の種類については、横田洋三「出土土師器編年試案」(『平安京跡研究調査報告』第5輯-平安京左京五条 坊十五町一(財)古代学協会 1981)による。
- ㉔ 須恵器類については、奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告書」(『奈良国立文化財研究所学報』第26期 奈良国立文化財研究所 1976)による。
- ㉕ 注③に同じ。
- ㉖ 注③および㉔に同じ。
- ㉗ 注③に同じ。
- ㉘ 真宗大谷派 夏文二(1662)年開基と伝えられる。
- ㉙ 江戸時代末に川越藩領の代官を勤めたとされる。
- ㉚ 周辺に「馬三昧」の小学が残存し、往古武宿で繁れた役馬を埋葬した由の地元の伝承が存在するが、今回検出した土坑群との関連は一切不明である。

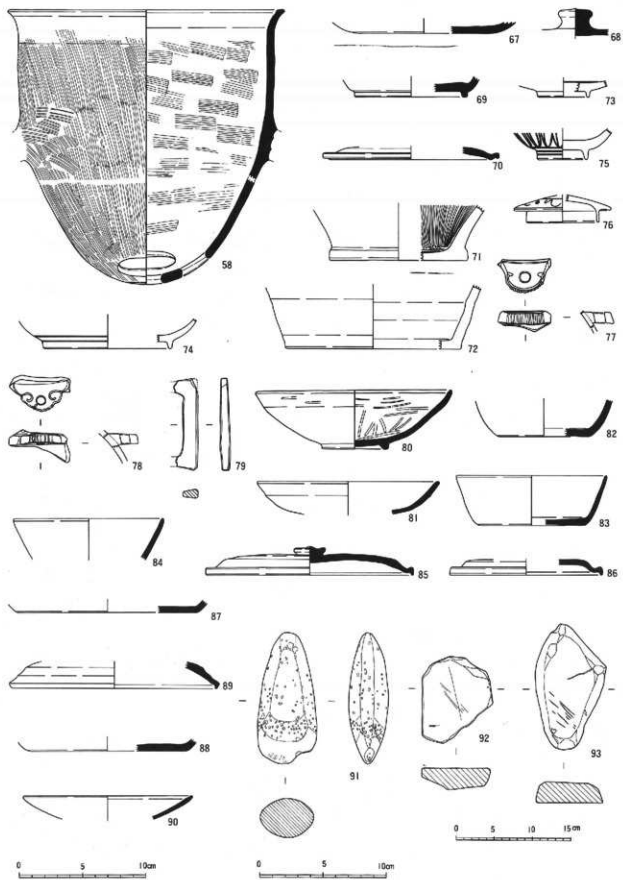


第24圖 出土遺物 (1)





第25圖 出土遺物(2)



第26图 出土遗物 (3)

版 图



1. 遺跡遠景



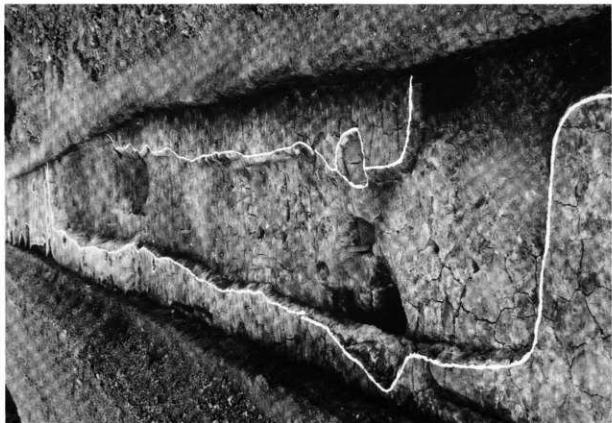
2. 遺跡近景 (西から)



1. 築一トノハ木立家 (築石の)



2. 築一トノハ木立家柱礎跡のB00-00-1



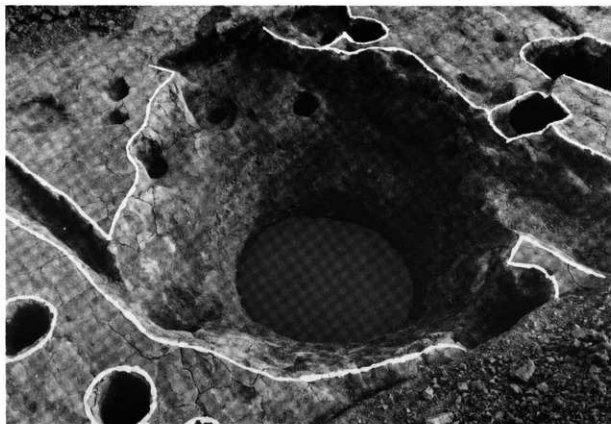
1. 掘—ム△ハト殿の〇〇—〇—



2. 第1トレンチ井戸SE0101



1. 第1トレンチ井戸SE0102・03、土坑SK0103



2. 第1トレンチ井戸SE0104



1. 第1トレンチ井戸SE0103、土坑SK0103



2. 第1トレンチ土坑SK0103石組検出状況





1. 溝ノトノミ全量 (照から)



2. 溝ノトノミ全量 (照から)



1. 第4トレンチ全景(北から)



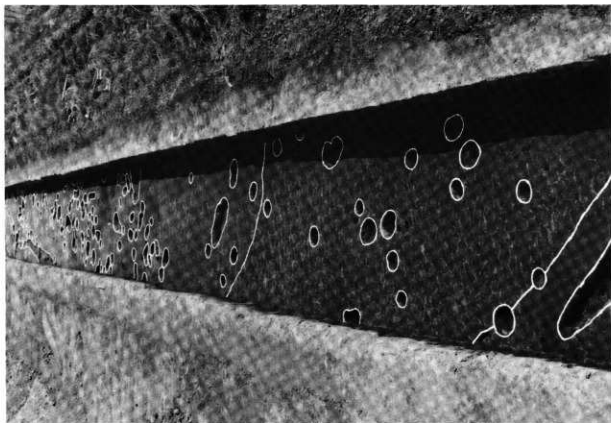
2. 第4トレンチ土坑SK0401遺物出土状況



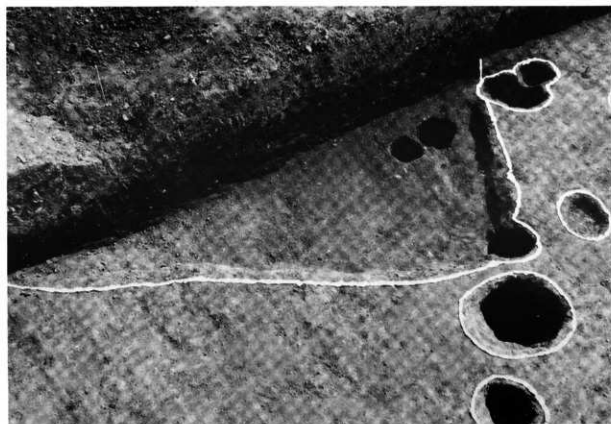
1. 第1トレンチ遺構群 (裏面)



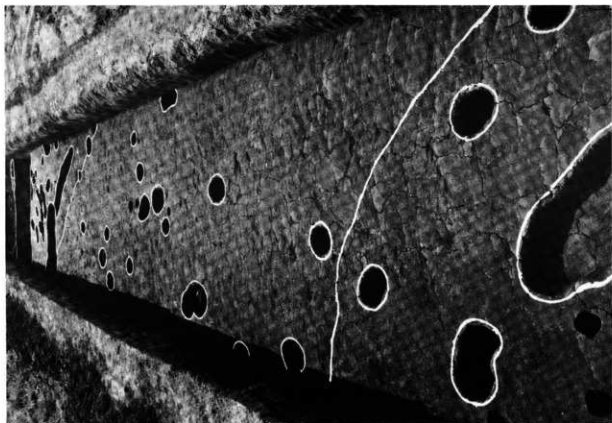
2. 第5トレンチ溝群



1. 第6トレンチ全量(図45)



2. 第6トレンチ整穴式住居SH0601



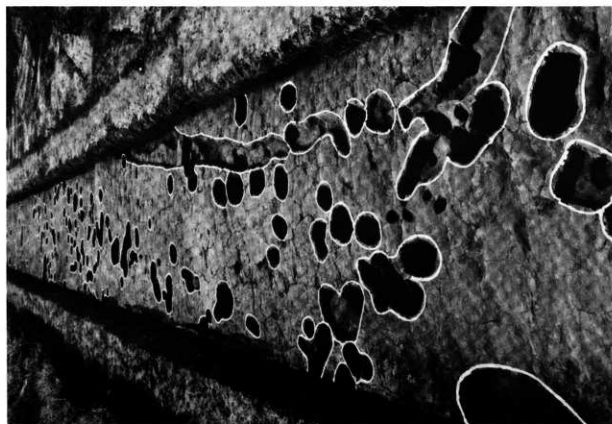
1. 第5トレンチ掘立柱建物SB0601



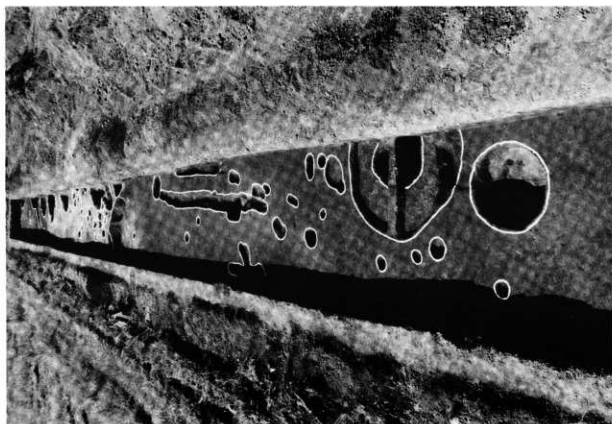
2. 第6トレンチ掘立柱建物SB0602



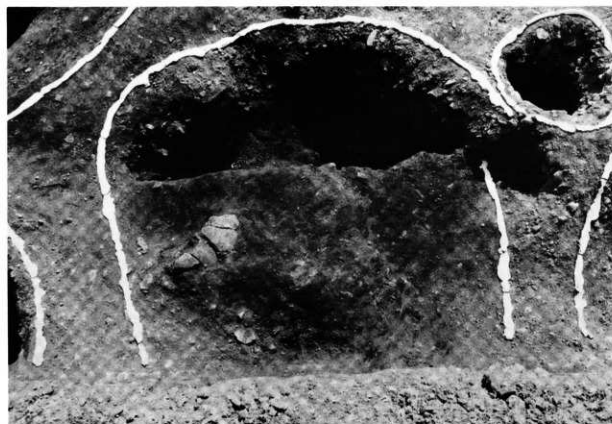
1. 第6トレンチ溝SD0601



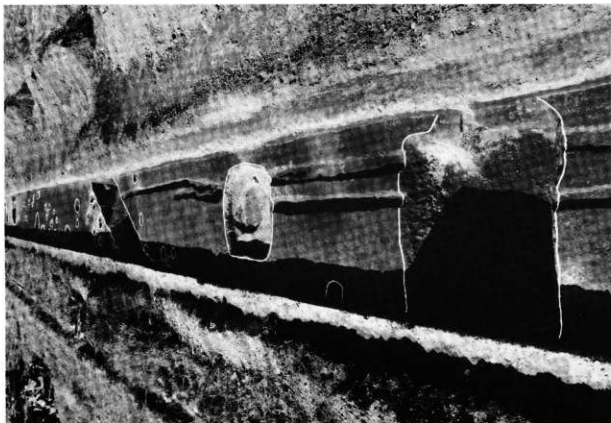
2. 溝の下の土柱の跡



1. 第7トレンチ土坑SK0703 (部分)



2. 第7トレンチ土坑SK0703



1. 第8トレンチ全景 (奥から)

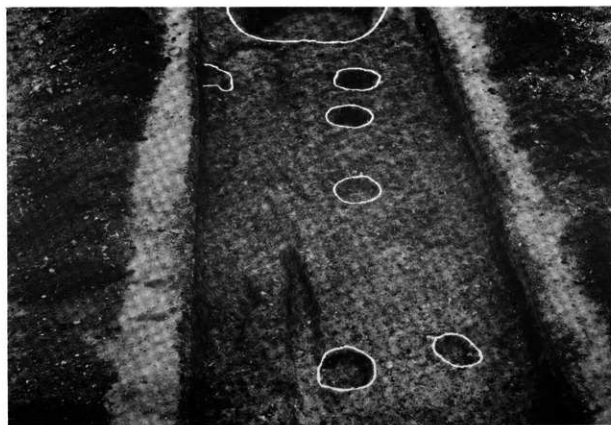


2. 第8トレンチ溝SD0801

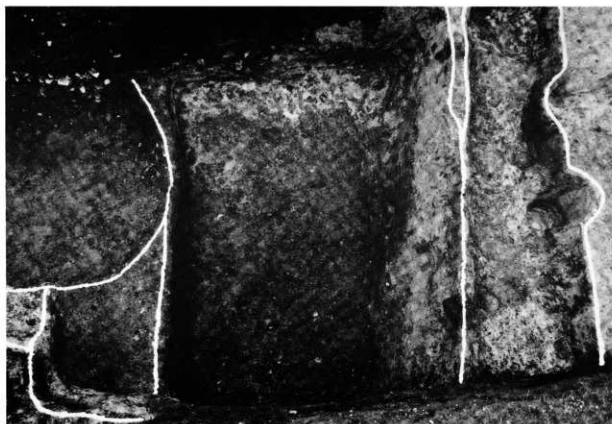




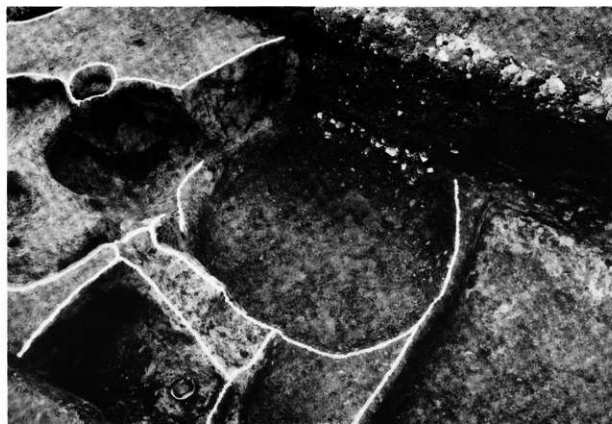
1. 第9トレンチ全長 (裏から)



2. 第9トレンチ独立柱建物SB0901



1. 第9トレンチ溝SD0901・02



2. 第9トレンチ土坑SK0901~03



1. 第9トレンチ土坑SK0903遺物出土状況



2. 第9トレンチ土坑SK0904



1. 第10トレンチ全貌 (図から)



2. 第11トレンチ全貌 (図から)



10



39



11



40



19



46



47



26



50



38



57



85



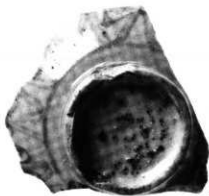
58



91



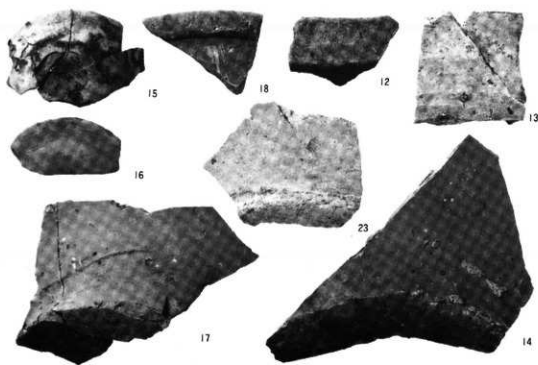
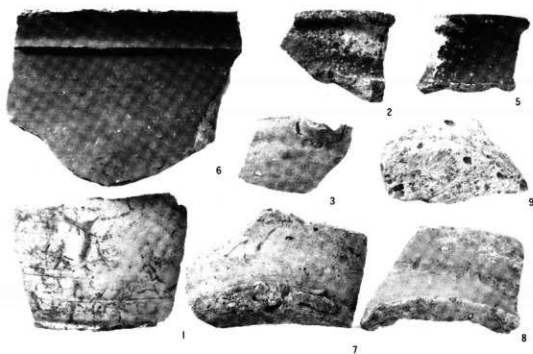
58

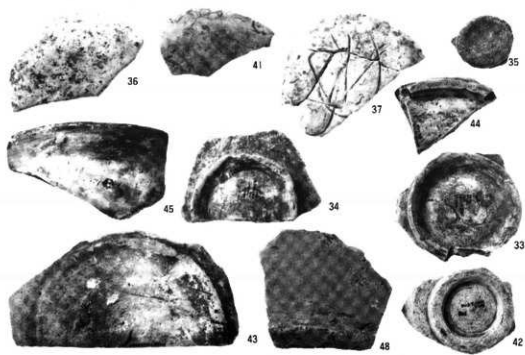
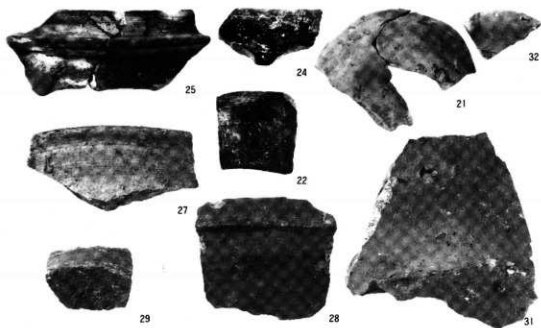


75

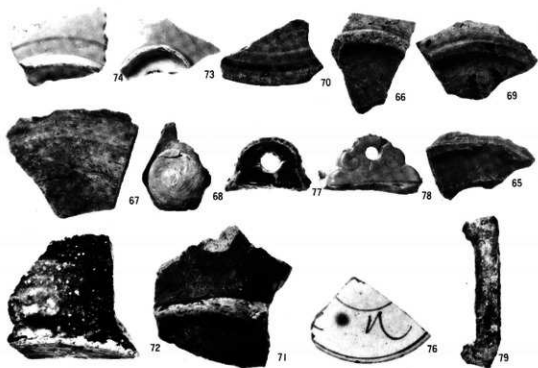
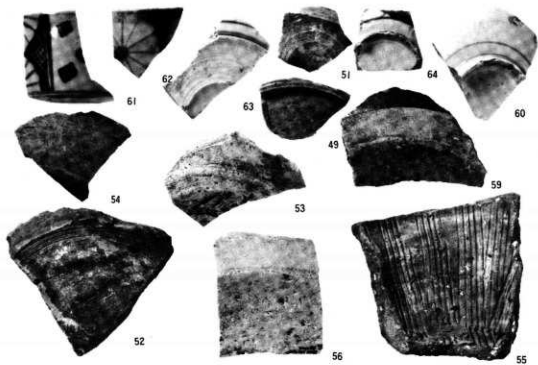


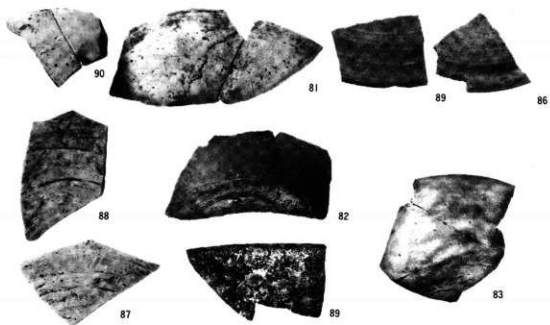
80











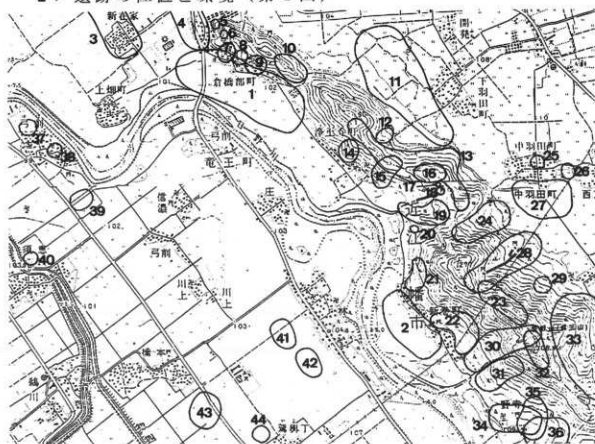
第 2 章 近江八幡市西<sup>にし</sup>ノ前<sup>まえ</sup>・梅<sup>うめ</sup>ノ木<sup>き</sup>遺跡

## 1. はじめに

本報は、昭和62年度景観は場整備事業（近江八幡市桐原馬淵Ⅱ期地区第12号分水用水路）に伴う近江八幡市西ノ前遺跡および梅ノ木遺跡における発掘調査成果の報告である。両遺跡は、同市倉橋部町と新巻町地先に所在し、西ノ前遺跡は古墳時代および室町時代の、梅ノ木遺跡は飛鳥時代の遺物の散布地として周知されていた。今回、倉橋部町から新巻町にかけて分水用水路工事が実施されるにあたって事前に発掘調査を行ない、遺構の保護策を講ずることとなった。

調査の実施にあたっては、地元倉橋部町・新巻町および西宿町をはじめ、関係者の方々には多くの協力を得た。とくに記して感謝の意を表したい。

## 2. 遺跡の位置と環境（第1図）



第1図 西ノ前・梅ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡（縮尺 25,000分の1）

1. 西ノ前遺跡
2. 梅ノ木遺跡
3. 田中堂遺跡
4. 中出遺跡
5. 倉橋部遺跡
6. 安古古墳
7. 倉橋部廣寺遺跡
8. 粟木山古墳群
9. 倉橋部城址
10. 倉橋部古墳群
11. 下羽田遺跡
12. 山上古墳群
13. 中羽田西山古墳群
14. 浄土寺C古墳群
15. 浄土寺A古墳群
16. 浄土寺中世墓地
17. 天神社古墳
18. 天神社遺跡
19. 浄土寺日古墳群
20. 浄土寺遺跡
21. 新巻A古墳群
22. 新巻B古墳群
23. 新巻C古墳群
24. 中羽田古墳群
25. 中野遺跡
26. 後藤館跡
27. 五反田遺跡
28. 八幡社古墳群
29. 聖部古墳群
30. 新巻C古墳群
31. 安古山古墳群
32. 雲野山古墳群
33. 平石古墳群
34. 雲野寺跡
35. 天神山古墳群
36. 竜王山遺跡
37. 馬前城跡
38. 瑞光寺遺跡
39. 院田遺跡
40. 須恵西遺跡
41. 尾上遺跡
42. 外美濃田遺跡
43. 朝宮遺跡
44. 二ノ坪遺跡

西ノ前遺跡と梅ノ木遺跡は約2kmを隔てて、近江八幡市倉橋部町と新巻町に所在する。両町は同市の最南部に位置し、日野川を隔てて南側は蒲生郡竜王町と、東側は雪野山を挟んで八日市市と境を接している。鈴鹿山系に源を発する日野川は、蒲生町横山付近で佐久良川と合流し、雪野山山塊の西裾部に沿って北流したのち、ちょうど倉橋部町付近で西折して琵琶湖へ向っている。両遺跡ともこの日野川の右岸、雪野山山塊の南から西裾部の水田地帯に立地する。標高は、西ノ前遺跡周辺で100m前後、梅ノ木遺跡周辺で105m前後を測る。

周辺の弥生時代以前の遺跡については、八日市市側の下羽田遺跡<sup>①</sup>で縄文時代晩期の委棺墓が、六反田遺跡<sup>②</sup>で弥生時代中期の方形周溝墓が確認されている。北西方の近江八幡市千僧供町一帯でも、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓や竪穴式住居が検出されており、一大集落が形成されていたものと考えられる。竜工町域では、田中遺跡<sup>③</sup>で縄文時代後晩期の、被戸七ツ塚遺跡<sup>④</sup>や岡屋堤ヶ谷遺跡<sup>⑤</sup>などで弥生時代中期の遺物の出土が知られている。

古墳時代になると、先の千僧供町では供養塚古墳<sup>⑥</sup>を中心とする千僧供古墳群<sup>⑦</sup>が中期から後期にかけて営まれている。また後期には、雪野山山塊のはげ全域にわたって数多くの群集墳が築造されるにいたる。千僧供町一帯では引き続き古墳時代前期から後期にかけての竪穴式住居などが確認されている。日野川左岸においても、朝宮遺跡・馬興丁遺跡・七ツ塚遺跡・田中遺跡などで集落が営まれたものと考えられる<sup>⑧</sup>。

古代寺院跡では、各種の相像の出土で知られる雪野寺跡<sup>⑨</sup>、西ノ前遺跡の東方に接する倉橋部廃寺<sup>⑩</sup>がいずれも雪野山山塊の麓に営まれている。律令制下にあつて周辺は蒲生郡安吉郷に比定され、古くより安吉氏が権臣した地域でもあり、これらの寺院の建立にあつても同氏の関与があつたものと考えられる<sup>⑪</sup>。

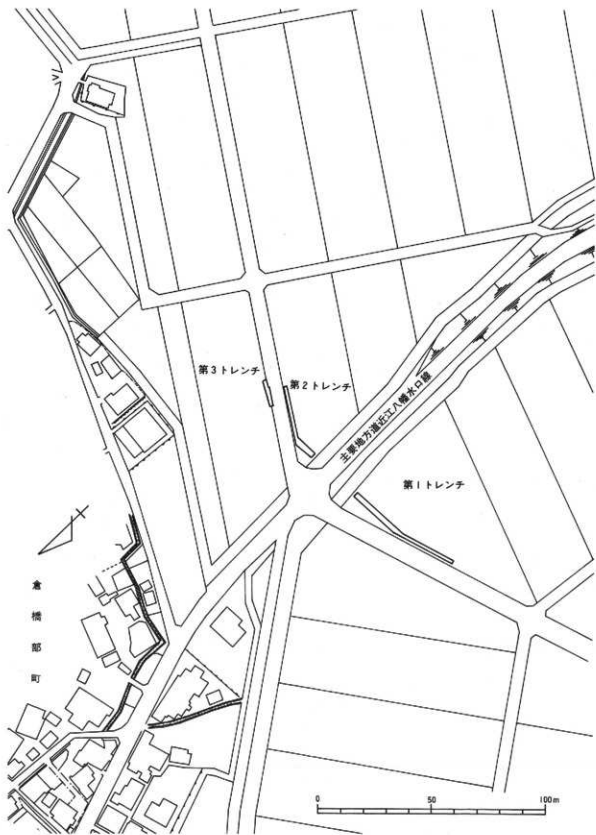
### 3. 調査経過（第2・7図）

今回の事業対象地は、倉橋部町から新巻町までの極めて広い範囲にわたっている。このため、発掘調査に先立って遺構の広がりや遺構面までの深さなどを把握するために試掘調査を実施した<sup>⑫</sup>。試掘調査では用水路敷設予定箇所に沿って、幅2m、長さ2～3mの試掘坑を約20mおきに設定した。その結果、西ノ前遺跡では主要地方道近江八幡水口線を挟んで約60m間、梅ノ木遺跡では約120m間について発掘調査を実施することとなった。なお西ノ前遺跡の調査予定範囲のうち、道路敷部分については発掘調査の遂行が困難なため、立会調査を行なった。

発掘調査は、西ノ前遺跡の第1トレンチから順次機械力によって表土を除去したのち、人力による遺構検出と掘削、写真撮影・実測作業を行なった。

西ノ前遺跡第1トレンチは西半部が幅1m、東半部が幅2.5mで、総長は約60mである。出面下50～70cmの黄褐色砂質土上面で遺構検出を行なった。第2トレンチは主要地方道を挟んで東側に設定した。西半部の幅2.5m、東半部の幅1m、総長約50mを測る。出面下50cm前後の黄～青灰色砂質土上面で遺構を検出した。トレンチ中央および東端付近で、攪乱坑が認められた。第3トレンチは、第2トレンチの溝SD0201の北延長部を確認するために、農道を挟んだ北側に設定した。幅1m、長さ15mを測る。

梅ノ木遺跡第1・2トレンチは幅1mで、長さは第1トレンチが85.5m、第2トレンチが16.5mである。出面下10cm前後の黄褐色砂質土上面で遺構を検出した。



第2図 西ノ前遺跡トレンチ配置図

## 4. 西ノ前遺跡の調査結果

### 1) 検出遺構

#### イ) 第1トレンチ(第3図・図版一～五-1)

基本層序は上層より、耕作土・灰色砂質土(床土・15cm前後)・暗灰色砂質土(5～15cm)・暗茶褐色粘性砂質土(遺物包含層・30cm前後)である。遺構面の標高は、99.3～99.4mを測る。検出した遺構には、溝・土坑・ピットなどがある。以下、遺物の出土した遺構を中心に概要を記す。

SD0101(図版三-1) トレンチ東部で検出した幅40～50cm、長さ4m以上、深さ35cm前後の索掘りの溝である。方位はN-60°-Eを示す。埋土は茶黒褐色砂質土で、弥生土器片が出土している。

SK0101(図版三-2) トレンチ中央付近で検出した径1.8m前後の円形を呈すると思われる土坑である。床土直下より掘り込まれており、埋土は暗茶褐色砂質土と暗灰色粘質土に大別される。深さは、掘り込み面より70cmを測る。下層より磁器(1)が出土している。

SK0102(図版三-2) SK0101の西側約2.4mで西肩部を検出した。東肩部はSK0101によって削平されており、炭椀・形態ともに不明である。あるいは溝状を呈するものかもしれない。床土直下より掘り込まれており、埋土は上層が茶灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。深さは床土下より70cmを測る。下層から、天目碗(2・3)、須恵器の坏(4)、磁器の皿(5)、上層から平瓦片(6)などが出土している。

SK0103(図版四-1) トレンチ西部で検出した径2.4m前後の円形を呈すると思われる土坑である。北半は未検出である。深さは、検出面より40cmを測る。土師器の焙烙片が出土している。

SK0105 トレンチ中央部東寄りで検出した土坑である。東西幅1.3m以上を測るが、大半は調査区外のため詳細は不明である。土師器の焙烙片が出土している。

SK0106 トレンチ東半部に位置する東西幅2m、南北幅1.4m以上の方形を呈する土坑と思われるが、東西隅は幅60cmにわたって溝状に張り出している。深さは検出面より30cm前後を測る。信楽焼の甕(7)、土師器の皿(8)、瓦質土器の脚部片(9)などが出土している。

SK0107(図版四-2) トレンチ東半部の溝SD0101と土坑SK0106の間あたりに位置する土坑である。径1.5mの円形を呈し、深さは検出面より35cm前後を測る。埋土は暗灰色粘質土で、施釉陶器(10)などが出土している。

SK0108 溝SD0101の北端で検出した土坑である。同溝より後出する。東西幅1.4m以上を測るが、大半が調査区外のため詳細は不明である。弥生土器、土師器皿・焙烙片、黒色土器などが出土しているがいずれも細片である。

SK0109(図版五-1) トレンチの東端に位置し、一辺1.7mの方形を呈する土坑である。深さは、検出面より10～15cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土で、若干の炭化物が混入する。陶器の摺鉢片などが出土している。

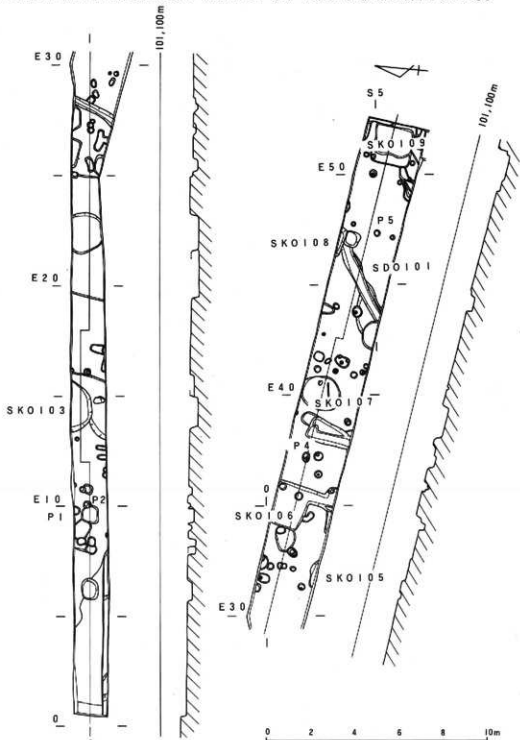
ピット トレンチのはば全域で大小のピットを検出した。径20～40cmの円形を呈するものが多く見られる。本来掘立柱建物の柱穴として穿たれたものも存すると考えられるが、トレンチが狭小なこともあって、その配置を明らかにすることはできなかった。P2・P3から須恵器の坏(11・12)が、P4からは甕(13)が出土している。

#### ロ) 第2・3トレンチ(第4図・図版五-2～六)

主要地方道近江八幡水口線の東側に設定した東西方向のトレンチである。第2トレンチの基本層序は、上層より耕作土(15cm)・床土(5~10cm)・茶灰褐色砂質土(30cm前後)である。遺構面の標高は、99.3m前後を測る。トレンチ東部中央付近と東端では、近時の攪乱坑が見られ、多量の瓦片などが廃棄されていた。

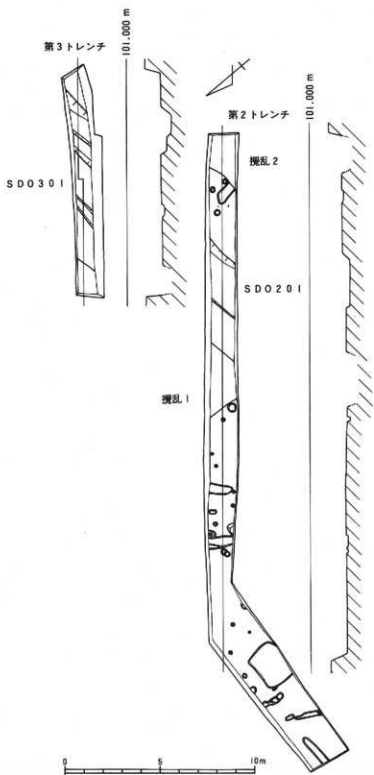
第3トレンチは、農道を挟んで北東約7mの地点に設定した。ここでも溝の他に、攪乱坑が認められた。

SD0201・SD0301(図版六) 第2トレンチの東部から第3トレンチにかけて検出した幅2~2.5m、長さ13m以上を測る素掘りの溝である。深さは検出面より40cm前後を測る。方位はほぼ東西方向を示す。埋土は、上層が茶褐色砂質土、下層が暗灰色粘質土である。下層より、土師器の皿(24~34・41)、黒色土器の碗(35・36)、瓦質土器の脚部片(37)、陶器の鉢(38)、須恵器の坏(39)、丸瓦(42)などが出土している。



第3図 西ノ前遺跡第1トレンチ遺構配置図





第4図 西ノ前遺跡第2・3トレンチ遺構配置図

## 2) 出土遺物(第5・6図 図版七～十)

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・各種陶磁器・瓦・石製品などがある。以下、出土した遺物ごとに遺物の概要を記すことにする。

### イ) 第1トレンチ(1～23)

SK0101 1は、磁器の香炉かと思われる。底部は高台を削り出し、脇に三足を付す。体部はほぼまっすぐに立ちあがっている。胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は素地が灰白色、釉調は青灰色を呈している。復元底径7.6cmを測る。

SK0102 2・3は、天目碗である。2の高台は高く脇に段を持ち、体部は内湾せずに開いている。口縁部は上方へたちあがってのち端部を外反させる。3の体部および口縁部も同様の形態を呈する。3の胎土には石英粒を含み、焼成はいずれもやや軟質、素地の色調は2が灰白色、3は黄灰色を呈している。釉調はいずれも茶味を帯びた黒色である。2は口径11.7cm、器高6.5cm、底径4.7cmを測る。3は復元口径10.6cmである。4は、須恵器の坏である。高台は断面方形を呈し、内側の角で接地する。胎土には小砂粒を含み、色調は淡灰色を呈する。復元底径10.4cmを測る。5は、施釉陶器の皿である。口縁部はやや外反気味である。素地の色調は灰白色、釉調は青味を帯びた灰色を呈する。復元口径11.4cmを測る。6は、平瓦片である。凸面には、一辺1cmの斜格子状の叩き痕が、凹面には糸切り痕と細かい布目が認められる。胎土には小砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈している。厚さ1.5cmを測る。7は、信楽焼の大甕である。口縁部内面の段は明瞭でなく、上端部は水平面を有するが外方への突出は顕著でない。胎土には1～3mmの石英・長石粒を多く含み、色調は橙褐色を呈している。復元口径34.4cmを測る。8は、土師器の皿である。底部中央を上方へ大きく突出させる。口縁部内外面に横ナデを施す。胎土には小砂粒を含み、色調は淡橙褐色を呈している。復元口径6.0cm、器高1.5cmを測る。9は、瓦質土器の釜の脚部である。器面には、細かいハケ目が認められる。

SK0107 10は、施釉陶器の壺類の底部と考えられる。素地の色調は灰白色、釉調は暗茶灰色を呈する。復元底径10.1cmを測る。

P2 11は、須恵器の坏である。体部はほぼまっすぐに開いている。焼成は軟質で、色調は淡青灰色を呈する。復元底径8.3cmを測る。

P3 12は、須恵器の坏である。上半部は欠失するが、口縁部にたちあがり有するものと思われる。体部外面をヘラケズリする。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈する。

P4 13は、幅5.3cm、現存長11.6cmを測る甕である。

包舍層 14は、天目碗である。高台は、断面逆台形を呈する。体部はやや内湾気味に開き、口縁部は直立して端部を外反させている。胎土には砂粒を含み、素地の色調は炭灰白色を呈する。焼成はやや軟質、釉調は茶味を帯びた黒色である。口径11.6cm、器高6.6cm、底径5.2cmを測る。15は、施釉陶器の碗と考えられる。焼成は堅緻、釉調は青ないし白灰色を呈している。復元口径11.8cmを測る。16は、平瓦片である。凸面には斜格子状の叩き痕が、凹面には糸切り痕と細かい布目が認められる。須恵質に近く焼成されており、色調は淡青灰色を呈する。厚さ1.5cmを測る。17は、灰釉陶器の碗である。高台は低い二口月形を呈する。底部外面には糸切り痕を残している。胎土は精良、焼成も良好である。色調は灰白色を呈している。復元底径6.7cmを測る。18は、信楽焼の摺鉢である。口縁端部内面に内傾する面を有する。内面には、5条一組のおろし目を約3.5cm間隔に施す。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。復元口径27cmを測る。19は、土師器の皿である。口縁部内外面に横ナデする。

復元口径9.7cmを測る。20～22は、いずれも信楽焼である。20は壺の底部で、復元底径10.8cmを測る。21は壺の底部と考えられる。底径15.2cmを測る。22は、摺鉢の底部である。内面には、6条一組のおろし目を密に施す。復元底径13.0cmを測る。いずれも胎土に長石粒を含み、色調は橙褐色を呈している。

表採 23は、信楽焼の壺もしくは壺の底部である。復元底径は11.0cmを測る。

#### ロ) 第2トレンチ (24～40)

SD0201 24～34は、土師器の皿である。34のみ大型に属する。24～33は、おおむね広く平らな底部を有し、口縁部を横ナデによって引き起こしている。外面の体部下半から底部にかけては未調整である。胎土にはいずれも小砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈するものが多い。口径は7.5～9.8cm、器高1.4～1.7cmを測る。34は、口径13.9cmを測っている。35・36は、黒色土器の碗である。35の内面には、斜格子状のヘラミガキが認められる。外面は口縁部に横方向のヘラミガキを施し、体部には指頭痕が残るが、全体に器面の磨滅が著しい。口径14.4cm、器高4.2cm、底径5.3cmを測る。36は、全体的に肉厚なつくりである。口縁端部内面の沈線は認められない。口縁部は内外面とも横方向の、体部内面は縦方向の乱雑なヘラミガキを施す。体部外面には指頭痕が認められる。口径14.4cm、器高4.6cm、底径6.6cmを測る。37は、瓦質土器の釜の脚部片である。38は、須恵質陶器の鉢の底部である。高台は、断面三角形を呈する。体部外面は、ヘラケズリを施し、内面は使用による磨滅が顕著である。胎土には小砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈している。復元底径13.0cmを測る。常滑窯製品と考えられる。39は、須恵器の坏である。口縁端部は強く反外している。二次的な火熱を受けたものと考えられ、内外面とも煤が付着している。復元口径11.3cmを測る。

攪乱1 40は、弥生土器の壺の底部と考えられる。外面にハケ目が認められる。胎土には1mm前後の石英粒などを多量に含んでいる。色調は、暗～黒褐色を呈する。

#### ハ) 第3トレンチ (41～42)

SD0301 41は、土師器の皿である。形態・調整などの諸特徴は、第2トレンチSD0201出土の土師器皿と同様である。口径8.9cm、器高1.8cmを測る。42は、いわゆる玉縁付きの丸瓦である。凹面には布目痕が認められるが、全体に器面の磨滅が著しく調整などの詳細は不明である。現存長13.8cm、厚さ1.4cm前後を測る。胎土には長石粒などを多く含み、焼成は軟質である。

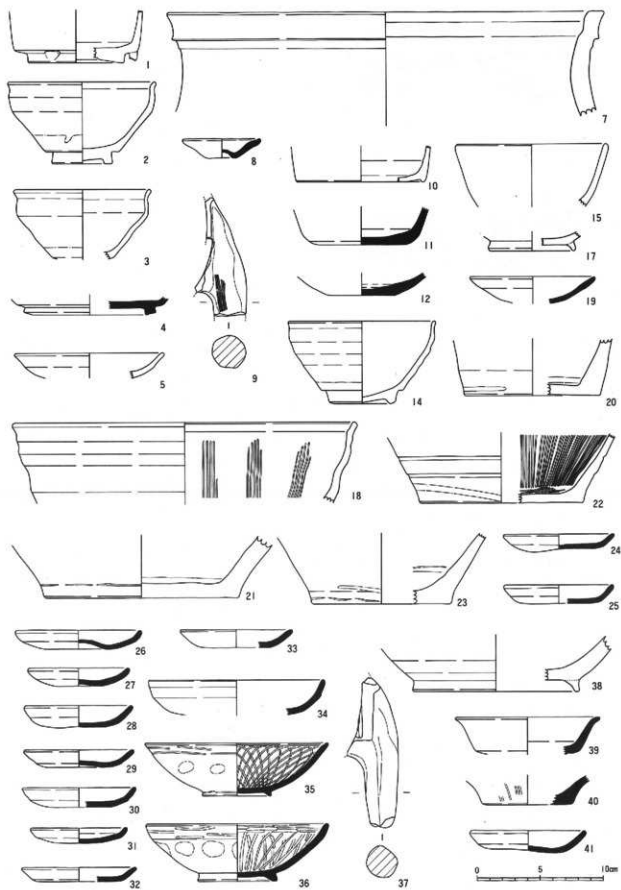
### 3) 小結

ここでは、上述した川上遺物のうち、形態的特徴や調整手法など、編年の手がかりを得ることができるものについて、若干の时期的位置付けを与えたとともにその川上遺構についても所属時期の比定を試みることにする。

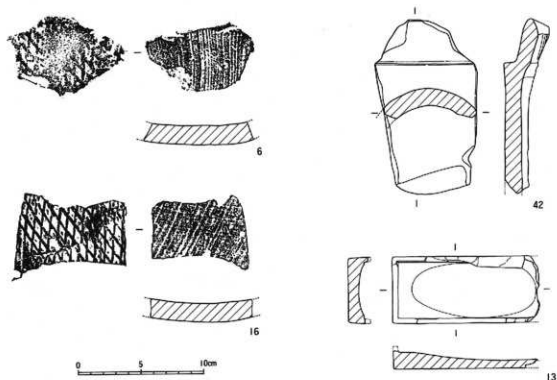
古墳時代以前に属する遺物が、ごく少量出土している。40の弥生土器の他、12の須恵器の坏は古墳時代後期のものと思われる。第1トレンチ溝SD0101から弥生土器片が出土しているが、埋土への混入と思われ、むしろ溝の方位から推して後世の条里地割に規制された遺構である可能性も否定できない。

奈良時代から平安時代にかけての土器もわずかながら出土している。4・11の須恵器の坏は、8～9世紀代に、17の灰陶器の碗はおおむね10世紀代のものと考えられる。この時期の遺構についても明らかでない。

溝SD0201・SD0301出土の土師器の皿の一群(24～34・41)には、大きな時期差は認められず、ほぼ12世紀末から13世紀代におさまるものとみられる<sup>9)</sup>。黒色土器の碗(35・36)、須恵質陶器の鉢(38)についてもほぼ同様の年代観が得られる<sup>9)</sup>。したがって本遺構は、少くとも鎌倉時代までは溝としての機能を果していたものと思われる。



第5圖 西ノ前遺跡出土遺物(1)



第6図 西ノ前遺跡出土遺物(2)

室町時代から江戸時代にかけての遺物は、第1トレンチに集中している。信楽焼製品には、壺(7)・摺鉢(18・22)・壺(20・23)などがみられるが、いずれも15世紀後半から16世紀代に属するものと考えられる<sup>49</sup>。また、天目碗(2・3・14)については、16世紀代以降のものとみられる<sup>49</sup>。この時期の遺構としては、第1トレンチの土坑群(SK0101・02・03・05・06・07・09)などが考えられる。

## 5. 梅ノ木遺跡の調査結果

### 1) 検出遺構

#### イ) 第1トレンチ(第8・9図 図版十一～十三-1)

基本層序は上層より、耕作土(15~20cm)・床土(10cm前後)・茶灰褐色砂質土(10cm前後)である。遺構検出は、暗茶褐色砂質土の上面で行なった。遺構面の標高は、104.9~105.0mを測る。検出した遺構には、溝・土坑・自然流路・ピットなどがある。

SD0102(第9図・図版十二-1) 幅2.4m、長さ1m以上の東西方向の溝である。深さは、検出面より40cm前後を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土と黄茶褐色砂質土(炭化物混入)に大別し得る。弥生土器(1~6)が出土している。

SD0103 幅70cm、長さ1m以上の溝である。深さは、検出面より15cm前後を測る。弥生土器・土師器片が出土している。

SD0104 自然流路SR0101と02の間で検出した幅35cm、長さ7.6m以上の素掘りの溝である。南端はSR0101の北肩部を掘り込んでおり、北端は西側へほぼ直角に屈曲している。底部は、段状に掘り込まれている部分がある。

土師器片などが出土している。

SD0105 自然流路SR0102の南肩部を掘り込んでいる幅60cm程の溝と思われるが、調査区が狭小なため、詳細は不明である。弥生土器片が出土している。

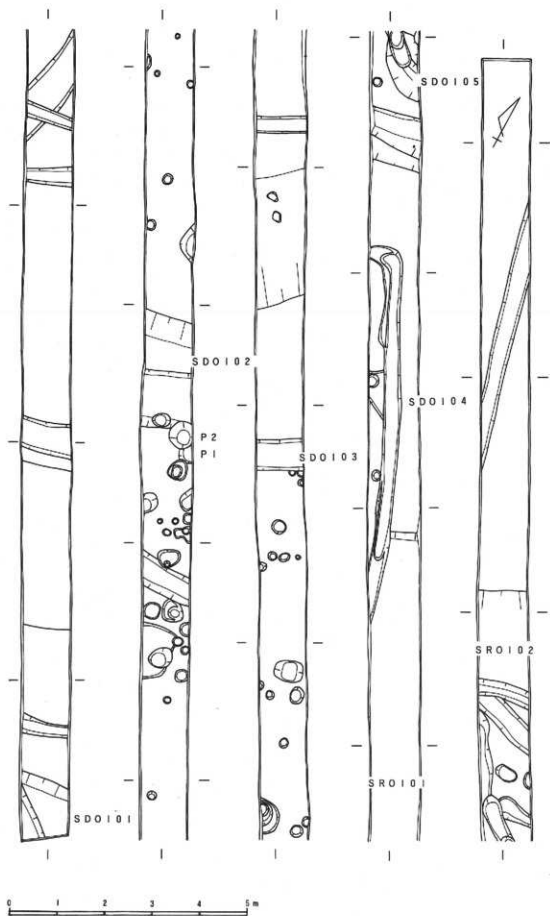
SR0101(第9図・図版十二-2～十三-1) トレンチ中央部で検出した幅12.5mを測る東西方向の流路跡と考えられる。最深部は、検出面より70cm前後を測る。埋土は、上層より暗茶褐色砂質土・黄灰褐色砂質土ないしは暗灰色砂質土である。出土遺物には、弥生土器片・円筒埴輪片(7)・土師器など各時期のものがある。

SR0102(第9図) SR0101の北側に位置する幅8.3mを測る東西方向の流路跡と考えられる。底部には、数条の溝が認められる。最深部は、検出面より65cm前後を測る。弥生土器(8)などが出土している。

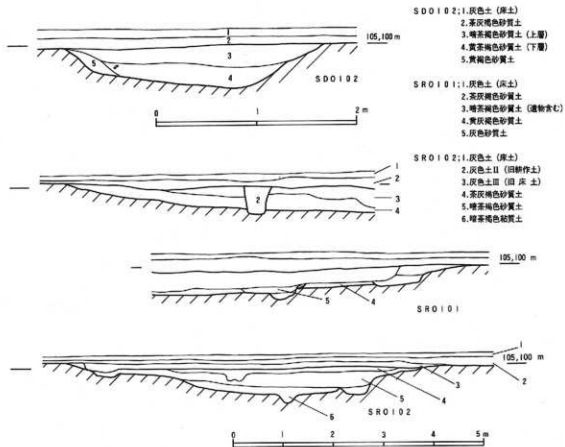
ピット トレンチ南半部を中心に、径15～60cmの円形を呈するピットが認められた。掘立柱建物の柱穴として穿たれたものかどうかは明らかでない。各ピットから土師器の皿(9)、硯片(10)、弥生土器(11)などが出土している。



第7図 橋ノ木遺跡トレンチ配置図



第8図 梅ノ木遺跡第1トレンチ遺構配置図



第9図 梅ノ木遺跡第1トレンチSD0102、SR0101・02西壁断面土層図

ロ) 第2トレンチ(第10図・図版十三-2)

第1トレンチの南側に設定した。基本層序は、第1トレンチと同様である。溝・土坑・ピットなどを検出したが、出土遺物はSD0201で灰軸陶器(12)が認められたのみであった。

2) 出土遺物(第11図・図版十四)

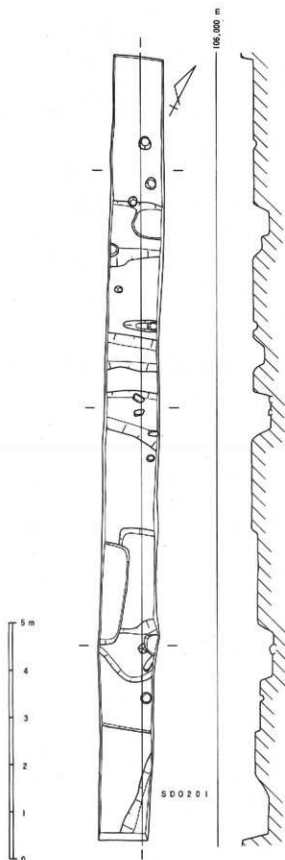
今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・埴輪片・土師器・各種陶器・石製品などがあるが、いずれも小片であった。以下、図化したものについて概述する。

イ) 第1トレンチ(1~11)

SD0102 1~6は、弥生土器である。1は、復元口径14.4cmを測る壺である。口縁部は内湾してたちあがり、上端部に面を有する。口縁外面に摺掻きによると考えられる数条の直線文が認められるが、器面の磨滅が著しく、調整ともに詳細は不明である。2・3も、壺の口縁部片である。2は、復元口径15.9cmを測る。口縁部は外上方に大きく開き、端部を下方へ肥厚させている。器面の調整は明らかでない。4~6は、甕である。4は、肩部に張りを持たず、口縁部は「く」の字状に開き、端部をまるくおさめている。口縁部内面に横方向のハケ目がわずかに認められる。6もほぼ同様の形態を呈するものと思われる。復元口径は、4が27.6cm、6が26.8cmを測る。5の口縁端部は下方をわずかに肥厚させている。外面に縦、内面に横方向のハケ目が認められる。復元口径25.0cmを測る。

以上の土器は、いずれも胎土に1~2mmの砂粒を含み、焼成は軟質、色調は5が暗褐色の他はおおむね淡ない





第10図 梅ノ木遺跡第2トレンチ通観配置図

しは橙褐色を呈している。

SR0101 7は、円筒埴輪片である。突帯部は断面台形を呈し、貼付け後、横ナデを施す。外面に横方向のハゲ目が認められる。胎土には長石・石英粒などを多く含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈している。8は、弥生土器の壺である。口縁部は逆「ハ」の字状に大きく開き、端部は単純におさめる。頸部に2条以上のヘラ掻きによる沈線文を施している。器面の磨減が著しく、調整は明らかでない。胎土には1~3mmの砂粒を含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈している。復元口径16.5cmを測る。

P1 9は、土器器の皿である。広い底部と内湾気味に開く口縁部を有する。口縁部内外面に横ナデを施す。胎土には小砂粒を含み、焼成は軟質、色調は暗褐色を呈している。口径8.7cm、器高1.9cmを測る。

P5 10は、硯の断片である。石材は粘板岩と考えられる。残存幅7.3cm、縁部の厚さ1.6cmを測る。

P6 11は、弥生土器の壺である。頸部は直立し、口縁部は外反して端部を下外方へ肥厚させている。頸部に4条の横掻き直線文を施す。器面の磨減のため、調整は不明である。胎土には1~2mmの砂粒を多量に含み、焼成は軟質、色調は淡褐色を呈している。復元口径14.1cmを測る。

#### ロ) 第2トレンチ(12)

SD0201 12は、灰釉陶器の瓶子の底部と思われる。体部外面はヘラケズリ、内面はロクロナデ調整である。胎土には長石粒などを含み、焼成は良好、素地の色調は淡灰色、釉調は緑味を帯びている。復元底径8.2cmを測る。

### 3) 小結

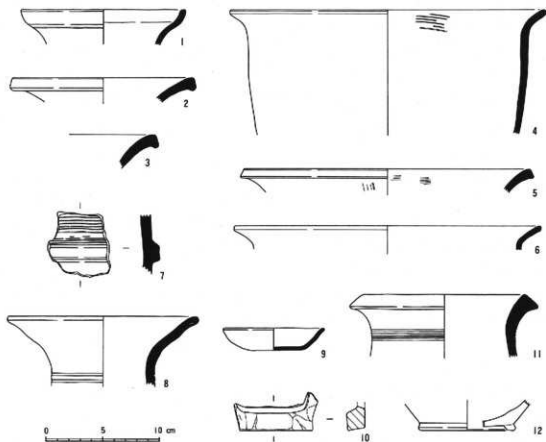
上述した出土遺物は时期的に、弥生時代、古墳時代・平安時代以降に大別することが可能である。

溝SD0102を中心に出土した弥生土器の器形には、壺と甕がある。さらに口縁部の形態から壺は四類、甕は二類程に細分できるとと思われる。これらの土器の属する時期はおおむね弥生時代中期前半を中心とするものと思

れるが、8のへう描き沈線を有する壺については、前期新段階に遡り得る要素を備えている。

古墳時代の遺物には7の埴輪片があるが、遺構については明らかでない。

平安時代以降の遺物には、12の灰釉陶器、9の土師皿がある。その他、各遺構からは土師器や各種陶器片が出土しており、大半の遺構が中世を中心にした時期に属するものと考えられる。また、自然流路SR0101・02についても、近世までには埋没していたものと考えられる。



第11図 梅ノ木遺跡出土遺物

## 6. まとめ

### 1) 西ノ前遺跡について

各調査区にわたって遺構を検出したが、トレンチが狭小なこともあって、各遺構の全体的な構造や性格あるいは遺構相互の関連性などを明らかにすることは困難であった。ここでは、出土遺物の年代観にもとづいて遺構の所属時期を大別し、各時期の有する問題点を指摘することでまとめにかえたい。

古墳時代以前については、弥生土器と古墳時代後期に属すると思われる須恵器が極く少量出土しているのみであり、遺構については明らかにできなかった。弥生時代から古墳時代にかけての日野川右岸地域では、北西方の千僧供町一帯で弥生時代中期以降相当規模の集落が継続して営まれており、山裾部に立地し日野川の氾濫原にも近い当遺跡周辺にあっては、集落が形成されたとしてもその規模は小さなものであったと考えられる。古墳時代

後期には雪野山山系一帯に群集墳が築造されるに至るが、とりわけ西南麓のものについては、必ずしもその実態は明らかでないが日野川左岸域(現竜王町域)の集落群との関連を考慮する必要がある<sup>④</sup>。

次に今回の調査でとくに注意されるのは、瓦類の出上と溝SD0201(0301)の検出である。瓦類については極く少量の出上であり、しかも丸瓦と平瓦の小片のみであってその位置付けにはなお慎重さを要するが、北東に鎮座する安吉神社周辺にその所在が想定されてきた「倉橋部庵寺」に関連する遺物と見てはば誤りないものと考えられる。また溝SD0201(0301)についても部分的な検出に過ぎず、もとより推測の域を出ないが、その主軸がほぼ東西方向を示すことから、いわゆる統一条里方向の規制を受けないより古い地割に関連する遺構である可能性も否定できない。このことから今にわかにかこの溝が「寺院」に関連するものと断ずるにはさらに詳細な調査と多くの検討を待たねばならないが、仮に「寺院」に関連するものとすれば、この溝より南側は日野川の氾濫原が迫っていることからあるいは「寺地」の南限を示唆する遺構であることも考えられる<sup>⑤</sup>。溝の開削時期についても明らかでないが、出上遺物の年代観から平安時代末ないしは鎌倉時代までは溝としての機能を果たしていたものと考えられる。

従来、「倉橋部庵寺」については、安吉神社下方の平地より単弁八葉蓮華文軒丸瓦一個と平瓦片などの出土が知られていたのみであり<sup>⑥</sup>、その実態には不明な部分が多く存するが、今回わずかながらもその存在に迫り得る手がかりを得ることができたものと言える。同庵寺は、周辺の有力氏族とされる安吉氏と関連の深い寺院とも考えられており、南東約3kmの地点に位置する雪野寺跡<sup>⑦</sup>をはじめ蒲生郡内の古代寺院全体のなかでの位置付けなども今後の重要な課題の一つと考えられる。

その他、中世後期から近世に属する遺構には第1トレンチで検出した土坑群がある。このことより、当該期の集落が現在よりもさらに西南方に広がっていたことが予想される。

## 2) 梅ノ木遺跡について

西ノ前遺跡同様、トレンチ幅が狭小であったため、各遺構の構造や規模については不明な点が多い。

今回の調査では、弥生時代の遺物が出土している。これは、当遺跡ではいまままでに確認されていなかったものである。第1トレンチの溝SD0102を中心に出土した土器類はいずれも小片であり、しかも磨減が著しいため、その詳細については多くを知り得ないが、時間的にはおおむね中期前半頃を中心とするものと考えられる。なかで一点のみではあるが、前期の様相を帯びる壺形土器が含まれるのが注意される。遺物はいずれも日野川方向へ注ぐと考えられる溝あるいは自然流路跡からの出土であり、本来東方の山裾から現在の新巻町の集落を中心とした緩傾斜部に小規模な集落が営まれていたものと考えられる。その存続期間については明らかではないが、おそらくは短期間で終焉した一時的な集落であった可能性が高い。いずれにしても日野川中流域における弥生集落の展開を探るうえで新たな資料を提供したものと見えよう。

次に、自然流路跡から一点のみであるが円筒埴輪片が出土している。雪野山西麓部の古墳群については横穴式石室を内部主体とする後群集墳の検討が進んでいるが<sup>⑧</sup>、本格的な発掘調査は行なわれておらず、なおその実態については不明な点が多い。今回の調査によって、新巻町周辺に従来知られていなかった埴輪を有する古墳が存在する可能性が生じたことになる。

以上、小規模な調査ながら、長く不明な部分の多かった周辺の弥生時代と古墳時代の一端について、新しい知見を得ることができたと言える。

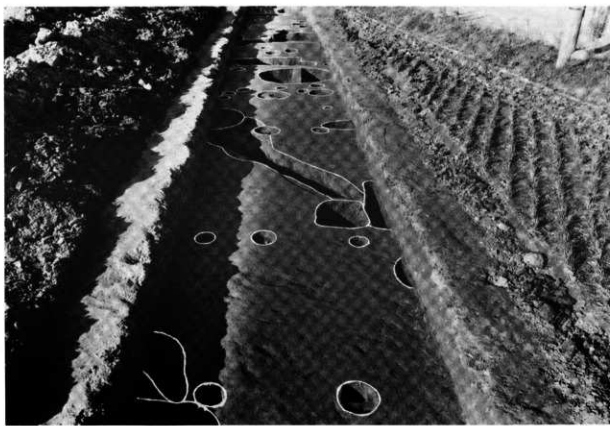
注

- ① 近藤 滋・松沢 修「八日市市下羽田遺跡」(『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-2 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1979)
- ② 石原道洋「五反田遺跡」(『八日市市文化財調査報告』4 八日市市教育委員会 1984)
- ③ 丸山徳平「原始・古代の竜王町」(『竜工町史』上巻 滋賀県竜王町役場 1987)
- ④ 注①に同じ。
- ⑤ 岩崎直也「湖東における高地性集落の調査」(『滋賀文化財だより』No68 (財)滋賀県文化財保護協会 1982)
- ⑥ 柏倉亮吉「供養塚古墳」(『滋賀県史蹟調査報告』第6冊 滋賀県 1934)  
 岩崎直也「多種類の彩象埴輪が出土近江八幡市千僧供町千僧供古墳群」(『滋賀文化財だより』No74 (財)滋賀県文化財保護協会 1983)
- ⑦ 「県指定史跡千僧供古墳群」(『滋賀県文化財調査年報』昭和58年度 滋賀県教育委員会 1985)
- ⑧ 注④に同じ。
- ⑨ 柏倉亮吉「野野寺塚発掘調査報告」(『日本古文化研究所報告』第7冊 日本古文化研究所 1937)
- ⑩ 西田 弘「倉橋徳應寺」(『滋賀県百科事典』大和書房 1984)
- ⑪ 注④に同じ。  
 宇野茂樹「近江國阿伎甲阿伎氏族について」(『史迹と美術』355号 史迹美術同友会 1965)  
 森山宣昭「近江の古代豪族 安古氏発展の背景」(『滋賀県地方史研究紀要』第7号 滋賀県地方史研究家連絡会 1980)
- ⑫ 昭和61年度に実施した。
- ⑬ 横田洋三「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告』第5輯-平安京左京五条三坊十五町一 (財)古代学協会 1981)
- ⑭ 黒色土器については、森 隆「滋賀県における古代木・中世土器」(『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会 1986)による。
- ⑮ 信楽焼製品については、満岡忠成『近畿Ⅰ』(『日本やきもの集成』6 平凡社 1981)、井上喜久男「伊賀地方出土の中・近世陶器について」(『阿山町埋蔵文化財調査報告』1-菊永氏城跡発掘調査報告- 阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1987)による。
- ⑯ 樽崎彰一他『瀬戸 美濃 飛騨』(『日本やきもの集成』3 平凡社 1980)
- ⑰ 注③に同じ。
- ⑱ 調査地点北方の集落周辺には南北方位を示す地割も存するが、寺院自体の存否とあわせて「寺域」の想定にはさらに多くの検討を要する。
- ⑲ 注⑧・⑩に同じ。
- ⑳ 最近、寺域の測量調査が実施され、その構造が解明されつつある。  
 岡村秀典・菱田哲郎「滋賀県野野寺跡の測量調査」(『史林』第70巻第4号 史学研究会 1987)
- ㉑ 注③に同じ。

# 圖 版



1. 遺跡近景（東から）



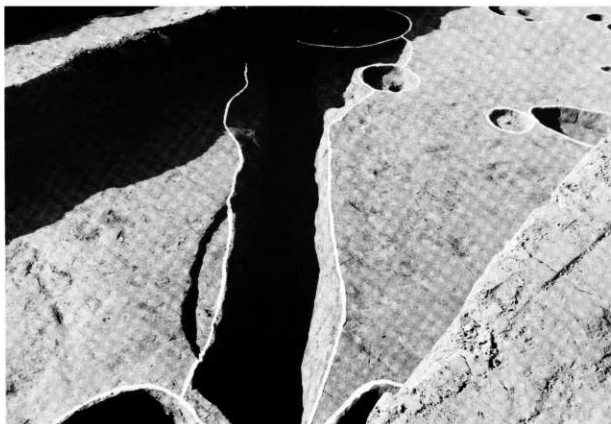
2. 第1トレンチ東半部全景（東から）



1. 第一トレンチ東半部全景 (南から)



2. 第一トレンチ西半部全景 (南から)



1. 第1トレンチ溝SD0101

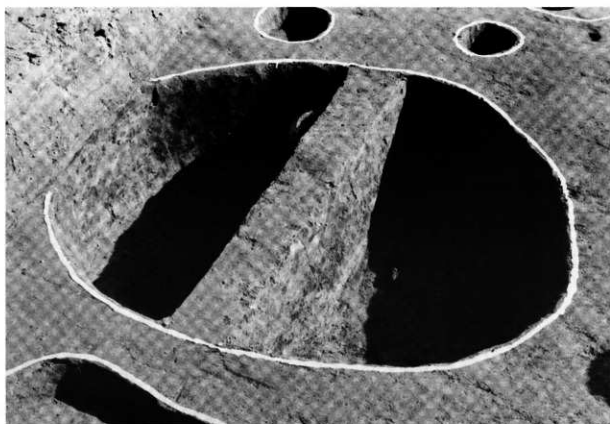


2. 土器片の写像 No. 00-00-00

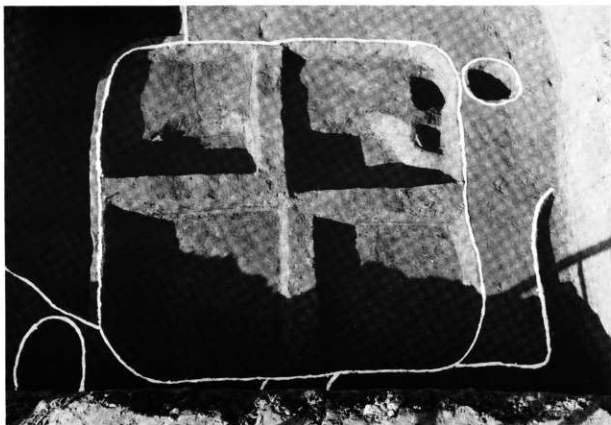




1. 第1トレンチ土坑SK0103



2. 第1トレンチ土坑SK0107



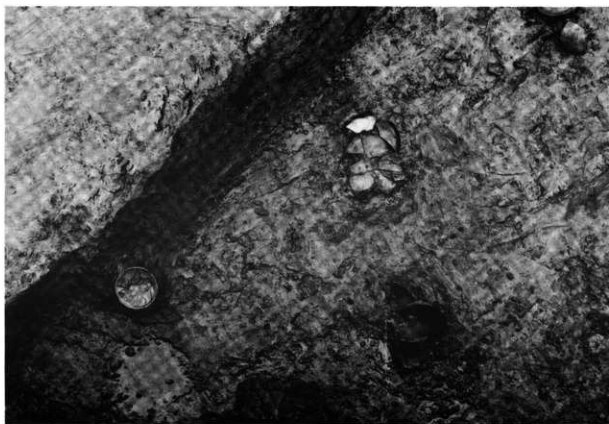
1. 第1トレンチ土坑SK0109



2. 第2トレンチ全景（東から）



1. 第2トレンチ溝SD0201



2. 第2トレンチ溝SD0201遺物出土状況



1



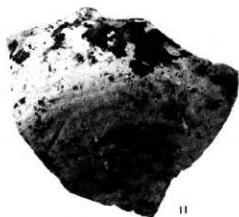
20



2



21



11



22



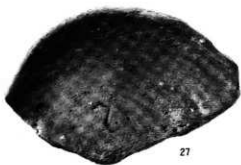
14



24



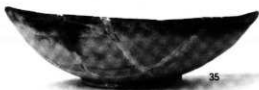
26



27



28



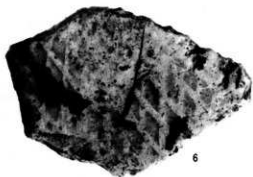
35



36



41



6



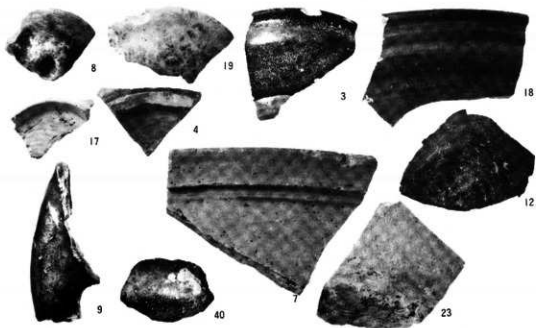
16

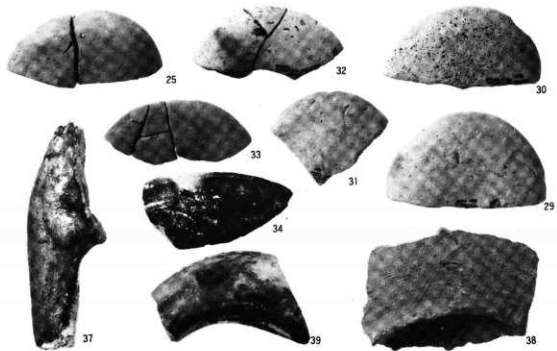


42



13





出土遺物(4)



1. 遺跡近景 (南から)



2. 溝トシノ土層 (南から)





1. 第1トレンチ溝SD0102



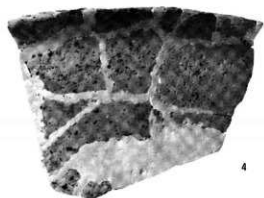
2. 第1トレンチ自然流路SR0101 (北から)



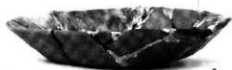
1. 梅ノ木遺跡のトレンチ (西から)



2. 第2トレンチ全景 (南から)



4



9



11



7



12



2



3



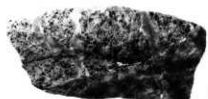
5



8



6



1

第 3 章 草津市<sup>やまだこう</sup>山田港遺跡

## 1. 位置と環境

山田港遺跡は草津市南山田町地先に位置する。十二川の下流右岸にあり、浜街道(県道大津-近江八幡-彦根線)が北川を越える子守橋の北約500mに当る。西に口高金属の工場跡が倉庫として残り、東と北は水田、南には十二川が流れている。

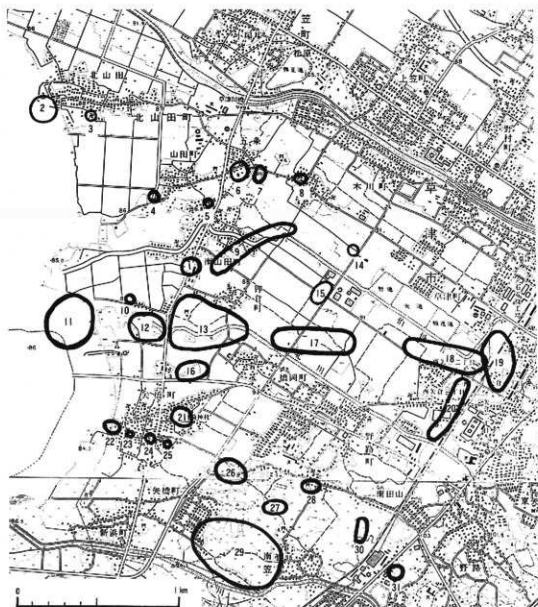
この地は、条里地割に沿って流れる伯母川が南山田の集落に入って乱れ始めた所に近く、南を流れる北川の氾濫原との真中に位置する。北東に前述の南山田の集落、南東には御倉の集落が存在し、条里地割が乱されずに残っていることから、両河川の氾濫をまぬがれた地であったことがわかる。周辺の小字名には、西に浜街道に接して「二ノ坪」があり、東には明治42年に若松神社に合祀された大市神社が祀られていたとされる「塚之越」が隣接している。また当地には、「客人(人カ)西」という小字名が残されている。これは、『近江栗太郎志』第4巻によれば、南山田村に祀られていたとされる客人権現社との関連性が憶ばれる地名である。

草津市南西部の条里地割は、矢橋の集落と御倉の集落の間、及び現在の浜街道付近から西側は大きく乱れている。前者は、北川が大きく流路を変えた範囲内にあるためである。また後者は、明治25年の地形図に見られるように、山田の集落から南は大小の水路が発達しており、この地はかつて内湖が存在していた可能性が考えられている。しかも、浜街道以西の小字には、水辺を思わせる地名が多いことも挙げられている。従ってこの付近にまで条里地割は発達しなかったものと思われる<sup>①</sup>。

次に、山田港の位置であるが、『近江栗太郎志』第3巻には、「今山田村大字山田に在り古への港は大字北山田に在りと傳ふ」と書かれ、『草津市史』第一巻には、北・元・南の三集落のうち、港を形成する最も好条件を備えていた地として元山田(今の山田の集落)を推定している。この場所は現在、山寺川の downstream にあるが、湖岸よりかなり奥まった所にある。しかし、同書によればこの周辺にかつて内湖の存在が推定され、内陸部まで水上を利用して荷物の運搬が行なわれたものと考えられている。前出の地形図によれば、山田の集落の南東端に琵琶湖から太い水路がのびており、集落内を通過して東へのびる道も見られる。その道の先には佐々木六角氏が山田渡の監視に集めた山田城が大字北山田五條(旧山田小学校敷地、現在は山田公民館がある)にあったとされる。この山田城も、港へ出入りする船の監視をするのであってみれば、港に比較的近い所に築かれたのであろう。

このように、山田港(特に中世以前)は現在の山田の集落の南西端にあったと考えられ、内湖の湖地化とともに重要性が薄れ、北山田港へその中心が移っていったものと思われる。

さて、山田港遺跡周辺の遺跡であるが、縄文時代には北山田湖底遺跡<sup>②</sup>・矢橋湖底遺跡<sup>③</sup>など湖岸や湖底に多く分布している。弥生時代についても、御倉遺跡<sup>④</sup>・襖遺跡などでわずかに見られる程度である。次の古墳時代になると近辺に多くの古墳が見られる。南山田町には直径40mの円墳をもつ人宮若松神社古墳<sup>⑤</sup>、『近江栗太郎志』に記載された大市神社跡古墳<sup>⑥</sup>(南山田古墳群に含まれる。消滅)、北山田町には4基の円墳が残る五条古墳群<sup>⑦</sup>、矢橋町には榎崎神社境内古墳群<sup>⑧</sup>などの後期古墳が知られている。また、古墳以外の遺跡では、河川跡から5～6世紀の遺物が多量に出上した北岸遺跡<sup>⑨</sup>、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の方形周溝墓が検出されている御倉遺跡<sup>⑩</sup>、4～5世紀の溝と6～7世紀と想定される掘立柱建物をもつ草ノ町遺跡<sup>⑪</sup>など、古墳時代に入ると急激に遺跡の数が増える。奈良時代には谷遺跡や中兵衛遺跡など激減するが、平安時代には石津寺庵寺遺跡や金峰山寺遺跡などの寺院跡や多数の掘立柱建物をもつ御倉遺跡<sup>⑫</sup>・中畑遺跡<sup>⑬</sup>、それに『近江輿地志略』に延喜6年(906)に勧請されたと記載されている蔵下権現社が前身であったと言われる渡海神社が山田港跡と山田城



第1図 山田港遺跡と周辺の遺跡

1. 山田港遺跡
2. 北山田湖底遺跡
3. 長安寺廃寺遺跡
4. 里南遺跡
5. 大宮若松神社古墳
6. 山田城址
7. 五条古墳群
8. 金峰山寺遺跡
9. 南山田古墳群
10. 蓮如堂遺跡
11. 矢橋湖底遺跡
12. 北堂遺跡
13. 御倉遺跡
14. 中兵庫遺跡
15. 墓ノ町遺跡
16. 狭間遺跡
17. 橋遺跡
18. 谷遺跡
19. 中畑遺跡
20. 矢倉古墳群
21. 曙崎神社古墳群
22. 矢橋港遺跡
23. 矢橋城址
24. 石津寺廃寺遺跡
25. 大善寺遺跡
26. 中ノ沢遺跡
27. 南笠古墳群
28. 南山田古墳群
29. 西海道遺跡
30. 柳並遺跡
31. 広野遺跡

跡の間に位置している。鎌倉時代以降には、長安寺廃寺<sup>③</sup>・山田城跡<sup>④</sup>・里南遺跡<sup>⑤</sup>・蓮如堂遺跡<sup>⑥</sup>・大善寺遺跡などの寺院跡や城跡が点在している。『近江栗太郎志』にみられる山田の日吉社神人の存在にも明らかのように、それらは山田の地が坂本との水上交通の要港であったためである。

山田の地が賑わいを見せていたのは室町時代までであって、以降は北山田や矢橋に湖上交通の要港としての地位を奪われていった。その理由としては、天正11年(1583)に建立された長安寺の寺内として北山田が発展し、元山田の内瀬が陸化したためでもあった<sup>⑦</sup>。また、比叡山の里坊として勢力をもっていた坂本が衰退するとともに山田も港としての機能を縮小したためであった。

## 2. 調査

### (1) 調査に至る経過

草津市南西部の南山田町から御倉町にかけて、は場整備事業が昭和62年度から行なわれることになり、山田港遺跡範囲内を通る水路部分について試掘調査が行なわれた<sup>43</sup>。その結果、遺構および遺物の確認された部分について、発掘調査が行なわれることになった。

### (2) 調査経過

トレンチは十二川の downstream、日高金属の倉庫の東に隣接して設けられた。トレンチの平面形は十二川右岸から北北西へのび、途中でやや北の方へ振る形状を呈している。長さ40m、幅4mの160㎡を対象として調査を行なった。

現出面を約80～100cm掘り下げたところで遺構面が検出されている。層位は約20cmの耕作土と床土の下は、褐色の砂層が堆積している。遺構はトレンチ中央に集中して見られた。トレンチ南端は、十二川の方へ傾斜して堆積しており、砂層と礫層が交互に混っていた。

トレンチ内は湧水が著しく、排水作業に手間どった。

調査期間は昭和62年12月7日～12日であった。

## 3. 遺構

### 溝

SD1 トレンチやや南寄りでもトレンチに直交した形で検出された。淡青色のシルト層を切り込んで、長さ4.0m、幅11.5m、深さは0.5mを測る。埋土は上・下2層に分かれ、上層より多量の弥生時代から古墳時代の土器が出土している。

### ピット

SD1の北辺に隣接して検出された。いずれも直径0.2m～0.5mの円形を呈し、深さは0.1m～0.4mを測る。埋土から土師器片が数点出土している。

## 4. 遺物

遺物はおもにSD1から多く出土し、包含層やピット等より若干認められた。

### SD1出土遺物

弥生時代後期から古墳時代前期の上器が多量に出土している。遺物は、壺・鉢・甕・高杯・器台に分け、壺・甕・鉢の底部のみの破片はまとめて掲載した。

壺(1～11) 1・2は小型丸底壺である。ともに口縁部の内外面にヨコナデを施す。1は口縁部を除き完形で、口径12.2cm、器高6.9cmを測る。3は直口壺である。口縁部がやや外方へ開き気味にのびるもので、口径9.3

cmを測る。内面はヨコ、外面はナナメに粗いハケ目を施している。4～9は広口壺である。4は口縁部が外方へ直線的にのび、頸部外面にキザミ目を持つ突帯を1条巡らせている。外面にナナメのハケ目を施し、口縁部は11.4cmを測る。5・6・8・9は外方へ大きく彎曲する口縁部を有する。5・9は端部を丸く取め、6・8は面を持つ。9を除いて体部はハケ目、口縁部はヨコナデを施している。7は口縁部が長くのびるもので、口径12.4cmを測る。10・11は二重口縁壺である。二段目は、10がより垂直に近く立ち上がり、端部は外へ肥厚するもの(10)と内へ肥厚するもの(11)に分かれる。口径は、10が18.0cm、11が22.0cmを測る。

鉢(12) 全体の半分以上に残している。口縁部は受け口状を呈し、端部に内傾する平面を有する。体部は上約3分の1に最大径があり、底部は小さな上げ底状を呈している。体部下3分の1から底部にかけて器壁が薄い。外面の頸より上にナナメの刺突



第2図 遺跡位置圖 (明治25年の地形圖)

列点文(7～8本単位の櫛)、頸部に直線文を意識した横位の刺突列点文(同上)、肩部に直線文(同上)、その直下に連弧文風の波状文(同上)を施している。外面の頸部以下にナナメのハケ目、他はヨコナデを施している。

甕(13～69) 出土土器中の最多数を占める。形態によって、A(受け口状を呈するもの、13～58)、B(口縁が外反するもの、59～65)、C(口縁が内彎するもの、66～69)に分けられる。Aタイプはさらに、A<sub>1</sub>(頸より上に文様の施されるもの、13～34)、A<sub>2</sub>(無文で直立するもの、35～46)、A<sub>3</sub>(無文で外反するもの、47～58)に分かれる。

A<sub>1</sub>タイプ 13は受け部下半と頸部にナナメの刺突列点文(5～6本単位の櫛)、頸に刻み目、受け部上半に鋸歯文を意識したヘラ描沈線(3条1組で列点文の後、山形に施す)などが施される。14～16、18～20、23～29は刺突列点文を受け部に施すもので、25と29は直線文を意識してヨコに、他はナナメに施される。21・22は原体がハケ状工具で、器面に原体を押えつけた後、引きずる様にして右方向へ施文を展開させている。頸部以下には波状を呈する直線文(6～7本単位の櫛、14・27)、簾状を思わせる直線文(ハケを細かく止めている、16)、21・22に見られたハケ原体の引きずる様な列点文(16)、直線文(ヘラ状工具による1条のもの、16・22・28)、刻み目(21・28)、直線文(櫛状工具による、本数様々、23・24)、刺突列点文(櫛状工具による、多くは受け部の列点文と同原体である、24・25・27・29)などが見られる。17は受け部に長さ3～4cmのヨコハケ、頸部以下はタテ・ナナメハケを施している。23の体部に見られるナナメハケは、左上がりを施した後、右上がりを等間隔に施している。25の頸部に見られる刺突列点文は、受け部のものと異った原体を使用し、密に埋めて施している。27の頸部下の刺突列点文は、単位が直線のものからコの字型を呈するものに変化している。原体は総て同じものを使用している。22と28の直線文は土器の割れた面近くに1条認められるため、原体が櫛状工具の可能性が考えられる。30は頸と頸部に一直線に並んだ刺突列点文(原体は櫛状工具と考えられるが不明)が見られる。31は頸に





第3図 ビット検出状況

キザミ目が施される。32は受け部に連弧文(クシ状工具)、33・34は同じく直線文(クシ状工具)が施されている。その他、頸部以下に33は刺突列点文(8本単位の櫛)と直線文(クシ状工具)、34は刺突列点文(7本単位の櫛)とその直下に連弧文(クシ状工具、単位不明)が施される。

A<sub>1</sub>の形態は、受け部が直立するもの(13・18~21・31・34)、内傾するもの(14~17)、外へ開くもの(25~29・33)、直立し端部が外反するもの(22~24・30・32)に分かれる。

A<sub>2</sub>タイプ 受け部が内傾するもの(35・36・46)、直立するもの(37~42・45)、外へ開くもの(43・44)に分けられる。いずれも頸部以下にも文様が見られない。口径は10.0cm~17.4cmに及ぶが、15cm以下のものが多い。38は、完形に近いもので、口径11.2cm、器高20.7cmを測る。体部はたて長の卵型を呈し、直径2.5cm位の平らな底部に至る。調整は、口縁部はヨコナデ、体部は内面ヨコハケ、外面タテ、ヨコのハケ目を施す。底部外面にヘラケズリが認められる。このタイプは内外面にタテ、ヨコのハケ目を施すか、ナデ調整が多く、体部内面に指圧痕を残すものも見られる。

A<sub>3</sub>タイプ 口径11.2cm~17.5cmを測る。頸の比較的しっかりとしたものからかなり退化したもので様々である。49は頸が外上方に張り出し、受け部が内傾した後には端部を外上方へつまみ出すもので、断面形がZ字状を呈する特異なものである。口径12.0cmを測る。52は頸から受け部にかけてゆるやかに内彎し、端部を外上方へ屈曲させている。30と同形態である。A<sub>3</sub>タイプは口縁部の内外面はヨコナデ、体部以下は外面にハケ目及びヘラ描き沈線斜格子に施したものが見られ、内面は未調整で指圧痕を多く残している。47は残存率が良く、ほぼ全形が観察できる。S字状の口縁部から体部は球形を呈し、底部は欠矢する。口径11.2cm、器高14.7cm以上を測り、体部最大径はほぼ中位にあり15.8cmを測る。体部外面にヨコハケ、底部外面にヘラケズリが認められ、他はヨコナデである。体部内外面には粘土紐の接合痕及び指圧痕が残っている。55~57は、体部外面に斜格子状の沈線(ヘラ描き、57はハケ原体か)が施される。

Bタイプ 頸部内面が鋭く尖る62・64を除いて皆、口縁部はゆるやかに外反する。63は端部に平面をもち、65は外方へ尖り気味に終わる。62は内側へ肥厚させ、他は丸く収めている。調整は、外面にタテ及びナメのハケ目、内面は口縁部にヨコハケを施す。口径は11.8cm~15.9cmを測る。65は体部中位よりやや上方に煤状物質が付着している。

Cタイプ 66~68は端部が内側に肥厚するもので、布留式と呼ばれる土器である。球形の体部を有し、66は外面にヨコハケの後タテハケ、内面は68と同じくヨコハケのヘラケズリが施されている。口径は66が14.8cm、67が15.6cm、68が17.0cmを測る。69は口縁部が外方へ大きく開いた後、上半分が内彎するもので、端部先端に沈線状の凹みができる。全面ヨコナデ調整が施され、内面下半が煤状物質付着のため黒色化している。口径22.2cmを測る。

底部(70~81) 壺か甕の底部と考えられる。70は脚台付き甕であろう。丸味のある体・底部に脚台がハの字状にまっすぐ開いて貼り付けられる。調整は外面脚台部分にナメのハケ目、他はナデであろう。脚台径は9.6cmを測る。71~80は平らな底部から体部下半がのびるもので、72の内面にヘラケズリが施される他は、タテ、ヨ

コのハケ目調整がほとんどである。74は外面にナメハケの後、太い棒状の工具でタテ方向に沈線を施している。71は外面に煤状物質の付着が認められる。底部径は3.2cm～5.5cmを測る。81は有孔鉢の底部である。底面中央に焼成前の穿孔が1孔認められる。孔は内外より穿孔されたものであろう。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明であるが、内面の孔周辺が黒色化している。底部径4.0cmを測る。

高杯(82～88) 口縁部を残すものは3点を数える。82はほぼ完存し、口径13.0cm、器高8.2cm、脚部径8.8cmを測る。杯部はほぼ平らで短い口縁部が外上方にまっすぐのびる。脚部は中空でラップ状に開き、端部は上方へ外反している。杯部内面に粗いナデ、他はナデ調整される。83は基部を欠失している。杯底部はやや丸味を帯び、口縁部に至って短く外反する。脚柱部は円筒形を呈し中空である。杯底部外面に粗いヘラミガキ、内面にハケ目が施され、他はヨコナデされる。口径18.0cmを測る。84は杯部のみの残存である。83と同様の形態を呈し、内外面にタテ、ナメのヘラミガキが施される。口径27.0cmを測る人型品である。85は杯部の口縁が欠失する。杯部は83・84と同形態と考えられる。脚部は中空で大きくラップ状に開く。内外面にタテ、ナメのハケ目調整が施される。脚部径は12.9cmを測る。82～85はスカシ孔は見られない。86～88は脚部のみの破片である。86は大きくラップ状に開くもので、三方に円形のスカシ孔が見られる。外面にタテのヘラミガキ、内面は裾部にヨコハケを施している。87・88は円筒形にのびた柱状部から、裾部がハの字状に開く。三方に円形スカシ孔が見られる。調整は、外面にタテのヘラミガキ、内面は裾部にヨコ及びナメのハケ目が施される。脚部は86が14.4cm、87が16.8cm、88が19.6cmを測る。

脚部(89) 高杯か器台の脚部であろう。外面にナメのヘラミガキが施され、脚部径は18.4cmを測る。

器台(90) はほぼ完存している。短い円筒形の柱状部の上下がハの字状に開く鼓形を呈する。受け部は端を下方に肥厚させ、平面を造り2個1組の棒状浮文を推定6ヶ所に貼り付けている。三方に円形のスカシ孔を柱状部と裾部の境に穿っている。外面はタテのヘラミガキ、内面は受け部のみヨコハケの後タテの粗いヘラミガキが施される。受け部径17.7cm、器高11.2cm、脚部径14.8cmを測る。

#### ピット出土遺物

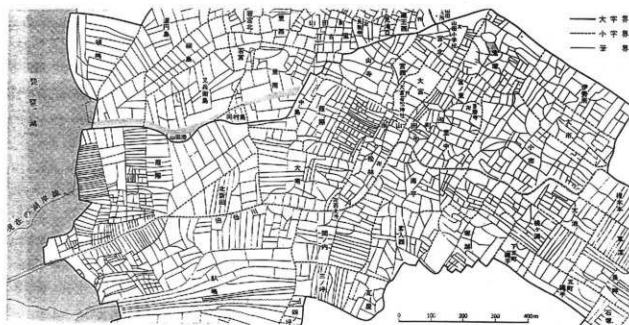
土師器が数点出土しているが、小片のため図ができなかった。

#### 包含層出土遺物

白鳳時代から江戸時代の遺物が出土している。これらはS D 1直上の灰褐色粘土層(白鳳時代から室町時代)とトレンチ南端の白灰褐色砂礫層(江戸時代)に分けられる。

灰褐色粘土層(91～94) 91は土師器皿である。底部を欠失しているが、口縁部は内彎気味にのび、端部を丸く収めている。外面底部を除いてヨコナデ調整されている。口径11.0cmを測る。92～94は土師器羽釜である。92・93は内彎する口縁部の外面端部より少し下った所に断面三角形の突帯が貼り付けられる。92は内面ヨコハケ、他はヨコナデを施している。92は口径27.0cm、93は小片のため口径不明である。94は外面に突帯を貼り付けられないものか、突帯の上部で破損したため認められないものか許かでない。内面ヨコナデを施している。92は外面に、94は全面に煤状物質が付着している。

白灰褐色砂礫層(95～97) 95は陶器の甕であろう。底部のみの破片で、断面方形の幅広い高台が削り出される。内面と外面の高台より上部に暗茶褐色の釉が施される。96は伊万里焼の甕である。厚手の器壁全面に透明な釉がかけられている。文様は外面に草花文が描かれている。97は伊万里の高高台茶碗である。丸味のある体底部に直立した細長い高台が貼り付く。釉は全面に施される。文様は体部外面に蔓草文、内面の見込みに圓線を1条巡らせ、その内側に銘が描かれる。



第4図 南山田町周辺の小字図（『草津市史』第一巻より転載）

## 5. まとめ

今回の調査では、面積が160㎡と狭いため、遺跡の性格等は把握できなかった。調査地区中央を横切る形で検出されたSD1は、幅11.5mの規模ではほぼ東西方向に流れる形状を呈している。この溝から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多量に出土している。調査地区の北端は砂層や砂礫層が見られ、試掘調査のNO.9トレンチ付近まで広がっていると考えられる。南は十二川が調査地区と接して東から西へ流れているため、こちらも氾濫の砂礫層に覆われている。No.9トレンチより北には粘土層が広がっているが、試掘調査の結果、遺構、遺物等は認められなかった。遺構面は、調査地区の中央部分の15m前後に限られているため、東西方向に延びてゆくものと推察される。SD1もほぼ東西を向いている。

当遺跡の東隣には、かつて大市神社が鎮座していたと『近江粟太郎志』に記載されている「塚之塚(塚越)」という小字が見える<sup>①</sup>。大市神社は古墳の上に祀られていたとされ、明治42年に大宮若松神社へ合祀された<sup>②</sup>。その跡地を大正2年に開墾した時、直刀・甲冑・鞍・轡・刀子・馬具の金具・須臾器の高杯・蓋杯・円筒埴輪の破片等が出土したと伝えられている。これらは6世紀後半頃のもので、現在東京国立博物館に収蔵されている<sup>③</sup>。大市神社跡古墳は現在消滅して、所在は明らかではないが、明治25年の地形図に御倉と南山田の集落の間に神社が記されている。その位置が小字塚之越に含まれることより、大市神社であろうと考えられる。また、南約200mには御倉遺跡が位置している。弥生時代後期～古墳時代前期初頭の方形周溝墓、平安時代の掘立柱建物跡などが検出されている<sup>④</sup>。また、子守神社周辺の調査でも古墳時代前期～中期の遺物を出土する土壌が検出されている<sup>⑤</sup>。北畠遺跡でも古墳時代前期～中期と平安時代の遺物が旧河道から多く出土している<sup>⑥</sup>。

このように、山田港遺跡の周辺に位置する遺跡は、古墳時代前期初頭～中期と平安時代の遺構、遺物を多く検



第5図 近江県太栗郡太栗町（『近江県太栗志』より転載）

や遺構の状況から、調査地区は遺跡の中心部分を東西どちらかに外れているものと推測できる。その位置は、周辺遺跡の調査状況から東方により高い可能性を残していると言える。現在すでに消滅している大市神社古墳は6世紀後半頃の古墳であり、昭和61年度に調査が行われた御倉遺跡の掘立柱建物群や土壇群と同時期である。周辺の古墳群もほぼ同時期と考えられる。当遺跡のSD1は、これらの古墳群へ継続してゆく時期の遺構として存在する御倉遺跡の方形周溝墓とはほぼ同時期のものであり、大市神社古墳が築造される以前の当遺跡を解明する手がかりとなる遺構であろう。

出していることがわかる。当遺跡のSD1は古墳時代初頭を中心とした遺物が出土しており、御倉遺跡の方形周溝墓とはほぼ同じ時期に存在していたと言える。山田港遺跡は、山田港に関する遺構や遺物は検出できなかったが、古墳時代初頭の土器を始めとして、中・近世に至る遺物が包含層から出土している。これらの遺物は、包含層からの出土と言うこともあり、数量も少ない。しかし、遺構面

注

- ① 高橋誠一「第4章 朱里と荘園」（『草津市史』第1巻 草津市役所 1981年）360～361ページに掲載されている小字境界図によると、湖岸に近い小字は地割が大きく朱里と異った方向を持つものが多い。
- ② 滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会（『志那・北山田湖底遺跡調査報告書』1985年）
- ③ 大橋信弥「矢橋湖底遺跡第2次調査」（『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団、琵琶湖開発事業建設部 1984年）
- ④ 滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会（『昭和60年度滋賀県遺跡地図』1986年）これ以降、特に注記しない遺跡については、これによる。
- ⑤ 草津市教育委員会（『市内遺跡分布調査報告書』草津市文化財調査報告書8 1984年）
- ⑥ 大橋信弥「草津市矢橋町、観崎神社境内古墳群調査報告」（『昭和四十九年度滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会 1976年）
- ⑦ 滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会（『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—御倉・北萱地区—』1986年）
- 滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会（『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報2—御倉・北萱地区—』1986年）

87年)

- ⑧ 藤居 朗「御倉遺跡発掘調査概要」(『草津の古代を掘る』昭和61年度草津市遺跡発掘調査報告会 草津市教育委員会 1987年)
- ⑨ 滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会(『近江大橋有料道路建設工事に伴う草津市墓ノ町遺跡発掘調査報告書』1986年)
- ⑩ 藤居 朗「中畑遺跡発掘調査概要」(『草津の古代を掘る』昭和61年度草津市遺跡発掘調査報告会 草津市教育委員会 1987年)
- 小宮監寺「第Ⅳ章 中畑遺跡発掘調査概要報告」(『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ 草津市文化財調査報告11 草津市教育委員会 1986年)
- 三宅 弘「中畑遺跡の調査」(『滋賀文化財だより』NO.120 (財)滋賀県文化財保護協会 1987年)
- ⑪ 大橋昌亮「第2章 草津市長安寺遺跡」(『はつ巻備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ 滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1978年)
- ⑫ 滋賀県教育委員会(『昭和五十四・五十五・五十六年度滋賀県文化財調査年報』1983年)
- ⑬ 金田原裕「第5章守護文配下の草津」(『草津市史』第1巻 草津市役所 1981年)
- ⑭ 滋賀県教育委員会によって、昭和62年10月に試掘調査が行われている。
- ⑮ 滋賀県栗太郡役所(『近江栗太郡志』巻三・大正15年)
- 滋賀県栗太郡役所(『近江栗太郡志』巻四 大正15年)
- ⑯ 小笠原好彦「第2章 黎明期の草津」(『草津市史』第1巻 草津市役所 1981年)
- ⑰ 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会(『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報3-御倉・北堂地区-』1988年)
- 谷口智樹「御倉遺跡発掘調査概要」(滋賀県埋蔵文化財センター、スライド会資料・1988年)
- ⑱ 小宮監寺「第Ⅲ章 御倉遺跡発掘調査概要報告」(『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ 草津市文化財調査報告11 草津市教育委員会 1986年)

版 圖



1. 調査前風景



2. 表土除去作業



1. トレンチ全景 (北から)

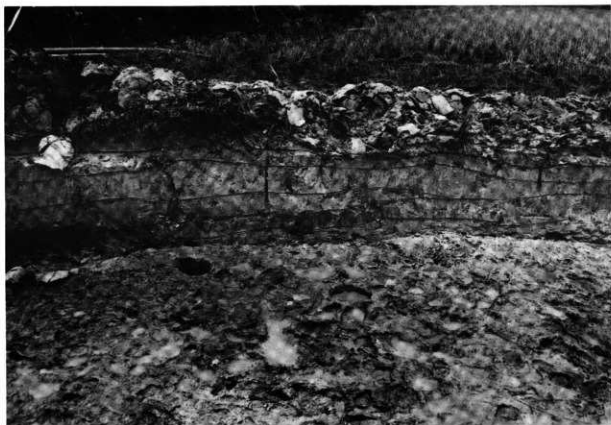


2. SD1検出状況





トレンチ全景（南から）



1. トレンチ西断面 (SD1北肩付近)



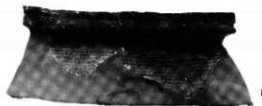
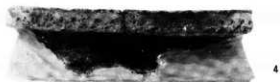
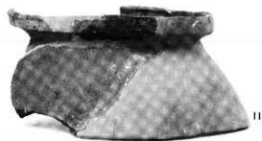
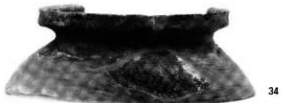
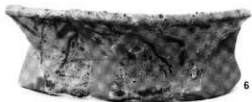
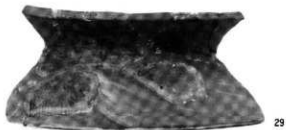
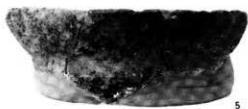
2. トレンチ西断面



1. トレンチ南断面（深掘り）

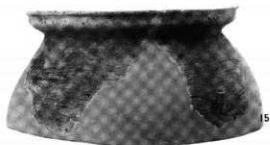
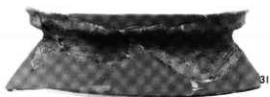
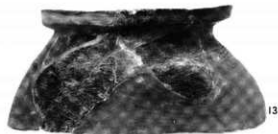


2. 埋め戻し後風景



遺物写真 (SD1 出土遺物)

遺物写真 (SD1 出土遺物)



遺物写真 (S D 1 出土遺物)

遺物写真 (S D 1 出土遺物)



遺物写真 (SDI 出土遺物)

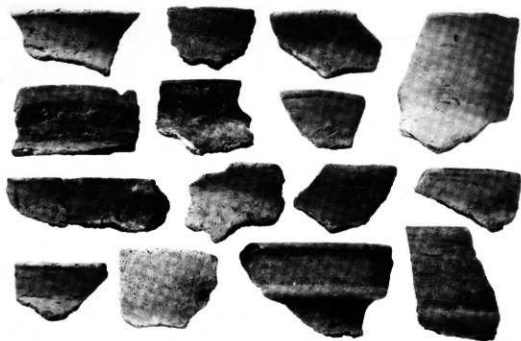
遺物写真 (SDI 出土遺物)



21

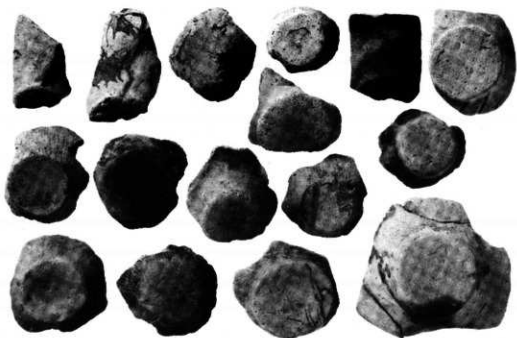


24



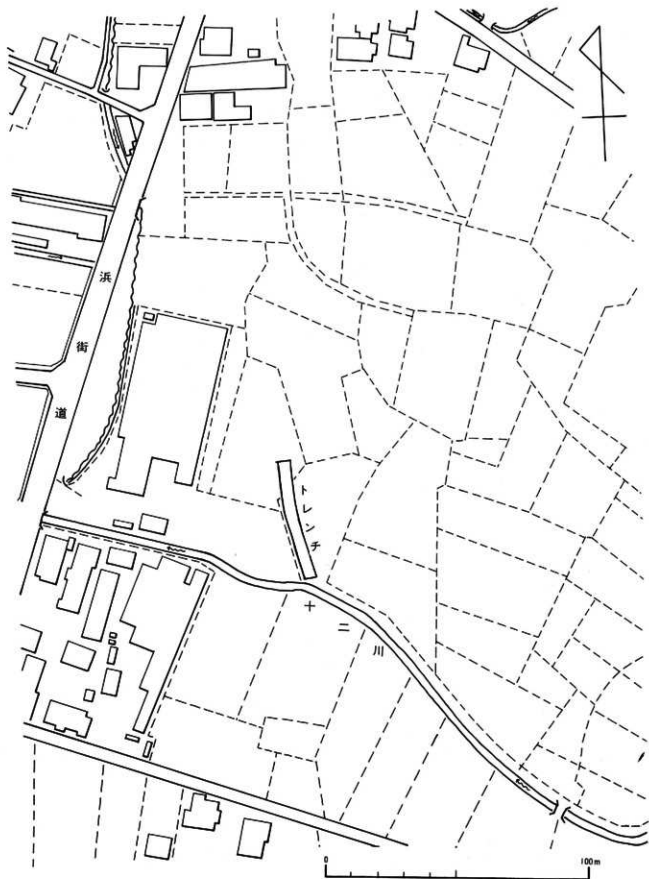
遺物写真 (SDI 出土遺物)

遺物写真 (SDI 出土遺物)

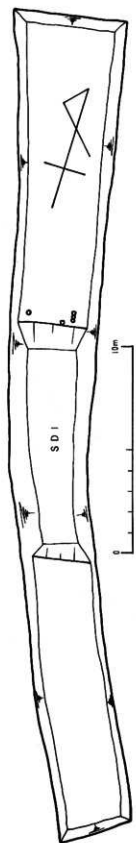


遺物写真 (SD1出土遺物)





トレンチ位置図



トレンチ平面掘削図

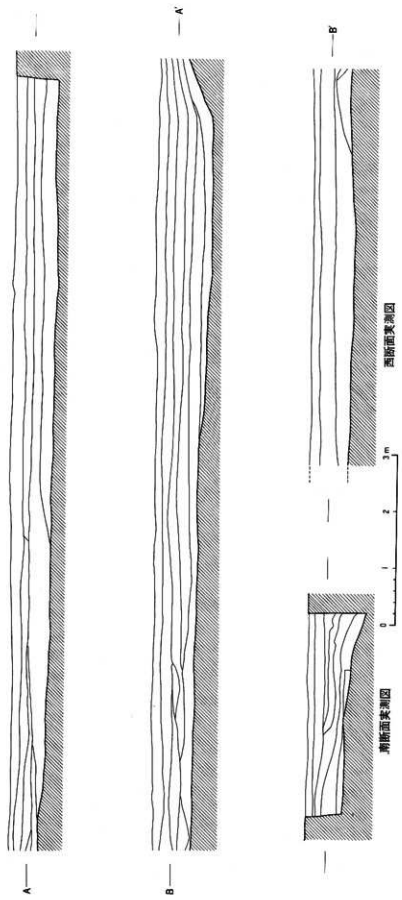
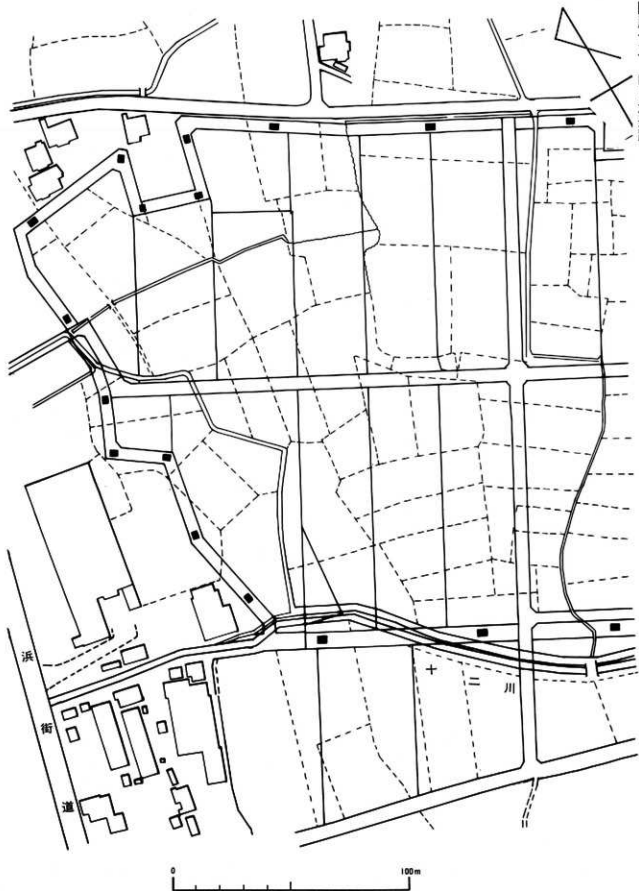
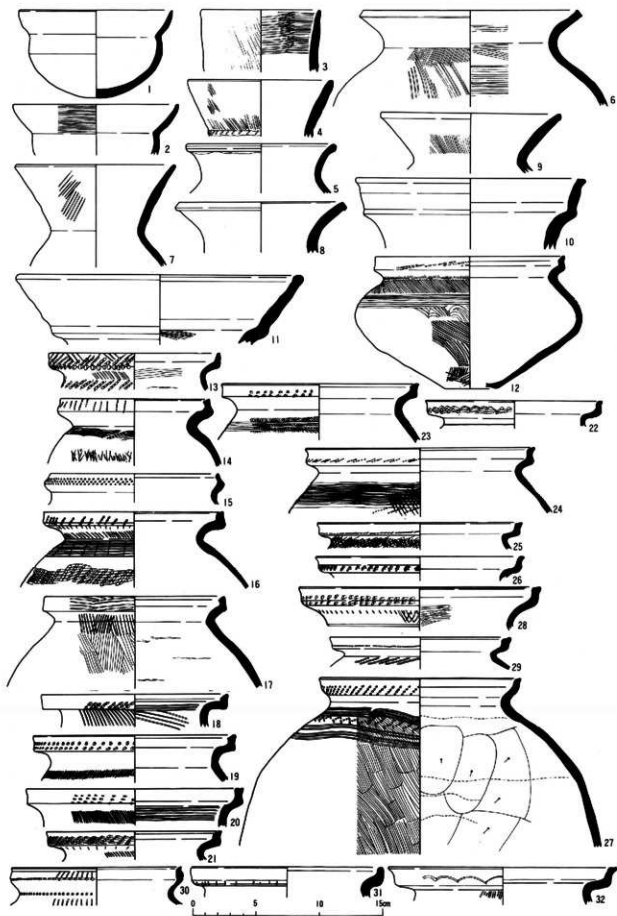


図 高家橋断面図

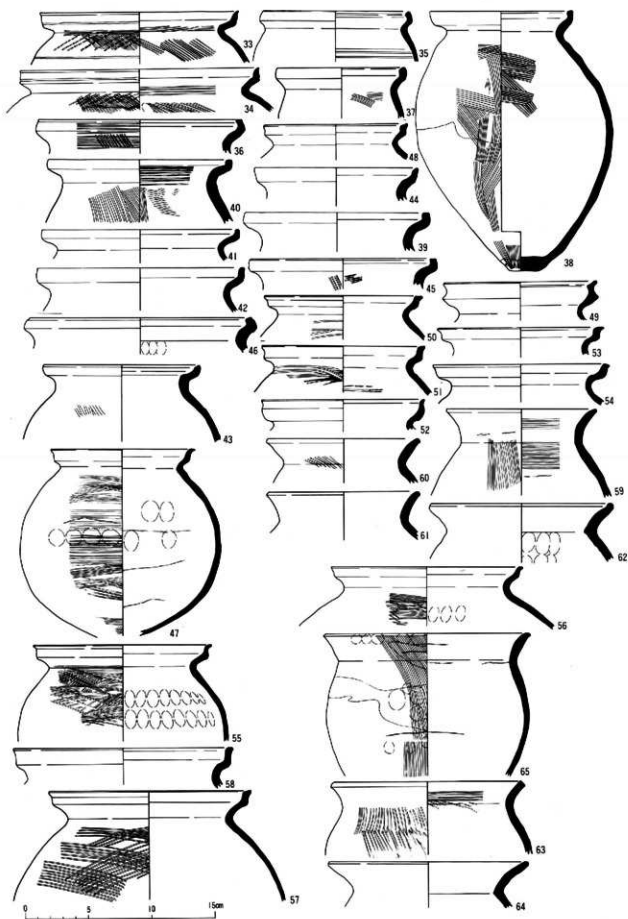
図 新橋断面図



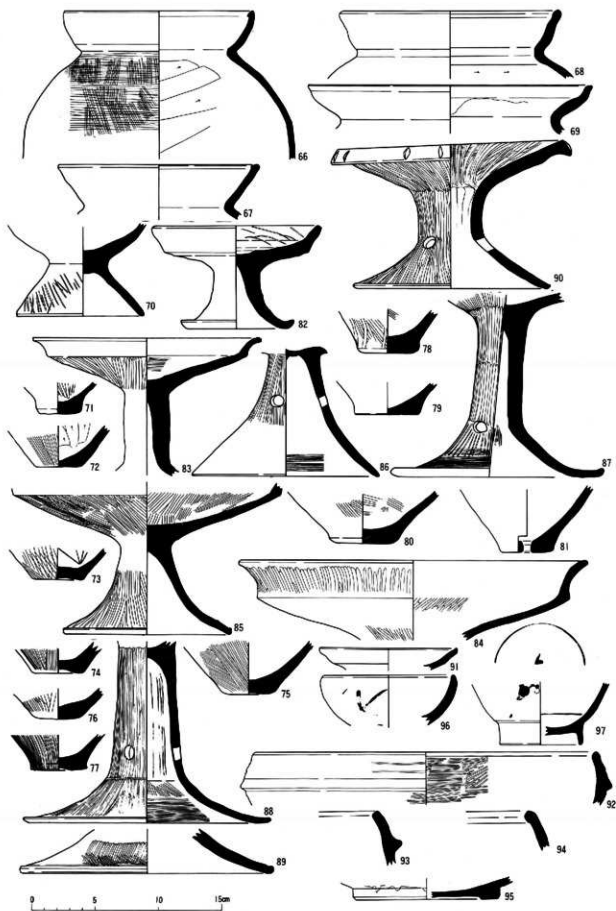
試掘トレンチ位置図



出土遺物実測図



出土遺物実測図



出土遺物実測図

---

昭和63年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XV-4

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財  
保護課

大津市京町四丁目1番1号  
Tel(0775)24-1121(内線2536)

財団法人滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社  
長浜市朝日町22-16  
Tel(0749)63-1441(代)

---